
チェイン

HERMES

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チエイン

【Nコード】

N1495E

【作者名】

HERMES

【あらすじ】

科学も発達していながら、魔法も当たり前にある世界。そんな中、アカデミー軍事学園で日々を過ごす青年達。いつ戦場に駆り出されるか分からない状況の中、流れるままに、ただ漫然と生きていた彼ら。だが、ひよんなことから物語は回り始めた。訓練中の突然の乱入者によって……。成績は平凡なセシルや、天才肌のマールなどが織りなす、軍士候補生達の青春群像劇。

序章：セシルとマールの縁

人間の記憶ほどいい加減なものはない。ほんの数分前のことを忘れることもあれば、何年も前のことを覚えていたりする。

どうでもいい事ほど良く覚え、覚えなくちゃいけないことを忘れる。実に不器用なものだ。

だが、いつまでたっても覚えている記憶というのものもある。自分の最古の記憶は何だろうか。

「お前にこれを渡そう」

父は言った。

それが何なのか、子供には初めて見るものだった。

「お守りの指輪だ」

「ゆびわ？」

父親からの最初で最後の贈り物。

まだ子供の指には大きすぎる、大人サイズの指輪。

「まだお前には大きいだろっ、いつか大人になったら使いなさい。それまで大事にとっとくんだ」

その言葉に、素直に頷いた。

曖昧で、今にも消えてしまいそうだけど、ずっと心の奥にある最古の記憶。

彼は、手のひらの指輪を転がしながらそんなことを考えていた。

月 日、晴れ。

「雲一つない空が広がっている。
今は夜なので、青空は見えない。
でも、満天の星空が見えた。」

それをぼーっと見つめていた。男が一人。

「あいつどこいったんだろ」

連れとはぐれて山の中を彷徨っていたが、開けた場所に出て空を眺めていた。

このまま先に帰ろうかとも思ったが、さすがにそれはまずいと思
い直す。

その時、

遠くの方で獣の雄叫びが聞こえた。

どこかの山中。月の光だけが輝く夜の闇の中、一人の女が立っ
ていた。

背中まで伸びた茶髪が風に揺れ、珍しいエメラルドグリーンの瞳
が、闇のさらに深いところを見据えていた。

「さっさと来なさい」

挑発的な笑みを浮かべ、女は言う。次の瞬間、暗い森の奥から、
闇色の獣が現れた。犬とも猫ともつかない不気味な獣。

カゲとよばれる魔獣が三体、向かってきたが女はそれに慌てるこ

とはない。

手も足も動かさない。動かしたのは、唇だった。

「……招雷」

魔法の言葉が紡がれる。雷が女の周囲を包みこむと、間を置かずに炸裂して四方八方に飛び散った。青白い光に貫かれ、黒い獣は悲鳴を上げることもなく粉碎された。

魔獣にはほとんど知能はない。

ただ本能のままに、獲物を見つければ襲いかかって食らうという生き物だ。統率された動きというものはなく、一匹一匹が好き勝手に襲いかかってくるだけだ。

続いてまた何体か現れるが、結果は同じだった。女が対処に困ることはなかった。

「これでラストね」

最後は、腰に付けていた銃を抜き、撃ち抜いた。パシュツ、と空気の漏れる音がしたかと思えば、カゲは跡形もなく消えていた。

全部で13体のカゲの討伐は完了した。

「ふうーしんどかった」

全然しんどくなさそうに呟いてから、近くの切り株に座って一息ついた。

女の名は、マール・アイボリーと言った。

マールは生まれてからずっと同じ事を繰り返してきた。魔法を操り、銃を使い、敵を仕留める。

先祖が大魔法使いだったらしく、昔から魔獣の討伐やら戦争やら何やら、物騒なことを家業としていたらしい。

そんな家に生まれついたマールも当然のように、何百年も前の先

祖と同じことをやっている。

昔と変わったことと言えば、学校に行くようになったことだ。といっても、普通の学校ではない。

「おい、マール。ここにいたんか」

カゲがいたところは反対側の森の奥から、男が現れた。手に銃を持っているが、別に怪しい者じゃない、マールの知ってる男だ。

「うん、終わったから休んでたのよ」

「んじゃ帰ろっぜ。こんな危ないところにいつまでもいたくねえよ」

「ん、怖いのか セシル？」

からかうように問う。それに一瞬苦い顔になって

「そりゃ怖いさ。どっから魔獣が出てくるか分からんし。お前ぐらいだろ、何が来ても怖くねえってのは」

マールは少し困ったような顔をし、笑った。

「本気出しなさいよ、あんたも」

「……俺はいつでも本気だよ」

気のない返事で口元だけ笑い、マールより先に森の出口へと進んでいった。学園への帰り道を。

ただし、普通の学校ではない。魔獣狩りや兵士を育成する、国立の軍事訓練校だ。

毎年、この国の正規軍に何人も輩出され、卒業生は皆高い実力を誇っている。兵士にならなくても、傭兵や魔獣の駆除など、荒事の処理を専門にやっている者は多い。

「でも、ま。魔獣が相手ならまだましよね」

「戦争よりかはな……」

そんな物騒な学校に通う、マール。そしてもう一人の男。
男の名は、セシル・クラフトと言った。

序章・セシルとマールの縁（後書き）

これから頑張ります。

序章 2：青い空、飛び交う銃声

大きな大陸の中に、五つの大国がある。

アルバート、ライスコーフ、リア、エルフィ、グラムの五つが、それぞれ何百年かまで領土争いやなんやらで争っていたが、今はどこの国も停戦中で割と平和な時代が続いていた。

とは言え、あくまで停戦なので、何がきっかけになって再戦するかも分からない。五大国はそれぞれ軍とその下流組織を置き、そのパワーバランスを保って過ごしてきた。

その下流組織というのが、軍事養成学園。いわゆるアカデミーである。

山を下り、”アルバートアカデミー”と書かれた看板を見て、ほとと胸をなで下ろした。二人にとって、家と言えばこの学園だ。

セシルは眠そうに、マールはめんどくさそうに学園に入っていく。魔獣討伐の”演習”が終わったことを、報告に行くのだ。

「全部マールがやったんだから、お前だけ行けばいいじゃん」

「全部あたしがやったんだから、最後ぐらい働きなさい」

押し問答の末、結局二人で行くことになった。報告が終わると、あとは評価が出るまで待つだけだ。こういう積み重ねが、成績として残っていくので手は抜けない。

「お前らが一番乗りだ。まあ君が付いてればそうなるか」

「はあ、どうも」

そう言って愛想笑いを浮かべる。教官はマールの方だけを見ていた。

家柄が家柄だけに、マールはこのアカデミーでは特別な存在だった。生まれるべくして生まれてきた、戦闘の天才。そういう血筋の人間なのだ。

その横で、セシルはつまらなさそうな顔をしていた。

「じゃあ次の演習も頑張れよ」

次の演習まではかなり時間があつた。ひとまずクラスに戻ることにした。

一応学校なのでクラスや授業、昼休みなんてものもある。

周りは休憩時間ということもあり、喧騒であふれている。

だが彼はそんなことなど気にもとめずにただぼーっと空を見ている。雲一つない快晴だ。

ここのところずっと晴れだ。

「今日も空が青いなあ……」

「セシル、何ぼーっとしてるの？」

気がつくともマールが目の前に立っていた。

彼、セシルは上を向いていた顔を彼女の方に向けて

「ん、この間借りた金なら今は諦めてくれ。今月はピンチなんだ。悪いな」

全く悪びれる様子もなく言う。

「あんた、一体いつになったら返すのよ！」

マールは呆れていた。

「それに今はそのことじゃなくて、もう次の訓練が始まるって言うとしたの」

「もうそんな時間かあ。めんどいな」

いつのまにやら周りの連中はそろそろと動き始めていた。セシルは立ち上がるとだらだらと訓練所まで歩いていった。

ここ、アルバートアカデミーは兵士育成学園だ。ここを卒業した優秀な者は傭兵になったり、軍の幹部に所属したり、特殊部隊に配

属されたりしている。だがそれだけに訓練は厳しく、気を抜くと大怪我をすることもある。

「ねえ、マール。何であんな無気力男に構うの？」

一緒にいた友人が訪ねる。

クラスに、やる気のない男ランキングがあれば、間違いなくセシルが一位だろう。マールは一瞬だけセシルと初めて会った時のことを思い出した。あの時と今で、変わったものはあまりない。

「さあねー。腐れ縁てやつかな」

「ふーん……」

何か言いたそうな様子だったが、時間もないので足早に訓練所に向かっていった。

「えー今日の訓練は銃です。向こう的を狙って撃って下さい。じやあ適当にどうぞ」

教官は投げやりな態度でそう説明するとさっさと部屋の奥に引込んでしまった。これで給料を貰っているのは月給泥棒じゃないかと感じている生徒も少なくはない。だが、ここに日々説明してくれる親切な者などいないことはとつくに承知だった。

「次、マール・アイボリー」

「はい」

言われてマールが取り出したのは愛銃”エア・アンカー”。

狙う標的は、ゴムのような性質を持った特殊合金製の的だ。

人型に作ってあるが、人体の何倍もの強度を持つ。堅いだけでなく、シヨック吸収や反発性も備えた優秀な素材だ。

シユツ…という空気が漏れるような音がする。この銃には不思議なことに銃声はほとんどない。それぞれ頭に一発、心臓辺りに2発

の穴が開いていた。そして更に的を貫いて向こうの壁にも穴が開いてしまっていた。

「相変わらず凄い威力ね」

「ライフルでも貫通できない特殊合金を簡単に……とんでもないな」
クラスが少しどよめきに包まれた。

「次、セシル・クラフト」

「うーす……」

セシルの番。使っているのは普通に売ってある安物の銃だ。

相変わらずぼーっとしたままゆっくりと構えて、そのまま撃つ。

バンバンバン、と、三発の銃声。肩に一発、太股辺りに一発、そしてもう一発は外れていた。

「お前はもう少しマールを見習え」

「はいはい」

教官の嫌みを右から左へ聞き流して、あとは見物することにした。少し離れた木陰の芝生に腰を下ろし、ぼけーっと他の優秀な生徒達の訓練を見つめる。

「ちよつとセシル」

マールがやってきた。少し怒っているようで、眉毛がっぴり上がっている。セシルは他人事のようにそんな様子を一瞥すると

「なんだよ。エリートさん」

「なによあれは！ ちよつとは頑張らないと退学になるわよ」

「あー、そりやいやだ。まだ働きたくねえ」

手を後ろに組んでごろん、と横になった。その様子にマールも怒る気をなくしたのか、ため息をついて隣に座った。

まだ訓練は続いている、銃声と的に当たる音が少し遠くに聞こえる。驚くほど静かな時間だ。

「とても、殺しの訓練をしているとは思えないのどかさよね」

それは、現実を知っているからこそその言葉。幼い頃から見てきた血、死体。大規模な戦争こそなくなったものの、一部の過激派によ

る小競り合いや悪党の蛮行は無くなることはなかった。そして魔獣……。村の半分が凶悪な魔獣に食われてなくなるなんて事件も目撃したことがあった。

アルバートアカデミーの生徒達は、いずれそういう場所に行き、戦うのだ。

「戦場か……。やっぱり俺たちもいつかそこに行くんだよな」

「そりゃそうでしょ、私達はそのために訓練を受けてるんだから……まあだからって戦争に行きたい訳じゃないけどね」

皮肉なものだ、とマールは思う。もちろん本当は平和を望んでいる。だが自分の仕事は戦場で戦うこと、それが存在意義。それがなければ自分には何もない。そうなるまるとまるで戦争によって生かされているような、そんな気分になる。特に自分は。

「今はこの国も停戦してるから、しばらくは大丈夫って言うってたけどな」

「どうかしらね」

訓練が終わったのを見て、マールは立ち上がり、集合場所に歩き出した。それにセシルも続く。

どこまでも青い空が広がっていた。

仲間達は楽しそうに笑い、お互いの訓練の成果を話し合っている。だが、彼らはいずれ知ることになるだろう。自分たちの存在意義を。

そして人はまた、同じ過ちを繰り返そうとしていることを……

序章 2：青い空、飛び交う銃声（後書き）

やっとプロローグが終わりました。次から本番です！

第一章 1話：魔法と魔獣と人間達（前書き）

（あらすじ）アルバートとという国のアカデミーに、セシルとマー
ルという二人がいました。セシルは凡才、マーは天才でしたが、
何故か二人はよく絡みます。

第一章 1話：魔法と魔獣と人間達

アルバートは今日も快晴だった。

太陽の光がカーテンを突き抜けて部屋に差し込み、小鳥のさえずりが聞こえる頃、セシルは布団から起きあがった。

そして、あとは毎朝同じ事を繰り返してきた体が勝手に動いた。顔を洗って歯を磨いて、パンをトースターに入れて、その間に着替える。

「ん……朝かあ」

パンが焼けあがる頃、セシルの意識はようやく完全に覚醒した。

一人暮らしが長いと、ついつい朝ご飯も適当になってしまう。

他の寮の者達は、それぞれ自炊をしていることが多いのだが、セシルは一度として自炊をしたことはなかった。

たまた、誰かが差し入れに持ってくる料理がなければ、ずっとインスタント食品を食べて生活することだろう。

アカデミーの寮には、生徒が何不自由なく生活できるように、必要なものは全て揃えられていた。洗濯物が干せる広いベランダもあり、かなり快適な環境だった。

それもこれも、アカデミーの生徒が万全の体調で訓練をこなせるようにするためである。

パンを食べ、一息ついたところでセシルは自分の部屋を出る。そして、一歩外に足を踏み出した。

「よお、セシルか。おはよう」

そこで横から声をかけられた。

隣の部屋のディムが、ちょうど同じぐらいに部屋を出てきた。

「あーおはようさん。てか、全く同じタイミングで出てくるなよ気

色悪い」

「知るかよ。たまたまだろ」

二人は同じクラスだった。だから行き先も一緒だ。軽口を叩きながら、教室へと向かう。

「てかさ、お前マールとどうなんだよ実際？」

「どうって何が？」

「なんであの天才とお前がいつも一緒にいるのかってこと」

マールの名前は、アカデミー中に響き渡っていた。そして、何故かいつもその隣にいるセシルのことも。

「さあー。ただの腐れ縁だし」

「腐れ縁て？」

「まあいろいろと……」

セシルはそれ以上は語らずに、話題を切り換えた。

「今日って何の授業だった？」

「魔法の学科だったろ。今まで実戦で魔法使う訓練ばっかやってたから、学科は久しぶりだよな」

「ええ……魔法とかいいだろもう」

セシルは嫌そうな顔をした。ディムはそれに呆れて

「お前な、軍士が魔法使えなくてどうすんだよ」

軍士、というのは一般の軍人の更に上の階級に位置する、特別な兵士のことだ。

等級で区別され、一級軍師ともなるとたった一人で並の軍隊なら丸ごと潰せるほどの実力を持ち、その国の最大の戦力になりえる力を持つ。

アカデミーとは詰まるところ、この軍士を育成するのが目的だ。

本来なら軍人として何年も研修やら訓練やらを受けるのだが、アカデミーを卒業して軍に配属されると、自動的に軍人を飛ばして軍士になる。

「軍士とか別に興味ないけどなあ。俺は」

だがそれとは裏腹に、セシルは全くやる気もなさそうに呟いた。

「まあ別に軍士にならなくても就職とか便利だろ。……教室着いたな」

二人はそれぞれ自分の席に着く。しばらくして授業が始まった。

「はい、みなさん。今日は魔法についての講義です」

担任が授業を始めようとしていた。このアカデミー最年少教官である、テアナだ。

見る者を安心させる穏やかな青い目、赤みがかかった淡紫色で肩にまでかかった滑らかな髪。ほんわかした印象の女性教官だった。

テアナはさっそく授業を始めた。

「普段、演習や訓練で魔法をよく使っていると思いますが、そもそも何で魔法が使えるんでしょうね？」

教室全体に問いかける。

だが、生徒達は首をかしげるばかりだ。テアナは説明を続けた。

「実はそれは分かっています。ただ、何百年も昔、突然使えるようになった人がいたそうです。私たちは、そんな人達の子孫。だから魔法が使えるというわけです」

「突然使えるようになった？ ってどういうことですか？」

生徒の一人が手を挙げて質問した。

「そうとしか言いようがない、としか伝えられています。大昔、今まで魔法など使えなかった人達の中に、突然魔法が使える世代が現れたそうです。体内にある気を練り、超常現象を起こす力、それが魔法です」

テアナは、黒板にずらずらと要点を書き連ねていった。

たぶんテストに出るだろうということで、周りの生徒は真剣にノートをとっている。

黒板に書かれていく魔法の理論をセシルは退屈そうに見ていた。

「魔法は、大きく分けて二つに分類されます。“流動魔法”と“固定魔法”です。一般的に言われる、呪文を唱えて発動するものが流動魔法です。火や雷や風を生み出す、普通の魔法ですね。例えば…」

「…」
テアナは即興で、一番簡単な魔法を唱え始めた。

「……火柱」

すると、目の前に小さな炎の柱が生まれた。ボア、と天井近くまで燃え上がると一瞬で消えた。

「まあ普通の魔法はこんな感じですよ。込めた魔力の分だけ威力も増します。使った魔力の分消費すれば、消えます。」

「これが普通……なんですけど、もう一つの固定魔法、これが少し特殊なんですわ」

テアナは黒板に固定魔法、と書く。そしてそれについての説明を始めた。

「通常の魔法というのは、発動するまで形には表れないものです。しかし、固定魔法というのは、形ある魔法。魔力が結晶化した道具であり、一発で終わる流動魔法とは比べものにならない強力な魔力が秘められています。そして、その効果も絶大です。……マールの持つ『エア・アンカー』もその固定魔法の一つですわね」

生徒の目が、教室の真ん中のほうの、マールの机に置いてあるエア・アンカーに集中した。

見た目には、拳銃にしては大きめのごつい銃だ。だがこれはマールの家に伝わる、由緒正しい固定魔法なのだ。

「固定魔法、というのは確認されている数が非常に少ないのです。大抵は、国宝やらに指定されて一般の目に触れることはありません。大昔に作られた遺産らしいのですが、今ではその作成技術を再現できる人はいません。マールが持つてるのも、貴重なものですよ」

自分の持っているものが宝、と言われてマールは苦笑した。

所詮、武器は武器だ。大事に飾っておくようなものじゃなく、実戦で使つてこそ活きるのだと思つている。実はエア・アンカーは、マールが15歳の時の誕生日プレゼントだった。あれが、ようやく一人前だと認められた証だったのだろうと、今になつて考える。

「固定魔法は強大です、使い方次第ではとつもない力を生み出します。固定魔法それ自体が、国の力そのものになることもあります……分かりましたか、セシル？」

「……え？ ああ。はい……」

セシルは突然当てられてしどろもどろになる。

ほとんど右から左に聞き流していたのがばれたのだろう。

その後、他の生徒がテアナに当てられたりして、授業は滞りなく進んだ。

外を見ると、全く呆れるぐらいの青空だ。このアルバートは、晴れの日と同じぐらい雨が降るのだが、今年はそれがあまり無い。雨が降らなくて大丈夫か、なんて心配をするほどだ。

だが、水の蓄えは十分あるので、水不足と言つことはないだろう。ぼーっと空を見ているだけで、時間は過ぎていく。セシルはぼーっと空だけを眺めていた。

「……さて、お話はここまでにしておきましょう。明日、みなさん
に実戦訓練を行つてもらいます。魔法を使った、対魔獣戦の演習です」

テアナの言葉に、教室がざわめきだした。実戦訓練……この間、魔獣討伐の演習を終えたばかりで油断していた生徒達が大勢いたよ
うだ。

「明日の昼、第一演習場まで行つて待機してください」

そして、授業終了のベルが鳴った。

伝えることだけ伝えて、テアナはざわめく教室を後にした。

「実戦訓練かあ。やべえじゃん、魔獣相手とかこないだも結構苦戦したのになあ」

「あたしも、仲間に助けてもらってたから一人だと厳しいわあ」

「魔獣にはあんまり銃や他の武器は効かないって話だよ。高レベルの魔法じゃないと厳しいって」

そんな声が教室のあちこちから聞こえてくる。みんな、必死で対策を練ろうとしているか、仲間と組んで演習をこなそうとするか、慌てて今から訓練をやるうなどと言い出す者など、様々だ。

一方、マールは慌てた様子もなく、教科書をまとめて教室を出ようとしていた。そこを、呼び止める声もあった。

「ねえ、マール。明日はあたし達と組もうよ」

「いや、俺らのチームに入ってくれよ。礼はするからさあ」

「お前ら物で釣ろうとするなよ。なあ、マール。君と釣り合つのは僕らのチームぐらいのもんさ。一緒にやろうよ」

必死で誘われるのも無理はない。固定魔法をもち、アカデミーで最強の実力を誇る生徒と言えば彼女だからだ。

だが、その全てをやんわりとかわして、マールは教室を出た。

そして丁度出たところに、壁にもたれているセシルがいた。

「人気者だよなあ、相変わらず」

セシルはからうように笑いながら声を掛けた。

「最初から人に頼ろうとする魂胆が丸見えなのよ、うんざりするわ」
「本当にうんざりした顔で語り、歩き出した。セシルもそれに続く。」
「んで、あんたはどうすんの？」

「俺は……どうすつかね。まあなんとかなるでしょ」

「魔法使えないのに？」

「魔法なんているかよ、くそつたれ」

周りの人間が、幼い頃から魔法の力に目覚めて使っていたにも関わらず、セシルは全く魔法が使えなかった。

それはもう、どれだけ力んでも魔法が出る気配すらないのだから重症だった。だから、魔法の話題が出るとセシルは拗ねるのだ。

「これで十分だつて」

セシルは、腰のホルスターに下げてある銃を指差した。

魔法が使えない分を、在庫処分セールで買った安物の銃で補うつもりらしい。

マールは、それにため息をついて

「やれやれ……んじゃ、行くわよ」

「え、どこに？」

黙って歩き出すマールに尋ねる。

「シャワー室よ」

「……なんで？」

「まあいいから、早く来て」

そう言われ、そのままスタスタと歩いていくマールの後をしかたなく追う。

マールは二人で話をするときには、誰もいないところまで連れて行ってから話を始める。たいがい、他の人には聞かれたくない話の時代。セシルはもう慣れたもので、特に理由も聞かずについていった。そのまま、本当に女子シャワー室の近くまで来て、マールは止まった。

周りに人は、誰もいない。

「覗きは駄目よ……一緒に入る？」

マールはニヤニヤしながら前でシャワーの前で軽く通せんぼをした。

「の、覗くのはなしで、一緒に入るのはありなのかよ」

「見られるのと見せつけるのは違うのよ。好きな人に裸を見せつけるくらい、何でもないわ」

「恥じらいを微塵も見せず、あまりにも堂々と言うものだから、セシルはたじろいだ。」

「……え、ええつと。それはつまり……」

「冗談よ。何赤くなってんのよ」

「マールがさつきとは変わって、ゴミを見るような嘲笑を浮かべているのを見て、セシルは恥ずかしいやら敗北感やらでゲンナリしていた。」

「そんなこんなで、軽くからかいながらも、マールは話を切り出した。」

「んなことより、明日はわたしと組みなさい。今回はけっこうやばそうだし」

「やばいつて？」

「人工魔獣が、あの森の中にわんさかいるのよ。テアナ先生が魔法で創ったんだと思うけど。それで、銃が効かないように創られてるみたいだから、魔法が使えないあんただと……死ぬかも知れないわ」

「重傷を負ったり死者が出ることは、アルバートアカデミーではそこまで珍しくもない。演習だと特にほぼ実戦のようなものなので、怪我人は毎日のように出ているし、再起不能者もたまにいる。死者が出ることは稀だが、ないこともない。」

「魔法しか効かねえ、って俺に対するいやがらせかよ……。死ぬのは嫌だしな。てか、何でそんなこと知ってるんだよ？」

「天才だからね」

「答えになつてないが、答える気もないのだろう。セシルは諦めた。「んじゃ、また明日の昼に。わたしはもうチーム組んでるから、セシルも合流しに来てね！」」

「あ……おい、マール！」

セシルが呼び止める声も聞かず、マールはどこかへ行ってしまった。

しかし、マールは確かに心強い味方であり、同じチームならとりあえず死ぬことはないだろう。この間もそうだった。あの時は、クラストップの成績まで取ってしまったが。

そう思うと、安心感が湧いてくる。

「まあ適当に頑張るか……」

ぼりぼりと頭をかきながらセシルはとりあえずこれからどうするか考え始めた。

「おい、セシル飯食おうぜ」

そんな時、遠くの方からディムが呼ぶ声が聞こえた。

ああ、そろそろ昼のようだ。

一段と日差しがきつくなる、昼だ。

第一章 1話：魔法と魔獣と人間達（後書き）

ここから本編です！

どんどん、さくさく書いていきます。

2話：演習開始（前書き）

セシルとマールは一緒に組んで演習をやることになりました。今日の昼から演習が始まります。

2話：演習開始

演習以外ではほとんど人気のない森の奥。

突然のことだった。

地面からしみ出すように黒い水たまりが広がり始めた。タールのようにどろどろとした感じで、不気味な光沢を放つ水たまりは、ゆっくりと1メートルほど広がるとそこで止まった。

しばらくすると水たまりから、腕が生えてきた。

続いて、頭・体・足、と人間が黒い水たまりから出てきた。水たまりが、実はマンホールなんじゃないかと思うぐらい、自然に出てきた。

男だった。黒い神父服に身を包み、手には本を持っている。

神父は、首をコキコキならして、周囲を見渡す。視界に入る、木々、草花。そしてアルバートにしか自生しない珍しい植物が目映る。自分がいる場所が予定通り、アルバートの森の中であることを確認した。

「な、なんだお前？」

突然現れた男に対し、驚くのは、たまたまそこを巡回中だった警備兵。驚きはすぐに警戒に変わり、素早く射撃体勢に入った。

「……………」

「誰だお前、どこから来た？」

シンプルに、かつ拒否を許さない威圧感をもって質問する。ただの警備兵……とも言えども彼は訓練を受けた軍人だ。そこらの警備員とはひと味もふた味も違う。神父の、わずかな動きも見逃さず、何が動きがあれば、ためらわず撃つつもりだった。

だが、マシンガンを突きつけても神父は答えない。顔色も変えな

い。

そして、まるで眼中にないように、手に持っていた本を開いた。ダダダンッ、と銃声が響く。神父の足下に何発もの銃弾が刺さり、穴が開いていた。神父は動きを止める。

「軍部まで来てもらおうか」

逆らえば今度こそ殺す、と殺気を込める。

そして神父は警備兵の方を向くと、一言だけ呟いた。

「うしろ」

警備兵その言葉に反応することも出来なかった。

後ろから突然、巨大な猿のような魔獣が、薙刀のような爪を首にめがけて振り下ろす。

ぞぶつ、と、肉を包丁で無理に押し切るような音がして、次の瞬間には警備員の首は宙を舞っていた。

頭を失った体からは大量の血の雨が降り出し、辺り一面は絵の具をぶちまけたような赤色に染められた。そしてその血に誘われたか、森の奥からさらに多くの魔獣が群がってきた。

何十体もの魔獣が一人の人間の体に群がる。通常これほど多くの魔獣はアルバートの森にはいないはずなのに、うじゃうじゃと沸いてくる。

警備員の体は一瞬にして魔獣たちの胃袋に納められた。

そして、全て終わると統率の取れた兵士のように、自分たちの主人である……神父と向かい合った。

「甘いな……こういう時は、発見・即射殺ですよ」

出てきて早々、見つかるとは予想外だったがただの警備なら問題はない。仲間を呼ばれる前に始末できた。

そう考え、神父はそのまま歩き出した。

まずは目的の達成のための体制を整えなければならぬ。

「さて、情報ではそろそろのはず。先に準備でもしておきますか」

神父は開いていた本のページを、そつと指でなぞった。

「まずは、邪魔な人工魔獣の掃除からですね……行け」
そして小さく命じる。

その言葉に反応し、群がっていた魔獣たちはあちこちに散らばり、森の中へ消えていった。

神父は満足げにそれを眺めて、森の奥へ歩き出した。

「手に入れなければ……アレは必ずここにある」

神父は妖しく笑い、また本を広げる。森の中に、黒い水たまりが、また広がり始めた。

セシルはポケットからあるものを取り出した。

指輪。

ずっと昔、まだこの学園に来る前に渡された。

いつかこれを使うときが来るから、と。もうほとんど顔も覚えてない父親に言われて、ずっと大事に持っていたものだ。

実際、肌身離さずお守りのように持っていた。銀色のリングに、何の宝石か分からないが小さな珠が付いているだけのシンプルな指輪。

暇だったから、お守りを取り出してみたが、相変わらずサビてもないし、黒ずみすらない。

「はめずにポケットに入れてるだけなら、汚れようもないか」

それでもメンテナンスは欠かさず、暇になれば布で指輪を拭くのが、セシルの日課になっていた。これだけは、今まで怠ったことはなかった。

何故指輪をつけないのか、という大した理由もない。つける理由もないのでつけてないというだけだった。

もうすぐ演習が始まるので、セシルはとりあえず演習場の近くの中庭で待機していた。

周りにはセシルの他にも何人もの生徒がいた。ただ、その場にいるのはほとんどがカップルだったが。

「ジェーン……次の演習が終わったら、俺と」

「そこから先は言わないで、カイン」

抱きしめあう二人。

「ルーン、実は君のことが好きなんだ。付き合ってくれないか？」

「ごめんなさい。あなたはいい人だけど、そういう対象には見えません。諦めてください」

残念だ、と苦笑いを浮かべて去っていく男。

「……………」

どこかで見たことがある……クラスメイトであろう顔が、ちらほらとあつたりする。

セシルは若干の居心地の悪さを感じつつ、ベンチに座っていた。

そして、今日行われるという演習のことを考える。

魔法しか通じないという、人工魔獣。

魔法が一切使えない自分。

「……魔法なんて」

セシルは、他の生徒が魔法を使うように、気を集中し始めた。体内の魔力を感じ、それに、火・雷・水・風など、発動したい魔法に合わせてイメージを乗せて……息を吐くようにして、一気に外へ呪文と共に圧縮された気を放つ……これで、魔法は発動する。

「火柱！」

手のひらを前へ突き出し、目の前に転がっていた紙くずに向けて放つ！……が、火柱は出る気配もなかった。

そもそも、セシルは他の生徒が言う、魔力というものを体内に感じる事は出来なかった。

「ふん、紙を燃やしたかったらこうすりゃいいんだよ」

セシルはライターを取り出して、紙に火を付けた。紙は見事に燃え上がり、一瞬で灰になった。

くだらねえ、と心底セシルは魔法を軽蔑する。いつのまにか風に吹かれ、灰もどこかへ消えていった。

魔法も科学も、結果は同じなのだ。プロセスが違うだけで、火が物を燃やすという現象はどちらも同じ。なら、どっちを使っても構わないだろう。

そんなことを考えていると、ふと手に持っている指輪に目を向けた。

そしてそれを、何の気なしにつけてみる気になった。サイズが合うかどうか心配だったが、思ったよりすんなりとおつけることができた。

指輪のはめられた左手の中指を、上に掲げて眺めてみる。

「昔はぶかぶかだったと思っただけど、成長するもんだな俺も」

久しぶりに、親の形見の指輪をはめた。

なんでそんなことをする気になったのか分からない。あえて理由を言うなら……今日の演習のお守りみたいなもの、だった。

アルバートという国は、森の国と言われている。国土の半分が森で、豊かな自然が広がっている。

学園の少し離れたところには、広大な樹海が広がっており、演習場としてもよく利用されている。

ここは迷いやすく遭難者も出るほどで、よくサバイバル演習にも利用されている。そんなところに何十人も生徒が集められていた。

その中でひととき目立つ少女がいた。マールだ。彼女は、まだ自

分をチームに入れようと頑張る者たちを無視して、自分で昨日組んだチームを探した。

そして、ようやく一人目を見つけた。

「あ、セシル。やっぱり先に来てたの」

集団から外れて木にもたれかかっているのを見つけた。

「あんまり暇だったんで、結構前からな」

「ふーん。あれ、指輪なんかしてたっけ？ 買ったの？」

どうやらすぐに気付いたらしく、セシルの左手の中指に目を向けた。セシルは左手を軽く挙げて見せた。

「いや、持ってたんだけど今までつけてなかったんだ。今回はまあ

……お守りみたいなもんかな」

「ああ……お父さんの？」

「そういうこと」

それだけで、マールには全て分かった。そして笑って

「そんなに心配しなくても大丈夫よ」

「何が？」

「わたしがいるんだから」

「頼もしいねえ」

そう言って笑った。男が女に守られるのはどうなんだろう、なんて疑問は野暮というものだった。二人はそういう関係だった。

まもなく、集合時間になろうとしていた。

「みなさん、集まったようですね」

そして森の奥から教官が現れた。昨日と同じく、新人女教官のテアナだ。

「さて、さっそく訓練を始めたいところですがその前に四人一組のチームを作って下さい。あ、男女混合が望ましいですね」

そう言うてにっこりと微笑む。生徒達は、男女混合、という言葉葉に疑問を浮かべた。

「あのテアナ先生、どうして男女混合なんですか」

「え？だってその方が楽しいでしょ？これは男子にとってチャンスよ。ここで女の子をピンチから守ってあげれば一気に好感度アップでしょ！」

戦場で好感度もへったくれもないのだが、本人曰く、こうすることによって戦闘時の緊張がほぐれるということらしい。実は意外と好評だったりもする。

あらかじめ誰と組むか決めていた生徒も多かったが、とりあえず生徒達は適当にチームを組み始めた。それぞれの戦力バランスを考えて、均等に分かれていく。男女混合で。

ちなみにセシルは

「ふらふらしてて、危なっかしくて見ていられないから」

と、昨日言われた通りマイルに捕まり、彼女の友人達とチームを組むことになった。

「よっ」

「よろしくお願いします、セシルさん」

一人はぶっきらぼうに、もう一人は丁寧な挨拶を交わす。対照的な性格だな、と思った。

少しウェーブのかかった柔らかい栗色の髪の女の子と、見慣れた金髪の隣人がそこにいた。デームだった。昨日マイルと別れた直後に声をかけられたのだ。

『お前マイルと組むんだろ？俺も混ぜてくれよ、今度はなかなかやばそうだからさ』

どうやらたまたま見ていたらしく、まあいいだろうと言ったら本当に着いてきたらしい。

そしてもう一人……女の子の方は、ルーンだ。クラスでも特に目立つ様子もない大人しい子だ。

マイルとは性格的には正反対のようなものだったが、何故か気が合つらしくよく一緒にいる。

ちなみにどこかで見た顔だと思ったら、さつき中庭にいたカップルのうちの一人だった。性格は大人しいが目つきは鋭いようで、な

んだかこつちを睨んでいるような気がした。

「お、おう。よろしくなー」

セシルは気づかなかった振りをしつつ挨拶を返した。

全員がチーム分けされたところでテアナ説明が始まる。

「えー今日の演習はこの森の範囲での擬似戦闘です。状況に応じて的確な攻撃を行って下さい。魔法もばんばん使っていていいですよー。魔法しか効かない敵もいますからね」

それを聞いて緊張が高まる。演習は月に何度か行われるがその度に怪我人が絶えないからだ。中には重傷を負って再起不能になった者もいるし、死亡者も度々出る。

「私が魔法で創った人工魔獣が200体ほど……うようよしてますから油断していると死にますよ。十分注意して下さいね。魔獣を全滅させるか、ギブアップとして森から出たら演習終了です」

人工魔獣とは特殊な術で創られた理性のない危険な生物だ。

元々の自然に存在する純正の魔獣には劣るものの、強力なものは生物兵器としても使用できる程の力がある。

それを相手にしろ、というのだ。腕に自信のないものは顔面蒼白になっていく。テアナの言うチームを組めというのはこのためだったのだろう。

「じゃあ頑張ってくださいね。生きて会えることを祈っています」

それだけ言うと、テアナはどこかに消えていった。

そしてそれを合図に訓練が始まった。それぞれのチームは散り散りに森の奥へと入っていった。

「可愛い顔して人が悪いよな、あの先生」

「ああいう人は結構Sなのよ。ちよつとぐらい腹黒くなきゃ軍人なんてやってられないわ」

言いながらもマールはエア・アンカーを取り出して、いつでも戦

闘が出来る準備を整えていた。

「なるほどねえ」

「そろそろ私達も行きましょう」

デイルムとルーンは銃を持っていない。何か他の武器や対応策があるのか……。分からないが、とりあえず、他と同じようにセシル達も森の奥へと消えていった。

「……はっ」

ギンツ……と眼に力を込めるとエメラルドグリーンの輝きが一層濃くなつていく。

その瞬間に空は彼女の目となり、あらゆる感覚器官となる。望むままに世界の有様を知り、あらゆる存在を見透かし、感じる。

マールは範囲を自分の周囲に限定してそこにいる存在を解析し始めた。そのため、敵が魔法を使おうとする時、どのような種類の魔法かも一瞬にして見切る。

「木の上に敵。魔法が来る……炎系ね」

そう言った瞬間、突如現れた炎が空間を埋め尽くした。

ゴゴゴゴ、と音を立てて……。まともに食らえば確実に大火傷を負うであろう巨大な火球が地面に穴を開けた。プスプスと白い煙が上がり、それが晴れた時には焼けこげた人間がいるはずだった。だが、そこには誰もいない。

マールは周囲を探り、気配を察知する能力が尋常ではなく、ほんのわずかな空気の流れや振動を肌で感じ、次の行動を見切ってしまう。人間センサーのような感覚器官を備えていた。

「ギ……!!」

「終わり」

魔法を放った、カラクリ人形のような人工魔獣の側には、背中ま

での長い茶髪をたなびかせたマールがいた。いつの間にか至近距離まで接近していたのだ。

そして後頭部でエア・アンカーを接射した。特殊合金をもぶち抜く超威力の銃に、頭は粉々に消し飛び、驚くべき事に魔獣の体までもが消滅してしまった。クレーターのようないくつかの黒い銃創が、そのまま体の隅々まで行き渡って浸食していき、最後には蒸発するように、跡形もなく消えてしまったのだ。

一連の動きを当然のようになしたマールは、そのまま木から下りて仲間の無事を確認した。幸い、全員炎が来る前に回避していたので怪我は無かった。

「相変わらずの手並みですね」

側で見ていた、友人のルーンが感心してそう漏らす。妙に丁寧な口調なのは、彼女の性格なのだろう。

そんなルーンに、「まあね」と笑いながらマールが答える。

「おい、セシル。やっぱりこのチームに入ってよかったな！ こりや今回の演習は楽勝だぜ」

「お前は後から無理矢理入ってきたくせに」

セシルは渋い顔でデймを見やる。だが、この分だと自分達の仕事はないかもしれない、と思ったりもした。

「次は……あつちの方に行ってみようか。もっと奥の方までね」

そう言い、かなり速いスピードで森の奥に向かっていった。他のメンバーは置いて行かれないようにそれに付いていった。

マールは木から木へ飛び移りながら縦横無尽に森を駆けめぐり、途中で見かけた人工魔獣を片っ端から倒していった。

稲妻のように速く、鋭く容赦のない動きだった。

「招雷、火柱、氷槍、風刃……」

高速で動き回りながらも魔法の呪文が唱えられ、その度に人工魔獣が雷や火炎に貫かれて倒れていく。

後ろから襲いかかってきた魔獣の攻撃を振り向きもせずにはしゃがんで避け、一撃必殺の銃弾を叩き込む。

魔法による轟音と銃声が鳴り響き、人工魔獣は反撃する間もなく、一匹また一匹と倒れていった。

「す、すげえ……初めて見た」

「そうですよ。だって彼女はマール・アイボリーなんですから」

ルーンは自分が褒められたかのように嬉しそうな顔をしている。そしてセシルは改めて思った。

「俺らいらねえじゃん」

そんな調子で更に奥へと進んでいく。しばらく行くと遠くに何かの群れが見えた。どうやらあれが魔獣らしい。

よく見るとその中央には空白があり、そこに数人のチームが周りを囲まれていた。魔獣達は今にでも襲いかかりそうな勢いだ。

セシル達はいったん様子を見るため、少し離れたところで止まった。

「へえーあれも人工魔獣か……」

セシルは目を細めて黒い塊を凝視する。さっきまでの人形のような人工魔獣とは違い、獣のような形をしていた。違うのは形だけではなく、さっきよりも気迫に満ちあふれ、牙をむき出し、うなり声を上げて彼らを見つめている。獣達の強い悪意が離れたところにも伝わってきた。

人工魔獣というのは、あくまで魔法で創られた木偶であるため、感情や悪意などはなく、無機質なものだ。だがこの獣は生命力に満ち、他の命を奪うことを楽しむかのような気配があった。

「すごいもんだな。先生の人工魔獣は。こんなのも作れるんだ」

セシルが感心して声を上げる。人工魔獣は戦争なんかでも使われたことがあつたらしいが、こんな生命力に満ちたものを創れる技術

はなかつたはずだ。もつとも、アカデミーの演習で使うには厳しすぎる気もするが。デймとルーンも冷や汗を流している。もしアレに囲まれているのが自分たちだったら……と、想像しているのだから。

「違うわね」

マールが人工魔獣たちのほうを見て睨む。強く、眉間にしわが寄るほどに。敵の一挙一動を見逃さないように。

「違う……って？」

「あれは……」

囲まれた生徒達は、今にも泣き出しそうにして銃を向けている。ささやかな抵抗だったが、もし獣が本気で襲いかかってくれば、役に立たないだろう。

銃が効かない、と噂されていた人工魔獣だ。効果があるとしたら、魔法しかない。

そう判断したチームの一人が、唇を動かし始めた。

「あれは、普通の人工魔獣じゃない！」

マールが叫ぶ、と同時に魔法が放たれようとしていた。だが、その行為が引き金となった。獣が、魔法を唱えた男に襲いかかり、腕に牙を突き立てた。

「う、ギャアアー!!」

そのまま引き倒され、肉が抉られる。その痛みと恐怖で、大声で叫び声を上げる。そして抉られたところの肉をうまさうに食いにかかると、仲間達は、腕を引きちぎられそうな仲間をしばらくは呆然と見ていたが、やがて叫び声を上げて銃を乱射し始めた。そしてその瞬間、均衡は破られた。

「本物の魔獣よ、天然のね」

赤い目の部分を中心に闇が覆い被さっているような、黒い魔獣。その姿は、虎かもしくは狼のような肉食獣の姿をしていた。

闇で出来たその身体は、影のように地面へばりつき、変幻自在に

身体の形を変えて、鋭い槍にも刃にもなることができた。その動きはかなり俊敏だ。

カゲと呼ばれるその魔獣は、うねうねと身体をくねらせながら徐々に距離を詰めていく。そして

「シヤア！」

先端を刃物のように尖らせて一斉に襲いかかる。刃に変化した十数体のカゲが飛び上がり、回転しながら斬りかかる。

囲まれているメンバーは魔法や銃で応戦しているが、数が多すぎてとても間に合わない。

「……く、くそ！」

高速で詠唱を行い、魔法を連発するが、それ以上に魔獣は次から次へと襲いかかってくる。そしてメンバーの眼前にまで迫ってきた。

もう駄目だ…全滅する……誰もがそう思ったその時だった。

バシユツ

一発の銃声が響いた。それがどこから放たれたものかはその場にいた誰も分からない。だがそれは確実に魔獣に当たり、直後にカゲは木っ端微塵になった。

「ふーん。なるほど、この間よりは強そうだけどこんなもんね」

狙撃手、というかマールは面白くなさそうにそう言う。木の上から降りて辺りを見回す。

「1、2、3。隠れてるのも合わせると30匹くらいか……」

そしてまた冷静に分析を始める。

「えーっと、赤い部分……あれは目みたい。あそこを狙って銃で撃ち抜くか、強い閃光に極端に弱いみたいだから雷撃系の魔法で攻撃して！ 弱点はそれだけであとは大して効果はないみたいね」

そしてセシル達3人も降りてくる。もうすでに戦闘準備は整っている。

「お、お前ら……」

囲まれていたチームの一人が突然の乱入者に驚いている。だが、そんな暇はなかった。

「話は後。とりあえずこいつらを先に始末しましょ」

カゲがそれぞれ、変化して襲いかかってくる。その姿は槍、刃、ハンマー…原始的な武器だが、充分な殺傷能力を持ち、脅威となり得る。

「……うわっ！」

ギョオ！ つと、槍のように変化したカゲが、凄まじい勢いで突進してくる。セシルはとつさに横に転がり、間一髪でそれを避けたが、後ろにあった大岩が深く貫かれて砕け散り、更にその後ろの木まで貫通していた。まともに食らえば、人間が1ダース程串刺しになるだろう。

「こないだの演習の時よりも強いよな、確実に。くそっ」

槍に変化していたカゲは、狙いを外すとすぐさま獣の姿に戻り、牙を肩に突き立ててきた。鋭い痛みと共に血が噴き出した。

「ぐっ……このやる」

「はっ！」

叫び声と共に誰かが急いで雷撃を放った。辺りが光に包まれ、強烈な放電がカゲを直撃する！ それはセシルに当たることはなく、弱点である赤い目だけを貫いた。まともに受けたカゲは弾け飛びやがて消えていった。

「しっかりして下さいよ。これは実戦、殺し合いなんですからね。

あ、また来た！ セシルさんも手伝って下さい！」

ルーンだったようだ。彼女は一切の反論を許さずに捲し立てると高く跳躍し、周囲の木や岩を蹴って縦横無尽に動き回り、敵を攪乱しつつ撃破していく。

「火、招柱、雷」

彼女が得意とするのは、魔法の二重詠唱だ。複数の魔法の詠唱を行い、効果を倍増させる。炎をまとった雷が、襲いかかるカゲをま

とめて焼き払った。

ちなみに彼女もマールに次ぐアカデミーの優等生だったりする。

「……血圧上がるぞ」

肩から血を流しながら、まるつきり緊張感のない声で本人に聞こえないようにボソリと呟く。そして、魔法の使えないセシルは、弱点らしいカゲの赤い目の部分を狙っていくことにした。そして、おずおずと銃を取り出した。

「ひい！」

バン、バン、バン……

囲まれていたチームのメンバーが迫ってくるカゲに必死で銃を乱射しているが、いずれも急所に当たっていない。赤い目以外の黒い体に当たった弾丸はそのままカゲに吸収されていく。

刃に変化したカゲに体を切り裂かれていく者もいた。どうにか一命を取り留めたらしいが、大量に血を流して動けなくなっている。動きを止めた直後、カゲ達はハンマーを形取り、その大幅に増大した重量でそのまま叩きつぶそうと、集団で男に飛びかかるうとす
る……が。

「豪雷！」

マールが詠唱を終えて魔法を放つ。目標を中心として湿った空気に魔法によって電流が流されていく。その電圧は時間と共に加速度的に高まり……

極限にまで高められた電圧で強烈な閃光と共に何十万ボルトもの放電が起きる。前方にいた数体のカゲは一度に消滅した。

「た、助かった……」

「ふう」

（傷は深い……けど命に別状はないわね）

へたり込んで全く手も足も出ない男に、薬と包帯を渡した。

別に彼に非があるわけではないが、そもそも戦いには向いてないのだろう。アカデミー内でもそういう人間がいることは確かだ。

そんなことを考えながら、今まさに背後から襲ってきたカゲを無造作に銃だけを後ろに向けて、事も無げに撃ち抜く。エア・アンカの効果で多少弱点から外れても滅することはできるが、振り向かないままでピンポイントに弱点である赤い目に命中した。直後、カゲは魔術効果によって霧散する。跡形もなかった。

「大分数は減ってきたけど……妙ね。何か見張ってる……？」

マールの敏感な神経は、自分たちの周りのまとわりつくような妙な雰囲気を感じた。何か、空気が重い感じがした。

「おい、行ったぞセシル！」

傷だらけになりながらも、デームがナイフで目を抉り、魔法で数匹のカゲを葬ったところで大声を上げる。魔法で追いつめて、残ったカゲをセシルが銃で掃討するという作戦だ。

「ん、はいはい……」

緩い、気力が感じられない返事とは裏腹に確実に急所を撃ち抜いていく。

バン、バン、バン……。

三発の銃声があったと同時に三体のカゲが潰された赤い目から、黒い闇をぶちまけて崩れ落ちる。この前の訓練の時とは段違いの、実戦射撃。良い感じで力が抜けているので、弾丸がぶれることはなく、まっすぐに弱点に突き刺さっていった。

使っているものは安物の銃だが、それを補って余りある射撃技術だった。

「よし、上出来だ。……でもお前、意外とやるもんだな、驚いたぜ」
ナイフの血をぬぐいながら本当に驚いた様子のデーム。

「俺にはこれしかないからなあ」

セシルは自分の銃を眺める。魔法が一切使えないにもかかわらず、平凡な成績なセシル。裏を返せば、魔法以外は並以上に来なければ平凡という成績すらもらえないのだ。魔法ができないとすれば、

攻撃手段は銃しかなかった。並より秀でるのは必然といえた。

「じゃあ次は……ん、なんだ？」

ディムが次の魔法を放とうと詠唱をしていると突然魔獣の動きが変わった。今まで殺意をむき出しに襲いかかってきたカゲが急に大人しくなった。そして、唐突に背中を向けてどこかへ去っていった。逃げ出したのだ。

訳が分からずに呆然としてカゲを目だけで追う。別に敵意のないものをわざわざ自分から攻撃を仕掛ける必要もないのだが。

「ん、妙だな。魔獣が逃げ出すなんて聞いたことないぞ」

魔獣というものは、基本的に殺意の塊であり、例えば仲間が倒れようと向かってくる。いやそもそも仲間という意識もない。そのため不利を感じて逃げ出す理性も持っていないはずだ。

だが目の前の魔獣は自分たちに背中を向けてどこかへ行こうとしている。これはどういうことだろうか。

「まあでも、とりあえず作戦成功……かな」

考えても分かるはずもない。訝しく思いつつも、セシルは頭をぼりぼりと掻きながらカゲが消えるのを見送っていた。

3話・風が呼ぶ侵入者（前書き）

カゲが突然逃げ出して戦闘は終了。

セシル達は不思議に思いながらも、作戦会議をかねて休憩することになりました。

3話：風が呼ぶ侵入者

カゲは一斉に森の奥へと逃げていった。その様子を、セシル達は訝しげに見ていた。

「何だったの、一体……」

マールもぼかーんとした表情で、武器をしまう。

そして、セシルとディムのいる方へ向かっていった。

一方で襲われていたチームのメンバー達はほっと胸をなで下ろしている様子だった。

「た、助かった〜」

「死ぬかと思った……」

やはり彼らに戦いには向いていないようだった。おそらく訓練が終われば医療班や別の部隊に異動することになるだろう。

リタイアするよ、と言って入り口に向けて帰っていく彼らを見送り、その場で休憩することにした。

セシル達は先程の戦闘で消費した弾薬の装填やら傷の治療なんかを行いながら、食事を取っていた。

「マール、さっき現れた魔獣のこと何か分かりましたか？」

ルーンがパンを食べながら尋ねる。彼女も多少手こずり、いづらか攻撃をもらってしまった。

敵を解析し、把握することが出来れば、次に出会った時にも確実に対処できる。情報収集は欠かせない。

「そうねー。魔法には弱いみたいだけど、銃やナイフなんかは弱点以外は受け付けないようになってたわね。攻撃パターンもだいたい把握できたし……ただ」

「どうしたんです？」

マールは言い淀みつつ話し始めた。

「天然の同種の魔獣にしては強すぎるわ。あのカゲの身体能力、形態や硬度を自由自在に変化させる身体を構成する魔術のレベルの高さ。もしかしたら……誰かに加工された魔獣なのかもしれないわね。そういう意味じゃ人工魔獣だけ……」

「加工……」

それを聞いて、さきほどのカゲ達の攻撃を思い出してみた。

魔術で構成された強靱な身体。それを刃物のように尖らせる。

空中に飛び上がり、回転、突進。とても目で見て追いつく動きではない。

そのまま何も動くことが出来ずにズタズタに切り裂かれる者、飛び散る鮮血。その血を浴びて一層赤黒くなり、生理的嫌悪感を催す。黒い獣。

「……確かに下手をすりゃ死人が出てるところだよな」

傷の手当てをしながらデイルムはさっきのことを思い出していた。

彼のメインは銃ではない。接近し、懐に仕込んである小型の暗器で局所を狙い、そこを徹底的に潰す。

さっきの魔獣は接近すら難しく、とても無傷ではいられない。ところどころで、刺し傷切り傷があった。

「先生も人が悪いよなあ……殺す気満々じゃないか」

さきほど死ぬ思いをしたセシルだが、まるで他人事の様だった。

「それは違うわね。最初のうちに出てきたマリオネット型の人工魔獣は先生が創ったやつだけど、その後で出てきたのは明らかに別の人間が使役したものよ。そもそも一般生徒のほとんどが歯が立たないような魔獣なんて創らないでしょ？」

あくまで演習、訓練なんだから……と、それを聞いてますますセシル達の疑問は沸々とわき起こってくる。

皆、何かおかしいと感じ始めた。嫌な感じだった。

「テアナ先生が使役したんじゃないとすると……」

「待って」

だが、ルーンのその言葉をマールが途中で遮った。
何か来る、と彼女は思った。常人離れした彼女の感覚が、不自然な風の流れを捉えていた。

辺りを見回す。さっきまでは完全な無風だったのが、視界の端では木の葉や砂が風に巻き上げられて渦になっていた。つむじ風だ。それが、ぱつと辺りを見回しただけで4つもあつた。

「伏せて！」

マールが慌てた声で叫んだ。

突然のことだが、全員それに反応して地面に体を伏せた。

そしてそれとほぼ同時。小さなつむじ風はそれぞれが瞬く間に巨大な竜巻と化し、辺り一面に砂嵐を巻き起こした。

視界は一瞬にして奪われ、風の轟音が辺りに吹き荒れていた。

「な……これ……は」

誰かが叫ぶが風にかき消される。とても身動きが取れる状況ではなかった。

「……くっ」

身をかがめ、ルーンがすばやく結界を張った。

そんな中、風はさらに勢いを増していく。巨大な竜巻同士が合体し、小さな台風と言ってもいいほど荒れ狂い、迫ってくる。

「うわ、くそ。身動きが取れねえ」

「なんだよいきなり。これじゃ何にも見えないな……」

セシル達は結界を突き抜けてくる砂埃や細かい石の応酬に、目を覆った。

ビュウウ……ブオオオオ……ゴオオオ……！！

大木が薙ぎ倒される音があちこちで聞こえた。それらは風に巻き上げられて、ぐるぐると空中を回っている。

もしルーンの結界が無ければ、セシル達もあの中で一緒にぐるぐ

るとかき回されて体中の骨がバラバラにへし曲がっていただろう。
しかしそれもいつまで持つか分からない。

もともとの結界は自然の竜巻程度ならば完全に防ぐことの出来るのだが、この突風はそれすら突き抜けてくる。

「高レベルの魔法……誰？」

身をかがめながら、マールは辺りを見回していた。

まさか演習中の生徒やら、人工魔獣じゃないことは分かりきっている。

「ワールウィンド……この国の魔法じゃない」

マールは以前見たことがある。外国の魔法だった。

だが、こんな形式の魔法を使える者など、アカデミー内はおるか、アルバート国内にもいない。少なくともマールの知る限り。

魔獣ならまだ可能性はあるかもしれない……が、鬼や幻獣の類ならともかく、たかが訓練で使役される人工魔獣がこんなモノを使えるはずがない。さっきのカゲの化け物にしても同じだった。

となると、考えられる可能性は一つ。

「異国からの侵入者……ね。誰よ、出てきなさい」

マールは銃を構えた。そして体中の感覚を針のように細く、そして鋭くとぎすました。

どこかに隠れているのか？ この嵐は、気配を誤魔化した上で奇襲をかけるための作戦か。

「出てこないと……」

言い終える前に、風は止んだ。

さっきまでの嵐のせいで、木々は砂に埋められ、なぎ倒され、地面も岩盤ごと削り取られている。

しばらくすると色白の痩せた男が木陰から現れた。

真っ黒な神父服。手には本を持っていた。

格好こそ神父だったが、その表情から見ると、どうみても神の使いには見えなかった。むしろ神を積極的に殺しに行きそうな、悪魔の雰囲気か漂っていた。

マールが真ん中で銃を構え、その横にセシル達が並んだ。皆、油断無く目の前の男を見据えた。

目の前の男がどれほどの実力者かは分からない。が、侵入者であるこの男をみすみす見逃すわけにもいかなかった。

男は、その場の全員を一瞥すると、真ん中のマールに向かって丁寧に頭を下げた。

「マール・アイボリーとお見受けいたします。私はルイス・シュレディンガーと申します。以後お見知りおきを」

丁寧な物腰ながら、一分の間もない。逆に隙を見せれば一瞬で切り裂かれる、そんな気配があつた。

白い顔には、にやついた表情が張り付き、それがまた胡散臭さを増していた。

「いきなり魔法で襲ってくるなんて結構なご挨拶ね」

一方のマールはいつでも動けるように全身の筋肉を緊張させていた。

目の前の、ルイスと名乗る神父風の男が妙な動きをすれば殺す。魔法のための詠唱を始めようとすれば殺す。何か武器を取り出そうとすれば殺す。

相手に殺気を放ちながら、自分の心にも言い聞かせた。

「……俺たちは無視かよ」

いつものことなので慣れているセシルが呟いた。

「マールが狙いか？ いきなり襲って来やがって、しかも外国人かよ」

「4対1……いざとなればこっちが有利ですよ」

デームはナイフを二刀流で持ち、ルーンは魔法をすぐに唱えられるように舌で舐めて唇を濡らす。そしてセシルも、パンパンと服の

ほこりを払うと銃の撃鉄を下ろした。

それぞれ、いつでも戦闘に入れる体勢になった。

「マールは神父を睨み付けながら『エア・アンカー』の銃口を向けた。」

目に見えないプレッシャーがその空間に渦巻いていた。

だが、神父はそれを受けても微塵も動揺を見せずに落ち着いていた。

「……固定魔法、エア・アンカー。アルバート、アイボリー家の家宝ですか……」

「シュツ……小さく、鋭く、とても銃声とは思えない風切り音がしたかと思えば……神父の足下には弾痕がいくつか刻まれていた。」

だが、単に地面に向けて撃っただけではない。

その弾痕の小さな穴が徐々に地面を“浸食”し始めた。浸食された地面の一部は腐ったように黒くなり、乾燥し、塵となって空気に溶け込んでいった。

「なるほど、その威力。間違いないようだ」

神父は白い顔に、亀裂が入ったような笑みを浮かべた。それはそれは嬉しそうに。

「次に勝手に喋ったら殺すわよ」

マールの言葉に、にやけた顔のまま両手を上げて大人しく頷く。

4対1。おまけに固定魔法を持っているという圧倒的有利な状況だった。ここで時間を稼ぎ、担当教官のテアナに知らせに行く必要があった。

ルーンがこっそり、通信機を取り出してテアナとの連絡を取っている。

「あなたの目的は？ 何故アルバートに来たの？ 今停戦中とは言え、五大国の一角に不法侵入するなんて正気とは思えないわね」

大陸戦争の停戦後は、民族同士の小競り合いこそあったものの、基本的にどこの国も戦争行為は避けたがっていた。どこの国も痛手を負い、疲れ切っていたからだ。

神父はしばらくの間をとり、その後、ゆっくりとマールの表情を伺いながら語り始めた。

「……私は、別に戦争しようなんて思ってません。少しあなたに相談があつて来ただけです。マール嬢」

「馴れ馴れしく呼ばないで。何よ相談って」

「それ、くれませんか？ 私に」

「何？」

何を言っているのか、最初マールには分からなかった。だが、神父の指している指の先が、ちょうど自分が持っているものを指している事に気付いた。

「エア・アンカー……？」

アイボリー家の家宝で、固定魔法である霊銃エア・アンカー。それを、くれ、と言つう。

「はい。私達の組織は、ある目的のために動いています。そのためには、あなたの固定魔法がどうしても必要なのです。譲っていただけませんか？」

マールは黙っていた。それをどう捉えたのか、神父はまだ話を続ける。

「固定魔法の力は強大だ。その力を使いこなせないと……破滅を招きます。だが、それを正しい方向で使うことが出来れば、新しい未来を切り開くことにもなるのです。もちろん、固定魔法が金で買えるようなものでないことは承知の上です。それ相応の見返りも用意してあります。どうでしょう？」

マールは、ふう……とため息をついた。
「論外ね」

そして、引き金を引いた。パシュツという音はさつきと変わらな
いが、今度は地面ではなくて神父の心臓にめがけて、破壊の銃弾が放たれた。

しかし、神父の方が一瞬速かった。マールの指先が動くのに反応して、体を横にそらして銃弾を避けていた。そしてそのまま高く跳

躍し、後ろにあつた木に登った。

そして苦笑いを浮かべる。

「まあそう言うと思つてました」

「……賊が調子に乗るんじゃないわよ。生きては返さないから」

避けられたのは意外だったが、今度は外さない。マールはそう確信を込めて狙いを定める。

「やはり、甘い。この国の人間は」

しかし、それは叶わなかった。神父が、禍々しい笑顔で呟いた。

「うしろ」

その言葉の意味を理解したのは、大きな猿のような魔獣が、爪をちよと振り下ろしているのが見えた時だった。今までその爪で何十人殺してきたのか、赤く染まり、肉のようなものがこびり付いている。

「あ……」

何という失態。頭に血が上つて背後からの敵に気付かなかつたなんて……避けるのも、間に合わない。

マールが死を覚悟した時だった。

「おいおい、人なめんのもい加減にしろよ」

ダン、ダン、ダン、と銃声が響く。

セシルが撃つた銃弾は魔獣の腕の関節に突き刺さり、爪を叩き折った。それと同時に、ルーンの雷が体を覆い尽くす。

「“招雷”」

バチバチバチ、という放電の音が鳴り響いた。

「ウギヤアアア……!!」

奇声を上げてのたうち回っている魔獣に、ディムが近づいて

「おら！」

喉の近くの急所にナイフを深く、柄の部分まで突き刺した。大猿の魔獣は、バタバタと暴れていたがやがて動かなくなった。

セシルは、呆然としていたマールの肩に手を置いて揺さぶった。

「おい、大丈夫かよマイル。無理すんな。俺らもいるんだからさ」
「あ、……うん」

セシルに呼びかけられ、マイルは意識を取り戻した。張りつめていた緊張が切れ、少しぼーっとしていたようだった。だがその一瞬のうちに、神父を見失ってしまった。

「くそ、あの野郎どこ行ったんだ」

「気を付けてください、まだ近くにいます」

全員、油断無く辺りを見回した。辺りには、さっきと違って悪意が満ちていた。気配が色で見えたなら、今この場は真っ黒に塗りつぶされていることだろう。

濃厚な悪意は、明らかに人間のものではなかった。

「魔獣……あいつが操っているの？」

テアナのマリオネット型の人工魔獣とは明らかに違った。天然の魔獣に近い感じの殺意……でも、天然のものより数段強い。

「彼らは、私のコレクションの一部です」

森の奥から、声が聞こえた。見回してみても、どこに神父がいるのか分からない。

「この魔獣達の中でどれだけでもつでしょうね、訓練生達よ。マイル嬢、あなたが素直に固定魔法を渡さないからこうなるんですよ。まあ固定魔法は、殺してから頂くとしましょう」

神父は、セシル達から見えない場所で、手に持っていた本をパラパラとめくる。何気ない行動だったが、あるページで手が止まり……

「出る」

本を開いたまま彼の口から一言だけ漏れた言葉。その言葉の意味は数瞬後に理解することになった。

「ちっ……」

周りを見渡し、舌打ちする。

周囲に魔力が満ちたかと思うと、地面に幾何学的な紋様が次々と描き出され、そこから闇が溶け出す様に黒い魔獣達が溢れ出てきた。

魔獣たちは彼ら特有の赤い、鋭く釣り上がった瞳で、たった4人の非力な人間に対して不気味な咆哮を上げた。

一つ目の馬、翼の生えた虎、腕が6本もある熊など、出来損ないを組み合わせたような魔獣……キメラが大量にそこにいた。

どれもこれも、生理的に嫌悪感を抱かざるを得ない、醜悪で凶悪な魔獣だった。

「……気持ち悪い」

ルーンが嫌悪感を隠さず、吐き捨てた。

魔法を得意とする彼女は唇を濡らし、素早く詠唱を行うことが出来るように備えた。

魔獣には魔法が有効……と聞いていたが、こんな化け物を相手に自分の魔法がどこまで通用するか心配だった。とは言っても、頼れるものはそれしかない。

神父の目が肉食獣のように鋭く、細められた。

「今日の昼飯だ、お前達。喰らい尽くせ」

その言葉を合図に、何十、何百もの魔獣が襲いかかる。

ミサイルの様な豪腕、降り注ぐ雷撃、毒霧、斬撃……上下左右、あらゆる場所から攻撃が来た。

セシル達は、お互い顔を見合わせて、すぐに後ろに飛んだ。そして、そのまま背を向けて退却。全速力で逃げることにした。

後ろからは大量の魔獣が、爪と牙を剥き出しに次々に追いかけてくる。

「あれだけの数、囲まれたら終わりね。様子を見ながら、追いついてくる魔獣だけを迎撃するわよ」

「よし！」

「分かりました」

「どうする？ このまま先生のところまで行くのか？」

走りながら、セシルが尋ねる。相手は未知数の戦闘能力を持つ侵入者……軍士候補の訓練生には荷が重い。教官に助けを求めるのが普通だろう。

だが、テアナがいた演習の最初の場所までは、かなり距離があった。マールは少し考えてから

「さすがにあそこまで逃げ切るのは難しいでしょうね。おそらく、この魔獣の大群は大将を潰せば終わりよ。あの神父さえ倒せば……」

「いや、危険だぞ。相当強いだろあいつ。いくらお前でも……」

「セシル。ルーン。ディム」

マールは、三人の顔を見つめた。一人一人の目を見て、真剣な表情で言った。

「私たちが相手にしてるのは、危険な他国からの侵入者よ。どんな戦闘能力を持っているか、どんな魔法で挑んでくるのか分からないでも……このまま逃げるだけじゃなぶり殺しだわ。テアナ先生のところにはとても辿り着けそうにない。なら、戦うしかない」

途中、追いかけてくる魔獣も何度か迎撃した。だが、少しずつ追いついてくる魔獣の数は増えてきた。このままでは、じり貧であることは明白だった。

「みんなでいけば、絶対うまくいく。こっちは4人もいるんだから……分かりましたよマール。戦わないと生き残れないってことですね。作戦はどうします？」

ルーンは覚悟を決めて指示を仰いだ。彼女もまた、優秀な訓練生だった。

セシルとディムも同じ気持ちのようだ。マールは作戦を説明し始めた。

「とにかく、敵を一カ所に集めて一気に殲滅するわ。ルーンとディムは二人で組んで動いて。セシルは……あんたは一人の方がやりやすそうだから、途中で分散した魔獣をちよくちよくやって。私は、

その隙にどうにかあの腐れ神父を見つけ出して倒すわ」

簡単に言えば、マール以外の三人は陽動で敵を引きつけ、彼女が神父を見つけ出して倒すという。単純だが、危険な方法だった。

「大丈夫か？」

セシルはそう聞いた。未知の相手との一騎打ちを余儀なくされるマールのことが少しだけ心配だった。だが、そんな心配を吹き飛ばすような笑顔でマールは答えた。

「自分の心配しなさい。わたしを誰だと思ってんのよ」

そう言っつて、逃げるのを止めて方向転換し、真っ向から来る魔獣を迎撃しながらさつき来た道を猛スピードで戻っていった。

作戦は開始されたのだ。

セシルはそれを目だけで追う。その表情には柔らかい微笑が浮かんでいた。何も自分が心配することはないだろう、そう思った。

そして自分もすぐに身構えて近くまで接近していた黒いカゲの獣の赤点を撃ち抜く。

バンツ！…グチャ…ベチャツ…

銃創から溢れ出てきた闇は地面へと還っていく。

「はあ……しよугがないか」

このままだと、確実に全滅することになるだろう…それは避けなければならぬ。

逃げるのを止め、まずは状況を確認する。

1、2…前方に魔獣が約30匹。

デймとルーンは既に戦闘を開始している。

デймの暗器が的確に敵の急所を潰し、ルーンが放った雷撃が、炎弾が、氷槍が次々と魔獣を葬り去っていく。

経過は順調そうだった。

「鬼ごっこは終わりだな。頼むぜマイル」
そしてセシルも地を蹴り、動き出した。

（まずは敵を一カ所に集中させる！　そこで、その途中ではぐれた魔獣を仕留める、か）

魔獣の群れはバラバラに、多段的に襲ってきた。それをさっきの作戦通り、一カ所に集めていった。一カ所に集まった魔獣は、魔法で一気に焼き払われることだろう。

セシルはそれなりに素早い動きで、魔獣の猛攻をくぐり抜ける。途中、何度か傷を負ったが、致命的なダメージではなかった。

だが、そんなセシルの前に突如、眼前に岩の様な豪腕が繰り出される。

「くっ……」

その拳がセシルの頭を粉碎する前に、とっさに上半身ごと横に避ける。

いや、避けるというよりはすっ跳んだと言った方がいいだろう。

拳自体は空を切ったが、その衝撃波で跳ね飛ばされてしまったのだ。

「ぐえ……」

無理に身体を捻ったので受け身を取る事すら出来ずに地面に倒れ込んだ。

口の中に、鉄の味が広がる。つばを吐くと、真っ赤だった。どうやら内蔵が少し傷ついたらしい。

威力も、その速さもデタラメだった。

そんなセシルを見下ろしているのは、グレンデルと呼ばれる人型の魔獣だった。

3 m以上の身長に灰色の体色……その体は盛り上がった鉄の筋肉で覆われている。

恐らく生半可な攻撃では一切効果を示さないだろう。

「……」

静かに口元を歪ませてもう一度拳を振り上げる。いや、上げようとした。

ダン！ダン！ダン！ダン！

その拳が振り下ろされるよりも早く、その手に握られた銃が火を吹いた。

全ての弾は頭に命中、人間なら即死。だが…

「キかな…」

眉間へまともに銃弾を食らったはずが、それは僅かに肉を焦がしただけで、グレンデルには全く効果がなかった。

そして、拳はセシルを叩きつぶそうと振り下ろされた。

そこからどうにか逃げたが、セシルがいた場所は破壊音と共に、クレーターになっていた。

「まじかよ……あゝもう、カタイヤつは嫌なんだよ。面倒だな」

逃げながら、思わず愚痴をこぼす。

動き回ってグレンデルの攻撃を避けつつ、連続的に攻撃を加えて怯んだところを…そんな考えを巡らせていると、突然、地面が動いた。

地震か？ そんな事を考えていると、それよりももっと大きな存在を感じた。

「な、なんだ！？ やべえ」

何か来る……！ 考えるよりも先にとっさに跳躍し、地面から離れ、木に飛び乗る。

すると、ついさっきまで立っていた足下から、巨大な牙が突き上がった。

ザバツ……バシュウ……！！

その光景にセシルは目を疑った。

森の中に、鯨がいた。

「まじで……？」

あり得ない場所にありえない生物がいる。

地面から飛び出してきたのは、びっしりとノコギリ状の歯を生やした巨大な顎。その姿は……まさに鮫。もちろん本来は海にいるベキ生物である。

「魔獣って何でもアリなのか。噛まれたらすごい痛いだろうな……」

しかし、明らかに痛いどころでは済まなさそうだ。さつき消費した銃弾を装填しつつ弛んだ目でその未確認生物を見ていた。

人間の一人や二人、一口に丸飲みできそうな巨大な大口を開けてエサを求めている。

地面を移動する鮫……もちろん、セシルはそんなものは初めて見た。だが、その脅威は火を見るより明らかだった。

セシルを取り逃がしたことを知ると、鮫はまた地面に潜っていた。

(……こいつ、音で獲物を判断するのか)

その様子をしばらく見ていた。これほど強力な魔獣を二体も相手にする羽目になるとは想定外だった。

これはしばらく下に降りない方が良さそうだ……。そう思っていたが

「う、うわぁ！ く……」

下にいたグレンデルがセシルが登っていた木に拳打を叩き込む。

その衝撃で、木は激しく揺れた。そして、数発の拳打を受けたところで木は倒壊した。

ツツツツツドオン！！

「ちっ！」

このまま木の上にいると倒壊に巻き込まれる。

そう判断したセシルは木から飛び降りた。

だが、それを待ちかまえていたようにグレンデルが拳を構えている。

『死ネ……』

そして必殺の一撃がセシルの骨から内蔵まで破壊し尽くし、辺り一面にバラバラになった肉片と血の雨が降るかと思われた。

「そう簡単には死んでやらないからな」

ダダダダダダダダダン！

セシルは空中で狙いを定め、落下しながら何発も何発も…先程とは比べモノにならない信じられない早さで銃を連射した。

時折、弾倉から軋む様な音が聞こえる。安物の銃ではその性能・強度はたかが知れているが、それを壊れない程度の限界ギリギリまで酷使して、常軌を逸した連射を続けた。

そしてその弾丸はグレンデルの頭に当たり、腕に当たり、脚に当たった。

だが、それほどの弾丸の雨を受けても倒れる気配はない。

『無駄ダトということが分らんのか！』

その分厚い鉄のような筋肉に阻まれ、どれも致命傷には至らない。

(やっぱりな…あの筋肉にはこの銃じゃ力不足か…：：：なら、やっぱりあれか)

あらかじめ予想していたらしく、さほど驚く様子も見せずそのまま撃ち続ける。

ただし、今度は狙いを少し変えて。 ひらめいたことがあった。

ダン！ダン！ダン！ダン！

『ドコを狙っている…』

さらに撃ち続けるが、それはことごとくグレンデルの身体を外れて足下へと突き刺さっていった。

しかし、それはセシルの計算通りだった。

「来たか」

何も知らないグレンデルは、落ちてくるセシルを粉砕しようと岩のような拳を構えていた。自らの勝利を確信して、ニヤニヤとした笑いを浮かべている。

だがセシルは口元を歪ませて呟いた。

「沈め」

すると、地面が突如盛り上がり、大きな顎と牙が現れた。丁度銃弾が突き刺さった場所に、さっきの鮫が顔を出した。

鮫には目がないため、地面を走る音で獲物を感知して食らいつく……その習性を利用したのだ。

一方、完全に上だけを見ていたグレンデルは足場を急に切り崩されて体勢を崩した。

「な、ナンだ……」

いきなり足下から襲われたのではたまったものではない。グレンデルは慌てて逃げようとするが、鮫は知能の無い凶暴な魔獣だった。獲物と見なされたグレンデルは、餌になるしかなかった。

「グオ……」

その言葉を最期に2m以上あるグレンデルは軽く飲み込まれ、その強靱な牙と顎で引きちぎられた。

その鉄色の大きく盛り上がった豪腕も、岩石のように固い頭も、鮫は安々と切り裂き、噛み砕いていった。

その隙に着地したセシルは、標的にならないように距離を取って、離れた場所から見ている。

「とんでもないなあ……あれは」

銃弾すら通さない鋼鉄の鉄の筋肉をすら安々と切り刻んでしまう。

目の前にいる化け物の存在に冷や汗をかいた。

そして鮫がグレンデルを地底に引きずり込んで食事を済ませている間にすぐにその場を離れる。さすがに、今アレと戦うには分が悪い。

その後も、迫ってくる魔獣を屠りつつ移動し、一段落ついたところでセシルは周囲を見渡せる高い木の上に乗っていた。

「どうやら自分の周りにいた魔獣はそれなりに掃討できたようだった。」

「まったく、あんまり運動させるなよ……。ただでさえ一日中森の中歩き回って疲れてるのに、一度にたくさん現れやがって」

一人愚痴をこぼすセシル。だが、ふと見るとわりと広い開けた場所に何十匹もの魔獣が輪になって集まっている。

そして、その輪の中にはデймとルーンがいた。

彼らの周囲はまるで結界が貼っているかのような空間が空いていた。

その領域に近づこうとした魔獣は、暗器と魔法でことごとく倒されていく。

「だが……数が多すぎる。いつまでもつか分からなかった。」

「くそ、そうも言ったられないな」

急いで木から下りて、大量の魔獣の群生へと駆け抜けていった。

視界は黒色に塗りつぶされていた。その黒の中に無数に存在する赤い点。

魔獣特有の赤い目はある一点に向けられていた。今にも食い殺さんとする魔獣たちの殺気を一心に浴びているのは、栗色の髪の女と、金髪の男。

ドーナツ状に、二人がいる空間だけがポカンと空いていた。栗色の女……ルーンが貼った結界のせいだ。

それでも結界を越えて侵入してくる魔獣に攻撃するのが、手にククリと呼ばれる大型ナイフを持った金髪男、デймの役目だった。

相手が気配を感じるよりも早く接近して、首を刈り、瞬殺。

こんなことを、さっきからも十回と繰り返していた。

「あー!!! …… たくこいつら一体どこから沸いてくるんだよ!!!」
もうほとんどストレス発散気味だったが……

体に仕込んである暗器のほとんどを使い、結界を破って侵入してくる魔獣の急所を一ミリの狂いもなく貫き、潰し、首を刈り落としていった。

「……数も多いみたいですし、一気に行きましょうか」

そしてルーンは、その結界を維持したまま、通常よりもかなり早い聞き取れないほどの速さで詠唱を行って魔法を発動させた。

普段使う魔法より、少しだけ高等な魔法を。

「……“螺旋火柱”」

その瞬間、巨大な炎が生まれ魔獣達を飲み込んでいく。黒一色だった視界が、今度は紅蓮に染まっていく。

ツツツゴオオオオ!!!

やがて炎は何本もの火柱となり、絡まり合い、踊り始める。魔獣はその渦に身を焦がされ、挟られた。

幻想的な炎の演舞が終わった時、もうその場に立っているものなど誰もいなかった。唯一、結界に守られていたデймとルーン以外は。

「……相変わらずすげえな、ルーンの魔法は」

デймは感心した様子で惚けたようにその光景を見ていた。

「……ふう。さすがに私も魔力を消費しすぎたみたいですよ……」

維持し続けていた結界を解き、地面にへたり込むルーン。もう立つ事すらままならないだろう。それをデймは優しく見下ろしてねぎらいの言葉をかけた。

「お疲れさん……お、セシルも無事みたいだな」

セシルは二人が無事な様子を見て安心して駆け寄ってくる。

「おーい、無事だったか？」

「ああ、なんとか……」

そう言いかけた瞬間だった。意外な人物が姿を現した。

「やっと見つけました……」

穏やかな青い目、赤みがかかった淡紫色で肩にまでかかった滑らかな髪。

教官のテアナだった。

「あ、先生！ 大変なんすよ、今」

「異国から侵入者が入ってきてます。今、おそらくマールと交戦中ですが、敵の戦力は未知数ですし……このままだと」

ルーンの口ぶりは落ち着いているが、気が気でない様子で、祈るようにテアナに伝える。

彼女は、ただ友達としてマールを心配していた。 さっきの戦闘中もずっと気になっていたのだろうが、テアナがきて安心した反面、マールのことが気がかりだった。

「そうですか、厄介なことですね。……あなた達、侵入者を見たんですね？」

「はい。黒い神父服を着た、痩せた男です。先生、お願いします。なんとかしてください」

「大丈夫ですよ、大丈夫……」

「……………」

テアナは、三人を見回した。

心配そうに見つめるルーン、慌てているディム、そしてセシル……ほんの一瞬の間が空く。

そして笑った。

「白遁」

声が聞こえた。

かと思えば……目に電気のような、熱のような強烈な衝撃が走った。そして突然目が見えなくなった。

視界はどこを見ても真っ白で、さっきまで目の前にいたディムと

ルーンの姿を探ることが出来ない。

と、同時に、脳に直接雷が落ちたかのような凄まじい轟音が耳に叩き込まれた。

「ぐ……」

「きゃ……」

「うあ……」

突然のことに、3人は立っていられなくなり、その場に崩れ落ちた。

「あなた達には眠っててもらいましょうか」

(どうということだ)

訳が分からないまま、彼らの混乱した意識はだんだんと白く濁っていき、やがて途絶えた。

4話：仮面の外れた日（前書き）

セシル達三人と魔獣の戦闘中、テアナが現れました。
しかしテアナは…

4話：仮面の外れた日

寝るのは好きだが、夢を見るのは嫌いだった。大抵はろくでもない、不安感に押しつぶされるような夢ばかりみるから。

悪魔に追い回される夢だとか、化け物に焼かれる夢だとか。

夢は人間の深層心理を表すというが、自分のことはよく分からない。

ただ、そうでないものもある。

たまに夢の中で知らない女の人が出てくることがある。

今回はそれだった。

白衣をまとった、科学者風の女が親しげに話しかけてくる。割と美人だ。年齢は、自分より年上だろうか。ただ、なんて言っているかまでは分からない。

女は笑顔が絶えることがなかった。だがその中でも知性を感じるような雰囲気だった。

そして見たこともないというのに、何故か、その女と話しているだけで心が安らぐのを感じた。

心地よい気分だった。自分と相手が、とても良い関係であることが分かった。

(ずっとここで過ごせたら楽しいだろうな……)

しかしやはり、目覚めはやってくる。

意識がだんだんとはっきりしてくる。

そして女の姿がかすんでくる。もう少し聞きたいことがあったのに……聞かなくちゃいけないことがあった……目が覚めれば、多分忘れてるだろう。その前に……

(名前……何?)

そして、目が覚めた。

セシルは意識を取り戻すと、目の奥のほうに石でも詰まってるんじゃないかと思うような鈍痛が頭に響いた。

「ぐっ……。デйм、ルーン？」

体を起こし、頭痛にもだえながら、少しずつ記憶を取り戻してきた。演習中に、異国からの侵入者が現れたこと。そいつが何かの魔法で生み出した魔獣と戦っていたこと。

突然テアナが現れたこと。そして、いきなり魔法で自分たち三人を攻撃してきたこと。

信じがたいことの連続に、全部夢だったんじゃないかと思ったりもしたが、あいにくセシルが今いる場所はベッドの上ではなく、演習場の森の中だった。しかも、デймとルーンが側で倒れている。目覚める気配はない。

「……死んじやないだろうな」

そつと、彼らの心臓の音を聞いてみる。まだ息はあるようだった。それにまずは一安心する。

そうしていると、後ろでがさつという物音が聞こえた。振り向くと、テアナがそこにいた。彼女は驚いた様子で、起きあがっているセシルを見る。

「あれ、もう起きちゃったんですか？」

「……おい先生、こりゃ一体どういうことだよ」

セシルはテアナを睨み付けた。

だが、そんなことを気にも止めない様子で、ニコニコといつも通り笑っていた。

「へえ、まさかこんなに早く幻術が解ける思いませんでした。あら？ あなた……」

テアナは急に真顔になってセシルを見つめ始めた。ゆっくりと、値踏みするように。

その表情の変化に、若干戸惑うセシルだったが、じっと睨み付けていた。

やがて何かに納得したのか、なるほど、と呟いて、またもとのニコニコ顔にもどった。

気が付くと空は真つ赤な夕焼けに染まっていた。深い森の中にも、オレンジ色の光が差し込んでくる。

テアナは空を見上げて言った。

「綺麗な夕焼けですねえ、この分だと明日は晴れでしょう。自然というものはいつ見ても美しく、心が和むものです……そう思いませんか？」

それはセシルがよく知る人物。こんな状況でもいつも通りの柔らかな笑みを崩そうとしなかった。

「……先生」

何を言いたいか分からない。

セシル達の担任。新人教官の、テアナ。男女問わず様々な生徒に慕われている人物。将来有望な若き一級軍師。

セシルが知る限りの、彼女の情報が頭をよぎる。

「しかし、残念ですね。手荒な真似はしたくなかったんですが、仕方ありません」

そんな彼女が、今自分の目の前に立っている。この状況下で、自分たちを気絶させた上に結界に閉じこめる。その行動が意味するところは一つしかないと思った。

「なんだよ、それ」

思わずそんな言葉が口に出る。セシルは驚きを隠せないでいた。さっきまで、自分達は異国の侵入者と戦っていたはずだった。

セシルとデイルとルーンで、敵の数を減らし、マールがあのルイスとかいう男を倒す、そういう作戦のはずだった。

そして、少しでも時間を稼いで先生に知らせようということも考えていたはずだ。自分たちでは手に負えないから、先生に助けもらおうと。

ところが、その助けに来た先生に、ディムとルーンはやられた。いろいろと起きすぎてパニックを起こしかねない状況だったが、こうなった今、セシルは自分でも驚くほど冷静だった。

「先生、なんでこんなこと？ どういうことだよ」

そう聞いた後、自分がこの期に及んで随分と間抜けなことを言っているかに気づいた。不意打ちを打ってきた相手にたいして、どうもへったくれもない。

考えるまでもない、敵だからだ。

セシルはテアナを真っ直ぐ見据えた。いつも通り、なんら変わった様子はない。

「分かっているでしょう？ アナタがさっき見た通りです」

「あんだ、スパイだったのか……」

テアナがああ神父のスパイだとしたら、筋が通る気がした。

今回の演習もマールのエア・アンカーを奪うという計画のために用意されたものだと考えれば納得がいく。

(なんだよ……全部、こいつが仕組んだ畏だったのかよ)

そして肝心のテアナは相変わらず微笑を称えながら、からかうように答えた。

「だとしたら……どうしますかあ？ セシル・クラフトくん」

その言葉を聞いて、セシルは久しく感じていなかった感情を思い出した。怒り、そして…殺意。

セシルは銃を手に取り、身構えた。先の戦闘で多少破損してはいしたが、まだ十分使える。

一方のテアナは特に身構えるのでもなく、自然体でその場に立っているだけ。余裕を見せていた。

相手は教官…自分は一介の兵士候補生。

力の差は明らかだった。はつきり言って、万に一つの勝ち目もあ

るかどうか分からない。

アカデミーにおける教官というのは、それほどまでに強大な力を持っている者だった。

だが、それでも……

(もうこいつがこの世に一秒だって生きることが許せない)

「ふふふ……」

セシルの殺気を受けてもテアナは動揺の様子すら見せなかった。そして、そんなことは気にも止めずに話しかけてきた。

「ところで……実はこの森全体には結界が張られていますけど、気づいてます?」

カゲや魔獣などと、これまでにかなり大規模な戦闘が行われているにも関わらず、すぐ側にあるアカデミーからは森の中に援軍どころか偵察すら来ていない。

つまり、外から森の中に入ってこれないということ。

結界、それもかなり巨大なものが張られていると考えるられる。

「実はこの結界は私が維持してまして。でも、さすがにずっと維持してるのは疲れるんですよねえ。ただでさえこの森広いですし、広範囲に抜かりなくやると余計に」

突然そんなことを言い出すテアナをセシルは怪訝な顔で見ている。

何故自分に情報を与えているのか……そんなことを教えても自分には何の得にもならないのに……。

「で、そろそろ私も退散しようかと思ってたところで……セシル、あなたが起きちゃいました。見逃してくれるとありがたいですが、そうもいかなさそうですねえ」

そこで一呼吸おいた後、まっすぐセシルを見つめ

「この結界ももって後5分くらいです。……でも」

すると……殺気が吹き出した。とてつもなく強大で、絶対零度の殺意。

ギヤーギヤーギヤー……

突然、木にとまっていたカラスの大群が飛び立ち始める。

空気が、水が、時の流れさえも凍り付いたように錯覚させる。

寒い……

見る者すべてを凍てつかせるような視線を受けて、思わずたじろぐ。

予想以上の化け物ぶりにセシルは圧倒された。

そして、殺気を放ったまま口元に凶悪な笑みを浮かべ

「アナタならその5分で事足りる」

悪魔が、動き出した。

その少し前、別の場所。

マールは走っていた。

それも信じられないスピードで影の魔獣たちの攻撃をかわしながら。

そしてそのついでにすれ違いざまに、ピンポイントで弱点を撃ち抜くなんてこともやってのけて。

「はっ」

風切り音のような銃声が4回、そこには弱点を打ち抜かれた魔獣の屍が20体ほど転がっていた。

並んでいる魔獣を貫通し、銃弾一発にして5匹ほど一気に殺す。

動きの不規則な魔獣を上手い具合に並べてタイミングを見計らって一気に撃ち抜く、なんて常人離れした離れ業を、走りながらやってのけた。

その様子を見て、真っ黒な神父服に身を纏った神父風の男、ルイ

スが暗い……狂ったような笑みを浮かべる。

「はは……その銃もさることながら、アナタも本当に期待以上の出来ですね。さすがは、アイボリー。楽しませておくれ」

そう言いながらまた本を開き、その度に魔獣を多数出現させる。

恐らく、あれもエア・アンカーのような固定魔法なのだろう、とマールは思った。

本の表紙には、見慣れない古語によってなにやら呪文のようなものが書かれている。

本を開けば魔法陣が出現し、そこからまたさっきの倍以上の数の魔獣が溢れてきた。

「物量作戦とはせこい真似を……。でも、きりがないわね」

はつきり言つて、魔獣たちだけならばマールの敵ではなかった。

マールならば、どれだけの数の敵がいようとその位置、弱点、強さ、さらに筋肉の収縮などからどこへどのよう動こうとしているか、どのような魔法を使ってくるのかを完璧に把握して一切無駄のない動きでそれに対処できるからだ。異常なほどの行動の先読み能力……マールにはそれが備わっていた。

しかし、彼女も人間だった。限りなく出現する敵にはさすがに疲弊する。

そして、ルイスもただ黙って観察しているだけではない。

「ワールウインド」

本を片手に詠唱を終え、魔法で攻撃してくる。

さつき、奇襲を仕掛けてきた時に使ってきた魔法だ。小さなつむじ風は、やがて全てを飲み込む巨大な竜巻へと変貌する。

「う、まずいかも……」

結界を張ろうにも、とても間に合いそうもない。

それを見極め、マールは側の林に飛び込んで攻撃を凌いだ。直後、盾となった木々は根こそぎ巻き上げられ、宙を舞っていた。

「まだですよ」

薄ら笑いを浮かべて言う。

すると、隠れていた林の中から魔獣が襲いかかってきた。ここに追い込まれることは読まれていたらしい。

強靱な脚力で加速されたかなり速い攻撃……肉食獣の牙が首筋に食らいつこうとした。だが

「そうでしょうね」

すでにマールは把握していた。牙が届くよりも速く、その体を蹴飛ばす。そして間髪を入れずに魔法を唱える。

「招雷！」

バシユウウ！ という音は、獣が蒸発する音だ。

雷をまともに浴びた魔獣は、跡形もなく消し去られた。

ほっとしながらも、マールは息を切らしていた。

「はあはあはあ……」

近接、中距離、遠距離、不意打ちや集団。

あらゆる角度から襲いかかってくる魔獣の攻撃を避けながら仕留めていく……そんなやりとりが、もう何十回も繰り返されていた。

全体的な能力ならばマールの方が明らかに上だったが、無限に出現する敵に少しずつ疲弊させられ、体力も精神も削られていった。

（この魔獣の群れをなんとかしないと、確実に負けるわね……）

集中力も途切れそうになるが、自分を奮い立たせて冷静に戦況を確認する。

ルイスに少しでも隙があればそこに付け込んで一気に畳み掛けるつもりでいた。

（あの本、おそらく固定魔法。あれさえ奪えれば……）

マールは待った。今はルイスは油断している、必ず隙が出来る。とにかく、チャンスが来るのを待っていた。

「マール嬢……この状況ではいかにあなたでも、私には近付くことすら出来ない。身体能力ならば、この魔獣共よりあなたの方が上だ。

だが気付いたでしょう？ 私はこの本から無限にコイツらを生み出すことが出来る。圧倒的な数の前にはどれほど強力な個体でも無力なもの。さて、そろそろファイナルとしましょう」

そう言っただけルイスは本をパラパラとめくり始める。その途端、ルイスの周囲の景色が歪んで見えた。それほど強力な魔力が集中し始めていたのだ。

黒い渦のようなものがルイスの持つ本を中心に巻かれ始める。誰もが圧倒されるような魔力が溢れ出てきた。

だが、それこそマールが待ち望んだ隙だった。

「隙、見つけた」

口元を歪ませ、そう言うと、一陣の風が吹いた。

マールがルイスの元へ向けて疾風となって一気に間合いを詰める。

その時にあちこちに発生した魔法陣から魔獣が飛び出てくるが…
…どれも疾風となったマールを止めることは出来ない。

迫ってくるあらゆる攻撃をその眼で受け流し、ついでにすれ違いざまに蹴りや突きや銃弾を浴びせて邪魔者を吹っ飛ばしていった。

「なっ……」

ルイスは驚愕の表情でその光景を見つめる。

巨大な魔力の集中には、まだ時間がかかるため、今接近されるとまずいことになる。

マールは、ルイスの魔力の動向を見切り、溜めに要するわずかな隙をついたのだ。

目前に迫ったマールに、慌てて魔法を放とうとする、が遅かった。

「くっ、ワールウィ……」

「うるさい」

あっという間に背後に回り込んだマールは、魔法を唱えようとしている神父の頭を掴んで近くの木に叩き付けた。ガンツという音が響いた。

「ぐあ……」

マールはそのまま腕を取り、地面へとねじ伏せる。

「さあて、と観念しなさい。これから質問に答えてもらおうよ」
形勢逆転。

ルイスを地面に組み伏せると、エア・アンカーを後頭部へと押し当てた。

「アナタなら、その5分で事足りる」

そう言った直後、テアナの全身から殺気が噴き出した。悪魔じみたどてつもない悪意が。

「どうやって殺そうか、楽しみでしょうがないという気概がびりびりと伝わってきた。」

「……くっ」

思わず腰が引けるセシル。

これ以上殺気に当てられると動けなくなるかもしれない……麻痺しそうになる体を奮い立たせて銃口をテアナに向けたままセシルは動き出した。

木から木へ、蜘蛛のように動き回るセシルとは対照的にテアナはその場から動こうとしないばかりか、手に武器すら持っていない。

「一見無防備だがその自然体の姿勢がいかにも恐ろしいものは、容易に想像できた。テアナは教官、一級軍士だ。」

銃撃や魔法の場合も、弾道を見切れさえすればその場を動かなく

ても最低限の動きだけで銃弾を避けることもできるし、一瞬でも動きが鈍ればその隙を見逃すはずがない。

案の定……

ダウン、ダウン、ダウン！

木の上から2発、その後地面に降りる際に1発。ちなみに、最初の2発はフェイク。当てるつもりで撃った落下中の1発はテアナからは死角となる角度から撃たれたものだったが。

「ふんふんふん」

鼻歌交じりに……まるで後ろに目があるかのように体を傾けて簡単に避けてしまった。

「やっぱりなあ……」

その事実を確認したセシルは驚いてはいなかった。

掠りもしなかった銃弾は空を切り、テアナは何事もなかったかのように体制を元に戻す。

「キレのいい攻撃でしたが、その程度では私には傷一つ付けられませんよあ？」

（不意打ちが効果ないなら）

地面に降り立ったセシルはテアナと真正面から対峙する。

「小細工は意味なし、か。それなら……」

続けて攻撃を加えようと再び銃を構える。1秒間に20回以上という指が引きつりそうになる超連射で動きを封じる……そういう作戦に出たのだ。

だが

「そうそう、いつまでもそんな所に突っ立っていると危ないですよー」

テアナがそう言った直後、背後に巨大な熱を感じた。と、同時にセシルは振り返らずに思いつきり地面を蹴って横に跳んだ。足の筋肉が断裂するのを覚悟し、全力で。

巨大な魔力で構成された炎弾がセシルに迫ってきていたからだ。

次の瞬間、

まるで隕石のように周囲に降り注いだ炎弾が次々と爆発した。

ゴオオオオ！！！！

直撃を避けたとはいえ、度重なる爆発による爆風に巻き込まれ、すさまじい勢いで吹き飛ばされる。

「熱っ……痛てえ……」

背中に少し爆風を浴びてしまい、服が焦げて火傷を負った。吹き飛ばされて体を強打する。おまけにさつき避けた時に限界まで足の筋肉を使ったので、早くも筋肉痛のような痛みが走り始めた。

「化け物かよ、くそ……ルイスとかいう神父よりよっぽど質悪いな」
体中で無事な箇所はほぼない。だが、これでもまだましなほうだったと言える。

さつきの魔法が直撃していれば、もちろん一撃で消し炭になっていただろう。

地面にはクレーターのような大穴が開き、爆心地に近い木は燃えながら倒れ落ちた。

「避けましたか。なかなかの反応ですよ。平凡な訓練生の割には粘りますね」

「魔法以外はだいたい出来るんだよ、俺は」

セシルは立ち上がり、次に備える。

だが困った。セシルの想像以上にテアナは強い。

こちらからの攻撃に完璧に対処しつつ、気づかれることなく魔法を発動させていたなんて。

普通、魔法の発動には詠唱を行うが、その声すらも聞き取れなかった。少なくともルーン以上の高速詠唱であることは間違いない。

「しかし……なぜ使わないんです？」

テアナは不思議そうに尋ねた。

「何の話だよ」

なんのことだかセシルには分からなかったが、聞く必要もないと判断していったん後ろに距離を取った。

うっかり接近すれば何をされるか分からず、慎重にならざるを得なかった。

「ま、どっちにしる私には勝てませんけどね。そろそろ念仏でも唱えてた方がいいんじゃないですかー？」

テアナがゆつくりと近寄ってくる。

武器らしい武器は持っていないがさっきの魔法を見ればそんなものは必要ないことは一目瞭然だった。少なくともセシルを殺すためには。

「……ここで気抜いたら殺されるしなあ」

セシルは真剣な表情でテアナの動向を警戒しつつ、集中力を高めていった。

対峙しているだけでも、汗が噴き出てくるのを感じた。

敵は強大で冷酷だ。本気になったら一秒で仕留められるのをわざと遊んでいる。その油断をつくしか方法はないだろう。

セシルは手に持った銃をしっかりと握りしめる。だが、その頼みの銃も酷使につぐ酷使で壊れかけている。握るとミシミシと音がした。

元々安物なので仕方がないとも言えるが、今はセシルの細い生命線だ。

「もってくれよ……」

祈るように呟き、テアナに銃口を向ける。と同時に撃つ。このまま後手後手に回っていてもじり貧だ。なら、攻める。

まずは頭。首を傾げるだけで難なく避けられる。

もう一発。

次は胸。身をよじって避けられる。
さらにもう一発。

足。跳び上がって避けられる。
だが、攻め続ける。

ズダダダダダダン！！！！

銃弾の嵐。

圧倒的な数の銃弾があらゆる角度から、銃弾を浴びせ続けた。
マシンガン並みの弾幕がテアナを包み込むように迫る。

「ん……」

それらを、超人的な身のこなしで回避し続ける。テアナの周りは穴だらけで、岩や木はボコボコの蜂の巣になっていた。

そして、そう何度も凌げるものでもない。

「……………」

度重なる銃撃に、ついに一発の銃弾がテアナの足を捉えた。

これだけの数の銃弾を受けて、急所を外した被弾が一発というのは驚異的だったが、足に被弾したことにより、動きは鈍る。

そして、普通ならテアナの急所に銃弾を当てることなどほとんど不可能だ。

足に当てて鈍らせて、たとえ一瞬でも動きを止める。これがセシルの待ち望んだ隙だった。

そしてそれを決して逃さない。

一秒にも満たない時間でマガジンを入れ替え、一瞬動きの止まったテアナに銃口を向ける。

「これで終わりだ」

超連射……指が干切れそうなのを我慢して、さらに何十発という銃弾がテアナに向けて一気に撃ち込まれる。

そしてその全てがテアナの急所を狙いつつ、避けられないように

微妙にタイミングを外して撃たれたものだった。

終わった、とそう思った。

足に被弾した状態では、いくら教官……化け物といえど到底回避することはできない。

仮に殺すことは出来なくても、戦闘不能状態にはできるだろう。そう考えていた

だがその考えが甘かったことを知るのは数秒後のことだった

「砂陣」

ズバシヤアア!!!!!!

「は？」

予想を覆す光景に、間抜けな声を上げる。

強い風が吹いたかと思うと、地上に散りばめられていた細かい砂や土が突如としてテアナの周囲を覆う分厚い層となって出現した。

そして全ての銃弾は勢いを殺されて封じ込められた。

高度な魔法だった。周囲の環境を利用し、防御壁を作り出す魔法。だが、あのタイミングで魔法を瞬時に作り上げて、それで銃弾を防ぐなんてのは理論上は可能でも、実践できる者などほとんどいない。

「おいおい、それは反則だろ!？」

思わず叫ぶ。そして、極度の酷使によって最早使い物にならなくなった安物の銃を投げ捨てる。

テアナは砂の中からその姿を現した。

「やれやれ私も少し甘く見ていたようですねえ、かすり傷を負ってしまいました」

足に受けた傷は、もうほとんど治っていた。あの砂の結界の中で

治療を施したのだろうか……それとも最初から、直撃を反らして避けていたのだろうか。

どっちにしろ、セシルの決死の一撃はほぼ意味をなさなくなった。

テアナが魔法を解くと、体を覆っていた砂の中からは凄まじい圧力で潰された銃弾がこぼれ落ちた。

「ですが私はまだ生きてます」

圧倒的な威圧感がセシルを襲った。動けなくなるほどに。そして身動きが取れないセシルにゆっくりと詰め寄ってくる。

「さすがに驚きました。まあそれでもアナタの詰めが甘かったってことですねえ。足を止めてから総攻撃までの時間がありました。おかげで魔法唱えられましたし」

「……マガジン交換の早さには自信あったのにな」

そうは言っても、一秒もかかっていたいないのだ。その間に魔法を唱えたテアナがいかに人間離れしているかを改めて理解した。

そして、テアナは足の被弾などすでに完全になかったかのような素早さで飛びかかってきて、回し蹴りを放つ。

脳が揺さぶられる強烈な一撃だった。まともに受けたセシルは吹っ飛ばされ、地面をバウンドして転がった。

「……………」

目の前には光が飛んでいた。頭がもうろうつとする。痛みよりもそっちのほうがつきつかった。方向感覚は定まらず、視界もぼやけてるくに前も見えない。

「お終いですか？」

そう言って笑う。それこそ、いたぶるのを楽しんでいるようだった。

「それじゃあ、さようなら」

瞬間、テアナの手元から何かが放たれた。投げナイフ……それは

一直線にセシルめがけて迫ってくる。

一筋の光が閃いたとしか見えないそれは、とんでもない速度で飛ばされていた。

とても避けられそうにない。

(俺はこのまま死ぬのか……)

体は言うことを聞かない。その間にも、確実に迫ってくる、死。

実際には0.1秒ほどもない時間だっただろう。だがセシルにはやけにゆっくりに見えた。死を間近に感じて、走馬燈が回り始めているのか、極限の集中力の中で刻一刻と迫ってくるナイフの一閃をその目で捉えていた。

そして、何か考えるよりも先に思わず右手を突き出していた。

ボールが飛んでくれば掴もうとする。転んだら手をつけて怪我を防ぐ。身を守ろうとする、人間として当然の防護本能だ。

だが、その無意識の行動が思わぬ効果を生み出した。

セシルは無意識に右手を突き出した。そしてその右手には何があるか。

「……え？」

セシルは信じられない光景を見た。

「やっと使いましたか。追いつめられないと使えないみたいですね」

ナイフが、その場で静止していた。文字通り、空中で微動だにせずその動きを止めた。

セシルが思わず突き出した右手に刺さる直前で止まっていた。

「な、なんだこりゃ」

セシルはそつと、空中に止まったナイフに触ってみる。動く気配はない、普通のナイフだ。そしてセシルが触れるとナイフは糸が切れたように下に落ちた。

「あなたの力ですよ。セシル」

テアナは真剣な表情で言った。だが、セシルには分からない。な

ぜこんなことが起きるのか。自分がこんな力を持っていた覚えはない。

「俺の力……って？」

「それ」

テアナは、セシルを指さした。いや、正確にはセシルの突き出した右手を。

「あなたが、その指にはめているものはなんですか？」

右手には、演習の前にはめた指輪があった。

セシルの最古の記憶。もうほとんどおぼろげで顔も覚えていない、父親からもらった指輪だ。はめたのは今回が初めてだったが。

「万象の指輪」

テアナは真面目な表情のまま、指さして言った。

「私も驚きましたよ。まさかあなたが持つてるとは思いもよりませんでしたからね」

「万象の……指輪？」

なんだそれは、とセシルは思った。まさかこの指輪の名前だろうか。ただの銀のリングにそんな大層な名前が付いていたなんて知らなかった。

「まさか、知らないで持つてたんですか？」

「……なんだよ、教えるよ」

急かす声からは焦燥感が表れていた。テアナはため息をついて答える。

「固定魔法ですよ。それも特殊なね。本当に知らなかったんですか？」

「そりゃ……初耳だ」

(親父からもらった、この古い指輪が……固定魔法?)

セシルの思考は停止していた。ただただ信じられないという思いで、右手の指輪を見つめる。

「まあどうせ、あなたには使いこなせませんけどね。さっさとそれを渡して、降伏しなさい」

その言葉でテアナの襲ってきた理由が分かった。例の神父のスパイが狙っていたのは、マールのエア・アンカー。つまり固定魔法。神父とマールが仲間だとしたら、やはり固定魔法らしいこの指輪を狙っている。そして、さっきまではこの指輪の力を恐れて本気では向かってこなかったのだろう。

「……ことわる」

「ふふふ、無理しなくていいんですよ？ 足が震えています」

強がりもいとこだった。この化け物相手に勝てるわけがない。それでも指輪を渡さないのは、ただの意地だった。

大人しく指輪を渡したところで、なんになる？

スパイにいいように利用され、固定魔法は奪われ、自分はおそらく消されるだろう。仮に生き残ったとして、戻ってきたマールに申し訳が立たない。

いや、もしかしたらマールは戻ってこないかも知れない……。そうだったら、ここで逃げて生き延びる意味なんてあるのだろうか？

「さ、渡しなさい」

テアナがゆっくりと近づいてくる。その気になれば一歩踏み込むだけで殺せるというのに、ゆっくりと、じわじわと追いつめる。

足が棒になつたように動かない。死の気配は濃くなってきた。

『お前にこれを渡そう』

顔も覚えていない父親の言葉が頭をよぎる。

生きているのか、死んでいるのか、それすら分からない父親との繋がりを示す、唯一の品なのだ。

それを奪われる、指輪を……固定魔法を。

(そんなこと、させるか……！)

セシルはゆっくりと右手を突き出した。元々、普通の流動魔法ですら全く使えないセシルには、固定魔法を使いこなせというのは難しい注文だった。

(さっきと同じように……ナイフを止めたときと同じように。死を

目前にしたあの時のように、集中を。極限の集中力を……)

セシルの脳の奥で、何かのスイッチが入ったような感覚がした。

これなら……

「使える、万象の指輪」

指輪が熱くなつたような感覚がした。それと同時に、セシルは右手を大きく振り上げた。するとそれに連動して、近くにあった大岩が何個か飛び上がった。

文字通り、突然重さが無くなつたかのように、飛び跳ねるように宙に浮く。

それに明らかに驚きを隠せないテアナは目を見開いて、浮いた岩を見つめる。

「これは……まさか使い方が分かるんですか、セシル？」

「起死回生、つてやつだな」

セシルはそう言つて、右手を握りこんだ。

すると宙に浮いていた大岩がテアナのいる場所に向けて、四方から包み込むようにして猛スピードで飛んできた。

それを、テアナは慌てて地面を蹴つて上に回避する。岩は互いにぶつかり合つて、まるでダンプ同士が正面衝突したような衝撃で粉々に砕け散つた。

「……なんとも凄まじいですね」

テアナは心底驚いていた。固定魔法の効力、それもあるがセシルが『万象の指輪』を使ったことだ。

20年前には当時の一級軍師を含めて、この国の誰も使えなかつたという幻の固定魔法だった。それを……この生徒は使つた。

テアナはそのまま木の上に着地すると、セシルを見下ろす。実力では圧倒的に自分が勝っているにも関わらず、警戒せざるを得ない不気味さを感じていた。

(この子は……危険ですね)

「先生、俺らを裏切つたこと覚悟しとけよ」

そして、たった一回岩を動かしただけでセシルは、もうこの指輪

の使い方をマスターしていた。息をするのと同じほどに容易く、幻の固定魔法を使いこなせる気がした。

一気に優位に立ったセシル。反撃の開始だった。

5話：万象の指輪（前書き）

セシルが持っていた指輪は固定魔法だった。

そしてその力を使い、絶対的な戦力差にあるテアナとの戦いに逆転の目を見いだそうとします。

5話：万象の指輪

テアナは警戒していた。

さつきまでは小さなネズミ同然だった目の前の生徒が、今では獅子となって牙をむいている。

それぐらいの変化が、起きていた。彼の指にはめられている、指輪によって。

「火柱」

テアナは牽制に魔法を放ってみた。魔法自体は誰でも使える簡単なものだが、テアナほどの実力者が使うとなると話は別。強力な炎の塊となって、全てを灰にするべくセシルへと向かっていった。

セシルはそれを避けようともせず、ただ右手を前に突き出した。
「止まれ」

止まった。爆発的な勢いで迫っていた炎の柱は、セシルを焼き尽くす寸前で動きをピタリと止めていた。

「万象の指輪、身につけた者にあらゆるものを操る力を与える固定魔法……。そう聞いてましたけど、魔法も操れるみたいですねえ」

「そうみたいだ、な！」

セシルは腕を払う動作をする。すると、止まっていた炎がこんどは凄い勢いでテアナの方に向かっていった。

しかも、さつきよりも炎の勢いは増していて、今にも飲み込もうかというほどだった。

テアナはそれを難なく避けようとした。だが
「分ける」

セシルがそう言うと、一つの塊であった炎が、角が生えたように分かれ始めた。

炎は、まるで矢のように細い筋になってあらゆる方向に拡散され

た。

「……ちい！」

テアナは少し驚いて、炎に当たる直前でストップして避けた。

(炎を完全に操ってる……すごい)

元々はテアナの放った魔法だったが、それを奪い、完全に自分のものとして使っている。テアナには信じられないことだったが、やはりセシルは指輪を使いこなしているようだった。

「やりますねえ」

厄介だった。しかし、どうしてか分からないがテアナには笑みがこぼれる。久々に本気でやれるかもしれない。

テアナは根っからの戦闘狂だった。

一方セシルは、初めての感触に驚いていた。

(こりゃあすごいな……)

指輪をはめたのは初めてだったが、指にピッタリフィットして、全く違和感がない。まるでセシルのために作られたかのような感覚。そして、この能力。はめた瞬間から、その使い方が頭の中に流れ込んできた。何がどこまで出来るのか、何に対して有効なのか。

(見えない手で掴むような感覚……物体だけじゃなく、魔法も操れた)

異常なまでの飲み込みの早さだった。

元々セシルは馬鹿ではなかった。魔法以外はなんだって平均以上は出来るのだ。

「まだまだこれからだろ、先生！」

炎はまだ勢いを弱めない。拡散した炎が、また同じ一つの塊に収束し始めた。

いや、それどころか、さっきよりも勢いを増して燃えさかり始めている。

「これが……指輪の力」

テアナは感嘆の声をあげる。固定魔法の効果が常軌を逸しているのはテアナも知っていたが、これは興味深かった。

魔法は一度の詠唱に一回限り。それは変えようのない、大原則だった。一度放たれた魔法が、二度も三度も動き出すなんて普通はまず考えられない。

だがそんな原則を嘲笑うかのように、魔法はさらに勢いを増し、巨大なうねりをあげて再び襲いかかった。

「ふむ……」

テアナはそれに対して冷静に、相殺すべく魔法を唱える。

「碎渦」

唱え終わった刹那、空間一帯が水で覆われた。空気中の水分子に干渉して、それを肥大させて水を生み出す。

やがて、凝縮した水はその圧力から凄まじい激流となって炎を迎え撃った。

ズバシヤア！！！！ シュウウ……

「やはり私が放った時より、威力が数段強化されているようですね。これは厄介です」

大部分の水が蒸発してしまった。手加減して撃ったはずの魔法が、これだけの威力をもって自分に返ってきたのを見て、驚愕を隠せないでいた。

瞬く間に炎は消し去られたが、それと同時に大量の水蒸気が吹き上がる。

（ただの“火柱”が、“螺旋火柱”並の威力になって返ってきた……うかつに魔法は撃たない方がいいってことですか）

だが、セシルは攻撃の手を休めない。より深く集中し、指輪の力を引き出していった。そして小さく笑う。

「言っとくけど先生。この環境全てが、俺の武器だ」

そしてまた右手をふるった。すると、風が吹き始めた。

周囲にある水蒸気がある地点を中心に渦を巻き始めたのだ。

膨大な量の水蒸気は、つまり膨大な量の水だ。まるで吸い込まれ

るかのようにそこへ集まっっていく……。

「な!？」

テアナは声を挙げずにはいられなかった。

周囲を漂っていた水蒸気は、全てセシルの掌に集まっ……
そしてそれは、すでにさつき自分が放った『碎渦』並に凝縮されて
いた。

「本当に夕チが悪いですね、アナタは。他人の魔法をそのまま利用
して自分で新たな魔法を放つというわけですか……」

「まさか俺が魔法使えるなんて思ってもなかっただろ？俺もだよ」
苦々しく言うテアナに、そう言っ……て口端を歪ませた。

今度は右腕を突き出す。激流がテアナを襲った。

「く……!」

その威力は圧倒的だった。竜巻のように渦を巻きつつ、津波のよ
うな勢いで全てを削り、抉り、薙ぎ倒した。

その回転に巻き込まれて、すでに周囲の木の3分の1以上は倒壊
しただろうか。

「いやあ、ちよつとヒヤツとしました」

だが、テアナはそれも回避していた。驚異的な身体能力だった。
激流が木を飲み込む寸前、とっさに激流が届かない上空まで跳躍し
て一時的に流れから逃れたのだ。

そして更に畳み掛けるべく、セシルは念を込めた。

「休ませねえよ!」

指輪が光る。そして、周囲にあった岩が次々と浮き上がり始めた。
そしてまた、それらがもの凄いスピードでテアナに迫っ……ていく。

避けられないように微妙にタイミングをずらしながら、セシルは一つ一つの岩を操作していた。水からようやく逃れたところに、この波状攻撃。普通なら、まず食らうはずだ。

しかし、それは悪手だった。致命的なミス。

テアナは満面の笑みを浮かべる。

「同じ攻撃が二度も効くと思いますか？ 私は一級軍士ですよ」
テアナはかすり傷一つ負うことなく、岩の猛攻を潜り抜けた。
正面からの攻撃では、とても当てることは不可能だった。

そして、気付かないうちに全ての岩を避けてテアナはセシルの前に立っていた。

「ま、さすがに当たらないか……」

「ふふふ、これはどうですか？」

テアナはどこに隠し持っていたのか、無数のナイフを投げつけてきた。手の動きすら見えない、超高速のナイフ投げだ。セシルはそれに反応して、操っていた岩の一つを盾にして防いだ。硬い岩に、ナイフが深々と刺さる音が聞こえた。

「ふう、危ない危ない……」

さすがに侮れない。相手はこの国の最高戦力の一人だ。

圧倒的な実力差は固定魔法一つで逆転できるほど甘くないだろう。結局は使い手次第だ。

（でも、まだ負けてるわけじゃないよな。むしろこっちが有利だ）
セシルは、盾として使った岩をまた操作しようとする。このままテアナにぶつければ、上出来。そうでなくてもいったん距離を取って離れることが出来ると考えたのだ。

遠隔操作で攻撃が出来る以上、接近する意味はない。自分に武器はないし、格闘で勝てる相手でもない。セシルはあくまで冷静だった。突然手に入れた固定魔法という、大きな力に惑わされることはなかった。

だが、テアナの方が何枚も上手だった。

ドーン！

「……………！？」

突然の爆発音。と、同時にセシルが操作しようとしていた岩が砕け散った。

「ふふふ、私が見ただけだと思いませんか？ 磁石でくつつくタイプの小型爆弾が最近開発されましたね……………小型なので威力は大したことないですが、岩を砕く程度の爆発力はあったようです」

ナイフに爆弾を付けて投げたということだった。

「うつ……………」

爆発の衝撃と砕け散った破片がセシルを襲う。思わず目を覆う。それが致命的な隙となった。

ほんの一瞬、目を離れたその隙をテアナは見逃さない。更に数本、ナイフを投げる。これも、とても避けられない早さだった。しかし、反射的にセシルは右手を前に突き出していた。

さっきまでの戦闘の経験から、テアナがこの隙にナイフを投げてくることは予測できた。それなら、たとえ目は見えてなくても、この指輪の力で攻撃は防ぐことが出来る。

事実、指輪はセシルの周囲からくる攻撃を全て防いでくれるように、セシルが見てもいない飛んでくるナイフはいずれも突き刺さる直前で止まっていた。

だが、それもテアナの計算のうち。困だった。テアナは一瞬にしてセシルの視界から消えていた。

「手品は終わりましたか？」

さっきまで目の前にいたはずのテアナが、セシルの後ろに立っていた。

「あ」

ボゴオッ！

なんて音とともにセシルは空中に浮き上げられていた。知覚すら出来ない、信じられないスピードで迫ってきたテアナの拳に打たれ

た結果だ。脳を揺さぶられて朦朧とした意識の中、風を受ける。

(あー飛んでる……)

一瞬の浮遊感の後、セシルと同じ高さまで跳躍したテアナが見えた。

やばい、と何か行動を起こそうとするも、何をするにもテアナの方が早かった。

顔、喉、後頭部、腹部、肩関節、腕関節、脊椎……急所を含む全身のあらゆる所を、殴られ蹴られ、突かれて刺されて……最終的にはもの凄い勢いで地面に叩き付けられてようやく攻撃が止んだ。

そこでセシルの意識は完全に途絶えた。

「ナイフを投げれば、それを必ず止めに來ることは分かってました。防ぐ岩がなければ、直接指輪の力で止めるしかないということも。そして、その指輪の力を使っている時こそ、致命的な隙です。その力で一つの物を操る間、他のものに注意がいかなくなる……。爆弾付きナイフを直接止めずに、岩で防御したことがその証拠です。なら、あとは簡単な陽動作戦で片は付く……」

着地して、ぼろぼろになったセシルを見やる。圧倒的だった。普通なら死んでもおかしくはない。

だが、テアナのぎりぎりの手加減でどうにか気絶と数力所の骨折だけでした。歴戦の兵士としての実力の差が明確に現れた結果だった。

「ふう」

(最後はちょっとやりすぎでしたね……一応ヒーリングかけときますか)

とりあえず、回復魔法をかけるために気絶しているセシルへと近寄っていった。

「痛くて……」

そして少し離れたところで、目を覚ました者達がいた。

「なんか頭痛いなあ……あれ、なんで俺らこんなところで寝てんだ？」

ディムが顔を上げる。

「うーん、どういうわけか気絶してたみたいですね。あんまし覚えてないですけど……」

ルーンも目をこすりながらフラフラと起きあがった。

「なんだろう、魔獣にでもやられたのかな」

「けっこう長いこと眠ってたみたいですよ……日も暮れてますし」

そう言っつて、二人は歩き出した。とりあえず、目が覚めたら居なかつたセシルを捜すことにしたのだ。

しばらく歩くと、

「あ、テアナ先生！ それにセシルも！」

セシルに回復魔法をかけるテアナの姿を見つけた。

「よかつた、ここにいたんですか。セシルのその傷はどうしたんです？」

「どうやら魔獣にやられたみたいですね……今駆けつけてヒーリングしてたところですよ」

テアナは事も無げに嘘をついた。

ちなみにテアナの幻術には、記憶を混濁させる効果もあり、二人は気を失う直前のことは曖昧になって思い出せなかつた。

「先生が来てくれたのなら安心ですね。先生、マールが……」

とりあえず、二人は気を失う前にテアナに説明したことをもう一度言つた。そしてテアナは、初めて聞いたかのように驚いた様子を見せた。

「……分かりました。じゃあ、私が様子を見てきますから二人はセ

シルをお願いしますね。当分、目は覚まさないと思いますけど……」

「はい、お願いします」

テアナは、マールを探しに森の奥へ出かけた。

「……やれやれ、さつさと“万象の指輪”を回収してから侵入者を捕まえるはずが、とんだ遠回りになっちゃいましたね。マールの」とだから簡単にはやられはしないと思いますが……」

テアナは一人呟きながら森の奥を目指した。

6話：演習終了（前書き）

戦闘を終え、テアナはマールを探しに行きます。
その頃、マールとルイス神父は……

6話：演習終了

最初はただの演習だった。
でもどういうわけか、今は異国の侵入者と命の取り合いをしている。

それ自体は、別に戸惑いはない。少し前までの、彼女の日常だったんだから。

昔と違うのは、仲間がいることだった。

『グオオオアアアア！』

突然、耳が割れるような雄叫びが響いた。どこかに隠れていた魔獣が数体、襲いかかってきたようだ。

人間の体に山羊の頭、それに大きな翼を持った悪魔じみた化け物だ。手には槍のような物を持っている。

どうしてこういう化け物達は銃を使わないんだろう、なんてことを思った。でも、よく考えたらサブマシンガンで武装した悪魔なんてどうもイメージに合わない。やっぱりファンタジーの産物には、ファンタジックな武器が相応しいだろう。

とは言っても、槍と銃の差は歴然だった。

姿を見せたと同時に、全員の頭にヒットさせる。すると、例外なく体は空気に溶けて消滅していく。

一秒もかかっていない、我ながら優秀だと思う。

「……自慢の魔獣達は時間稼ぎにもならなかったわね」

どこに隠れていたのか、魔獣達が拘束されたルイスを助けようと襲いかかってくる。だが、マイルに死角はなかった。

あらゆる角度から来る気配を察知し、的確な対処をするということなど彼女には朝飯前だった。

「まずは、あんたが操ってるこの森の中にいる魔獣の動きを止めなさい。できるんでしょ？」

有無を言わず銃を突きつけて脅す。

抵抗するかとマールは思ったが、ルイスは案外素直に従った。

「ストップ」と一言呟くと、少し前までマールに敵意を向けていた魔獣が急に大人しくなったのだ。

どついう理屈かは知らないが、彼が命じるだけで森中から悪意が消えた。

「動かないで」

そして間接を極め、一切身動きが取れないように拘束した。更に後頭部に銃口を押しつける。

典型的な犯人と人質の構図だが、マールには微塵も余裕はなかった。

「言っておくけど私はあんたの瞬き一つだって見落とさない。妙な行動を起こせばすぐにでも殺すつもりだからね」

だが今のところ、そのような兆候は見られない。心拍数にも乱れはないし、平然としている。

それが余計に異常さを際立たせていた。

自分の命を握られているというのにまるで動揺している様子も、緊張の色すら見えない。

その異常さに、マールは気付いていた。だからこそ、一瞬の油断も許されなかった。

例の本はすでに取り上げている。

そして、それがなければ何も出来ないはずのルイスに銃口を押しつけ、圧倒的優位に立っている。

しかし気がかりなことがあった。

仲間たちのことだ。

不安や焦りが沸々とわき上がってくる。

セシル、ディム、ルーンが魔獣に食われてやしないか。ディムと

ルーンはともかく、セシルは魔法が一切使えない。

まあそれを補って余りある他の技術があるが、やっぱり心配だ。
ここでダラダラと尋問している暇はない。

「……あなたが何者か知らないけど、とにかく軍本部まで来てもらうわ。抵抗したって無駄よ、この森の外には一級軍士が控えてるんだからね」

（こいつをテアナ先生に引き渡す。あとは上手くやってくれるでしよう）

「クツクツクツ……」

声を漏らして笑うのが聞こえた。

「何が可笑しいのよ」

「いえ……抵抗などしませんよ。それに、あの人はまず出てこないでしょう」

「どういうことよ」

マールは更に強く銃口を押しつけた。

ルイスは臆した様子は全く見せない。あくまでヒョウヒョウとした態度を貫いている。

「あんたテアナ先生を知ってるの？ 大した自信ね。でもこの状況じゃ何も出来ないでしょう？」

「ええ。今の私にはこうして、べらべら喋るくらいのことしか出来ません。本も取り上げられちゃいましたしね」

あくまで余裕の表情だ。

それが気に食わなかったが、挑発に乗るわけにもいかない。

「しかし、さすがアイボリー家の娘さんですね。しかも固定魔法の後継者とは。確か、まだお父上はご存命だったと思いますが、何故あなたに譲り渡したんですかね。ちよつと早すぎる気もしますが……」

「……」
「うるさいわね」

そう言って極めていた腕を更に強くひねった。

「痛たた……」

「私の機嫌を損ねて殺されたいなら、今すぐやってやるけど？」

「……いえ、あなたはやりませんよ。感情に流されて情報源を断つような馬鹿な真似はしないでしよう。そういう人ですもんね、あなたは」

全て見透かしたような言い方だった。自分は殺されはしない、とタカをくくっているわけじゃなく、確信をもってルイスはそう考えていた。

事実、マールも殺すつもりはなかった。ただ軍部に引き渡して拷問し、情報を引き出す。まあ、それは向こうの仕事だから関係ないのだが。

「……私の何を知ってるつてのよ。調子に乗らないで」

「この国に忍び込む前に色々調査しましたから、ある程度のことは知っています。まあ少しお話ししましょうか」

そう言つてゆっくりと語り始めた。

「マール嬢、不思議に思ったことはないですか？ どうして自分はこんな力を持っているのか」

「家柄よ」

マールは素っ気なく答える。

「ええ。あなたの家はとても優秀な戦闘屋の一族です。元を辿れば、数百年前の戦争で活躍したある魔術師が始祖と言われていますね」

「……そこまで調べていたの。だったら何よ」

「魔術師とは、文字通り魔法を使う者。では、その魔術師の始祖は誰なんでしょうか？」

「……………」

マールは前に授業で習ったことを思い出した。

『何百年も昔、突然使えるようになった人がいたそうです。私たちは、そんな人達の子孫。だから魔法が使えるというわけです』

そんな馬鹿な、とは思ったものの、実際そうとしか伝えられないらしい。

「ある日突然、使えるようになったらしいわね。理屈は知らないけど」

「ふふふ……」

ルイスは薄く笑う。

この男も、出会い頭に魔法をぶっ放してきた。

この国で使われているものじゃなかったが、どこの国にも魔法という文化はあるだろう。

「そう習いましたよね。まあ確かに世界中のどの文献を調べても、そうとしか言いようがないと書かれています。でも、どうしてなんでしょう？　なぜ、今までブラブラと寝て起きて飯を食うだけだった村人Aが、突然魔法なんてものを使えるようになったんでしょうか？」

この国に限らず、全世界に人間は何千万といる。そして、そのほぼ全ては訓練すれば魔法が使える、いわば魔術師だ。自転車に乗ったり、泳いだりするのと同じで、今では技術として確立されている。

「さあね、まあ使えるもんは使っとけってことで、いいんじゃないの。お陰様でいい戦争の道具になってるし」

マールは自嘲を込めて言った。

戦争のために、こんな力が人間に宿ったのなら、力を与えた神はなんて悪趣味で残酷なのだろう。

ルイスは肩をすくめて言う。

「人間てのは所詮ゲスでしょ……力を持てば金儲けと戦争のことしか考えません。だからこそ、この力が宿ったんじゃないですかね」「どういうこと？」

何が言いたいのかわからなかった。マールは先を促すと、頷いて言った。

「ある時を境に、人間は進化したんですよ。戦いを欲するあまり、強くなりたいたいと願うあまりにね。より効率的に、憎い相手をぶち殺せる力が欲しい……無意識にそう思っていた人間達が、本当に進化してしまつて手に入れた力」

「……そんなこと」

だが、マールはそれを否定できない。頭のおかしい男の妄言だと笑い飛ばすことが出来ない。

その黒い部分の最前線で戦つてきて、これからも戦い続けるマールには。

そして、そのマールの心の内を見透かすようにルイスは続ける。

「戦争で使わなくて、人を殺さなくて何の魔法ですか、という話ですよ」

その言葉が胸に突き刺さった。それはまさに、自分のことだったから。

神の領域に手を出し、血みどろの戦いと引き替えに莫大な富と名誉を得る悪鬼。

魔法という力に目覚めた人間が、戦争を引き起こす。そして自分はその戦争で活躍した人間の子孫だ。そしてそこから何百年もたった今でも飽きもせず同じ家業をやっている。

人間というものの愚かしさを集約していくと、自分という人間に行き当たるのだ。

「……固定魔法は？」

マールは絶望に飲まれないよう、思考停止して冷静に尋ねた。

「それなんですよね」

ルイスは困つたように笑った。

「魔法を手に入れた人間が、それこそあらゆる技術を駆使して作ら

れた魔法の結晶。それが固定魔法です。ただ、今ではその製造方法は失われてしまいました。戦争の道具としては一級品です。ただ今では再現できる人はいませんね、残念ながら。……まあ、だからこそ私達は固定魔法を集めてるわけなんですが」

マールはルイスが最初に言っていたことを思い出した。

「どうやら、この男はエア・アンカーを狙ってきたということ。」

そして、今までの話からこの神父には仲間がいて、そいつらが固定魔法の収集をしているということが分かった。

「何故、私のエア・アンカー……いや、固定魔法が必要なのか？」

そう問いかけてみた。だが、ルイスは薄く笑うだけで

「理由を言えば、くれませんが、それ？」

確かに。どんな理由があるかとマールがエア・アンカーを渡すことはなかった。

それを分かっている、話さないのだろう。回収するには、殺して奪うしかないことが分かっているから。

「ふふ、論外ね」

マールも冷たい笑みを浮かべて答えた。

これ以上この男の戯言に付き合ってもやることもない。自分は自分のやるべきことをやればいい。今まで通り。

ルイスは拘束している。あとは連絡が行くのをただ待つだけだ。

（魔獣達の気配も消えたし……セシル達はテアナ先生と連絡とれたかな。結構時間経ったけど……）

マールは知る由もない。セシルが誰と戦っていて、どれだけ苦しい状況かを。

「ところで、マール嬢」

ルイスがまた話しかけてきた。

「何よ」

「今何時ですか？」

何かと思えば。たしかに、演習を始めた頃と比べて周りは大分日が落ちていく。かなり普通に演習していた時間と合わせてもずいぶ

んと時間が経っているだろう。

マールは時計に目をやり、時間を告げた。

「そうですか……では、そろそろ門限の時間ですね」

「え？」

「いやね、私達には門限が決まってまして……。それを過ぎたら死んだものと見なされて全ての登録情報が抹消されるんですよ……それは困るでしょ？」

そう言うと、ルイスは口から何か取り出した。ひもの付いた鈴のようなものだった。

そして、鈴のひもを器用に引つ張って抜き、ひもが取れて鈴の部分だけが地面に落ちた。

その瞬間だった。

ジリリリリリリリリリリ！！

「っ！？」

音自体は目覚まし時計のようだったが、それとは比べ者にならないぐらいの高音響が鳴り響いた。マールは思わず耳を塞ごうとする、が腕を極めているのでそれは出来ない。

「さて、そろそろ私は帰らせてもらいますよ」

「あ、あんた何を……」

言いかけて止めた。何か大きな気配が迫ってくるのを感じたから。上からでも、四方八方どこからでもない。

下だった。

ザバアツ！ という音とともに、巨大な生物が現れた。

「……鯨？」

大きな顎にびっしり生えた牙は、まさに鯨だった。どうして鯨がこんなところにいるのか分からないが、危険性は火を見るより明らかだった。そんな鯨の魔獣が、土の中から飛び出してマールの方へ向けてダイビングしてきた。

適当に見積もって5mはある、でかい鯨だ。迎撃も間に合わない
と判断したマールは素早くその場を離れて回避した。

そして、その際にルイスは解放されてしまった。

「クツクツク、残念でしたね。さて、その銃を頂きましようか」

鯨のダイビングの衝撃で、さっきまでマールがいたところには大量の土砂が舞い散った。そのせいで、姿が見えない。

「まだ魔獣がいたなんて……」

鯨はルイスの指示を受けるまで地中深くで待機するよう命じられていた。

音に敏感に反応し、どんな小さな物音でも見落とさずに獲物として認識するこの魔獣にマールが気付かなかったのも無理はなかった。

ルイスはその隙に落ちた本を拾っていた。そして、まだ土砂が視界を覆い尽くしている時に、魔獣を出していた。

「出る」

ルイスが出したのは、ムチのような触手を持つ植物の魔獣だった。触手は強靱な強度を誇りつつもゴムのように伸縮性と弾力性に富み、粘着性の液までついていた。

それを、マールに向けて放つ。

「うっ……」

まだ視界も晴れないうちに、何か分からないものが体に巻き付いてきた。はね除けようとすると、力ではどうしようもなかった。

マールはあつという間に簀巻きにされ、さらに口にまで巻き付いてきて一切声が出せなくなってしまった。

「私の勝ちですね」

ようやく土砂が落ち着き、視界も晴れてきた頃、マールの目の前には勝ち誇ったルイスがいた。

甘かった。ルイスは最初から切り札を隠していた。いつでも抜け出せるように。

体は完全に固定され、銃も撃てない。そして口を塞がれていて魔法も唱えられない。完全に詰みだった。

ルイスは動けなくなつたマールにゆっくりと近付いていき、手に

持っていたエア・アンカーを取り上げた。

「んん……！」

「なるほど……これは素晴らしい」

しばらく手に取ったエア・アンカーを眺めていた。拳銃にしては大きい、それをじっくりと値踏みしながら。

「良い戦力になりそうだ……。さて、あなたには死んで貰いましょうか」

触手はさらに力を強める。そして遠くなっていく意識。

さらに、目の前には巨大な鯨の顎が見えた。今マールを捕らえている魔獣ごと食らうつもりなのだろう。

ああ、こんなところで死んでしまうのか。でも、それも悪くない。

これ以上罪を重ねる前に、ここらで地獄に堕ちるのもいいかも知れない。

ルイスの言葉でかなり心を揺さぶられていた。抵抗する気力すら失いかけていた。その時

「その辺にしといてもらえますかー」

聞き覚えのある声がした。

かと思えば、目の前が急に明るくなった。

何かと思えば、隕石のような巨大な火球が目の前に落ちてくるのが見えた。

（あれは……“墜炎弾”？）

強力な炎の魔法だった。辺りを身を焦がすような熱風が吹き荒れ……

ズゴゴゴゴゴ！

それは丁度目のまで迫っていた鯨に直撃した。

今まさにマールを飲み込もうとしていた巨大な顎は、爆発音と共に

に弾け飛んだ。

5 mはあつたであろう巨大な鮫は、炎の圧力に焼き尽くされ、木っ端微塵となった。本当に跡形もなかった。

そして灰と粉塵の中、彼女は姿を現した。

「まだ未熟ですが、うちの若い逸材でしてねえ」

「……あなたに出てこられる前に帰ろうと思つてたんですけどね」
ルイスは想定外、という風な苦々しい顔をした。

見た目こそまだ若い女だったが、それがどれほどの脅威かは事前の調べで分かっていた。ルイスとしては、出来る限り衝突を避けたい相手だった。

テアナ・コーランド。アルバートの一級軍士で、アカデミー教官。一方のテアナはいつもと変わらぬ微笑。この血生臭い場に相応しい様相ではなかったが、彼女は死神だった。

「炎蛇」

マールですらほとんど聞き取れない高速詠唱。

それと同時に、テアナの腕から何か黒いものが現れて巻き付き始めた。

(蛇……?)

マールは見ていることしかできない。

テアナの腕にウネウネとまとわりつくそれが、どんどん長くなっていく。そして、テアナが腕を前に伸ばした瞬間放たれた。

ゴウッ！

熱風が顔に当たる。

凄まじい勢いで放たれた黒い炎の蛇は、獲物を決して逃がすまいと凶悪に睨みつけるような迫力があつた。

まるで本当に生き物であるかのような変則的な動きで、そのまま

ルイスへと迫る。牙をむき、全て焼き尽くそうとまとわりつく。

「ちい！」

ルイスはここへきて初めて舌打ちをし、顔を歪めた。

そして、手に持っていたマールのエア・アンカーを蛇に向けて撃った。

エア・アンカーは、撃ったものを空気中に分解する効果を持つ固定魔法だ。それを考えれば、炎を消すぐらいのことではないはずだ。

回避も防御も間に合わない状況に置いて、ルイスの判断は正しかったと言えるだろう。

だが、エア・アンカーに撃たれた炎蛇はその一部が欠けただけで消え去ることはなかった。そして、えぐり取り、焼き尽くすために炎蛇はルイスの腕に牙を突き立てた。

「グアアアア……！」

灼熱の牙を穿たれ、激痛に叫び声を上げる。

その場に倒れこみかけたがなんとか持ち直し、それ以上の攻撃を避けようと横へ飛んだ。

ルイスの腕を焼いた蛇は、そのまま後ろの林へ突っ込んでいく。

そしてそこにあった全ての物を灰にすると、白い光を上げながら天に昇っていった。

「ぐっつ……！」

掠めた箇所も重度の火傷。牙をむかれた場所に至っては炭化しており、ほとんど使い物にならなくなった腕を支える。

そして、気が付けば一度手に入れたエア・アンカーを落としていた。

「あなたじゃ使いこなせませんよ。固定魔法は扱いが難しいんです」
なぜ固定魔法が国宝に指定され、軍で正式に使われていないかという、希少価値やその能力の異常な高さに加え、扱いの難しさに

ある。適切に使えないと、その半分も能力を引き出せないのだ。

「なるほど……確かに。しかし、まさか一級軍士が直々に来るとは……正直分が悪い。とりあえずここは退かせてもらいます……」

「まさか逃げられるとも思ってるんですか？ 次なんてないです、あなたはこれから尋問と拷問で忙しいんですからね」

テアナは近付いていく。ルイスを拘束するために。

苦痛に脂汗を流しながら、それでも、ルイスは不敵な笑みを浮かべて

「出る……」

辛うじて、燃えた腕と反対に持っていた本を開き、呟く。

途端、黒い水たまりが発生して無数の、何十匹もの魔獣が飛び出してきた。

「これは……!?!」

テアナは突然のことに驚く。

そしてその隙に、ルイスは自分の足下にも黒い水たまりを作った。そして、まるで地面がないかのようにその中に落ちるように消えていった。

「次は、皆殺し、です。覚悟してて、下さい……」

捨て台詞とともに、水たまりは蒸発するように小さくなっていき、やがて消えていった。

そうしてルイスはアルバートから完全に姿を消した。残されたのは、大量の魔獣だけ。

「全く、めんどくさいですね……」

魔獣の群れに囲まれても全く動じる気配もない。

そして、魔獣たちも、何かを感じたのかテアナには襲いかかろうとしなかった。

その瞬間、死ぬことが分かっているからか。

「まあでも、可愛い生徒達をいじめてくれた落とし前は必要ですよ

ね。……あと、私が創った人口魔獣も大半壊してくれた礼もね」
そして一方的な、戦いとも呼べない大掃除が始まった。
そう時間はかからなかった。ものの5分もしないうちに魔獣は全滅していた。

「デアナ先生……」

残されたのはマール。ルイスから取り返したエア・アンカーは、彼女の手にあった。

「気を落とすことはありませんよー。想定外の敵でしたし。彼は大体、二級から三級軍士程度の実力の持ち主でした。訓練生が、負けたことを恥じる必要はないですよー」

そうは言うものの、敗因はマールの油断と精神的な弱さに他ならなかった。相手の実力を見誤り、固定魔法を奪われかけたのだ。マールの自責の念は計り知れないものだった。だがそれ以上に、気になることがあった。

「……セシル達は無事なんでしょうか？」

「ええ。少し怪我してますけど、まあ大丈夫でしょうねー」

自分がボコボコにしたことなど完全に棚に上げて、にっこりと笑った。

それにマールも釣られて笑う。良かった、と心から思った。

以前の自分にはなかったもの、それを背負って戦った。でも、負けた。天才とはいえ、死ぬときはあっさり死ぬものだと思っても知った。そして、自分が死ぬば、仲間も死ぬということも……。そのことは肝に銘じて、マールは大いに反省していた。

なぜ、人間に魔法の力があるのか。ルイスは戦いを望む心が人間を進化させた、と言っていた。

確かにそれもあるかもしれないが、自分は違う可能性を信じたいと思った。

自分以外の何かを背負うための力だと……。

（ま、どっちにしる何も変わらないけどね。私があの家系の人間で、これから家業を継いで行くことは、なにも）

だが、今まで通り何も考えないで戦うよりは良いと思った。

暮れ始めた夕陽に照らされながらマールは微笑んで、みんなのもへと案内するというテアナに着いていった。

いろいろと悶着があったものの、森での長い長い実戦演習はこれで幕を閉じた。

だが、これはまだほんの始まりに過ぎなかった。

偽りの平和が終わり、この世界が真の姿を晒す日がやってくるだろう。

鍵を握るのは彼ら。果たしてどんな結末が待っているか。

セシル達の物語の歯車は、今ようやく回り始めた。

6話：演習終了（後書き）

やっと一章終わりました。長かった…… ^^ ;
読んでくれてありがとう！ まだ結構続きますけどね！

第二章 7話：砂漠へ…（前書き）

あれから一週間が経ちました。セシルは入院しています。

第二章 7話：砂漠へ…

セシルは、病室の窓から空を眺めていた。

雲一つ無い快晴。現実感の欠落した、手を伸ばせば届きそうな、青一色の空。

部屋にどこからともなくそよ風が吹き込んできては、ゆるやかに薄手のカーテンを揺らし、差し込んでくる木漏れ日が部屋を明るく照らす。

爽やかな朝だった。

なにせ、小鳥のさえずりで目を覚ますという、珍しい状況に遭ったからだ。

風が流れ、鳥が歌う。そんな絵に描いたような爽やかな朝にセシルは

「あー……うるさいな……寝るか」

小鳥のさえずりを「うるさい」の一言で蹴散らし、二度寝に励んでいた。

あの、森での訓練中に起きた事件から一週間。

セシルはテアナとの戦闘で意識を失い、その後このアカデミー付属の病院に入院していた。

とりあえず自分が生きているということに驚いたが、それよりテアナが見舞いに来た時は心臓が止まる思いだった。

だが、この顛末を聞かされてセシルは全身の力が抜ける思いだった。

数日前

「騙して悪かったとは思いますが、私が森でやったことは全部芝居です。侵入者を捕まえる前に、貴方達を安全な場所で眠らせてから行こうと思っただんですが、その“指輪”のせいかな、あなただけ目が覚めるのが早くて……」

「……………」

「で、仕方がないからあなたの“指輪”の力を見る意味で実戦形式で戦って、さっさと気絶させて行こうかと思っただんですが……意外と手こずりましたねー。最後はちよつとやりすぎちゃいました」

「俺から指輪を奪うのが目的じゃなかったのか？」

「いやー。最初はそうしようかと思っただんですけどね。固定魔法を振り回されたらさすがに洒落になりませんし……」

「……つまりスパイの仲間ってわけじゃなかったのか」

「スパイ？ 何言ってるんですか？」

結局、セシルの早とちりが生んだ戦いで、つまりは殴られ損だったという。しかし、余りにもタイミングが悪すぎると言わざるを得ないが。

それに気付いてからのセシルは、しばらく起きあがる気力もないほど脱力して、今では気ままな入院生活を送っていた。

表向きはここ数日は平穩そのものだった。だが裏ではかなり忙しく動き回っていた。

そのことをセシルが知るのももう少し後になるだろうが。

ガチャッ

ドアが開き、誰かが入ってくる気配がした。

クラスの誰か、かと思っただがそうじゃないだろうと思っ直した。

今は授業時間のはずだ。と、すると……

「こんにちは、お見舞いに来ましたよお」

寝ぼけ眼のまま、うつすらと目を開ける。

未だぼーっとした頭と視界のまま、ふと横を見ると、見覚えのある顔があった。

……めんどくさいので、セシルはあえて寝たふりをすることにした。

「うーん、むにやむにやもう食べられない……」

「あれえ、寝てるんですか？　せつかくお見舞いに来たというのに連れませんねえ」

この間死闘を繰り広げた悪魔、いや女教官がそこにいた。

ニコニコと微笑んだまま、じっと見つめてくる。なんとなく落ち着かなくて、寝返りを打ってみる。

「うーん。この間の怪我のお返しに、顔中に落書きしておくかそれとも……魔法で記憶いじって私のペットにしてやりましょうかねえ」

何て言うのを聞けば、とても見舞いに来たとは思えないが……。

「……起きりゃいいんでしょ、起きりゃ……」

少し怖くなったのか、そう言いつつ怠そうに体を起こすセシル。

その目はこれ以上ないと言うほど、眠気と無気力さを訴えているが。

ベッドの横に立っているのは、セシルを病院に送った張本人である教官のデアナ。

セシルとは一週間前に殺し合いをした相手……と言っても、実際

は全てテアナの策略だったのだが。

セシルの力を測るため、という名目で絶望的な状況を作り、戦闘を挑んだのだが、“指輪”の力は思いのほか強力だった。そのため、テアナは攻撃の目測を誤り、セシルは入院する羽目となった。

多少の責任を感じているのかは分からないが、たまに見舞いに来る。

あとはクラスの連中がちらほらと。同じチームだったマール、デイルム、ルーンなんかはよく来たりする。

「あ、タイミング悪く起きましたか」

残念そうに言うテアナ。セシルは寒気を覚えつつそれを無視して「……全く、先生も人が悪いよな。こっちはかなり真剣にやってたのに芝居だったなんて……」

「見抜けないほうが悪いんです。だいたい、私は教官なんですから、自分の生徒を殺害なんてそんな簡単にするわけじゃないじゃないですかあ……」

「ちっ……」

だがセシルには反論できなかった。なにせ、自分の早とちりから生んだ結果だ。

確かに今考えてみれば、明らかにおかしいと思う点がいくつも湧き出てくるが。

そんなことを思い出して、セシルは頭を抱えてベッドに倒れ込んでしまった。

だがテアナは、そんなセシルの様子は無視して

「まあそれはいいんですが……体の調子はどうですか？」

その言葉に、セシルは体を半分ほど起こして、首をコキコキ鳴らしてみる

そしてしばらく調子を確かめてみて

「ん、怪我はもう完璧に治ったし大丈夫だけど、まだ首筋が痛むかなー……」

と、嫌みっぽく言いながらテアナの方を見る。

それにテアナは少し驚いて

「あら？ ちょっとやりすぎましたかねえ」

「ちょっとじゃないって……」

一週間経つてもまだ骨が痛いんだよ！！ と突っ込むが、それは笑って誤魔化される。

セシルは、じっとテアナを半眼で見ていたがやがて

「ってか、本当に見舞いだけに来たのか？ 他に話があるんじゃないのか？」

「……そうですね、ではそろそろ話しましょうか」

そう言っつて、一度息を吸い込んでから、テアナも真剣な表情になる。

「この間の森に侵入したスパイのこと……覚えていますよね？」

「そりゃ……」

もちろん、忘れるはずもない。

森の中で、突然襲ってきたあの神父服の男……。

魔法陣から生み出した、何百という魔獣を自在に操り、その上結界を突き破るほどの強力な魔法を使用する……これまでで一番危険な敵だった。

そのことを思い出して、セシルの表情にも緊張したような色が見えた。

「もちろん覚えてるけど、それがどうかしたのか？」

「……今のこの状況が分かりますか？」

テアナは窓から外を眺める。

病室から見える景色は、綺麗に手入れされた自然公園が真正面に見えた。

そこで遊ぶ子供たちと、和やかに談笑する親たち。

この間、あんな事件があったというのに、全く変化のない怖いくらいの平穩。

「一週間前の事件で、アカデミーは混乱しています。

表向きこそ何事もなかったかのように過ごしていますけど。あの大陸戦争以後、どの国も均衡を保ってきたのが、ここに来てあの騒動ですから。どこの国が放った刺客か分かりませんが、戦争の予兆かもしれません」

戦争、と言ったテアナの目は真剣だった。

すでにどこかの国がアルバートの侵略に備えて情報収集を始めているのかもしれない。

不意を突かれてからでは、何もかもが遅すぎるのだ。

セシルは空を見上げ、遠くを見るようにぼーっとしながら

「戦争ねえ。全く、どこの世界にも好戦的なやつはいるんだな。数年前も戦争があったってのに……」

「私達は、国の力。敵にとっては直接的な脅威となります。相手もそれを分かっているながら、あえて攻撃してきた。だとすれば、ここから先は情報戦です。戦争を回避するために……以前のような過ちを繰り返さないためにも」

するとテアナはそこで一端言葉を切り、決然とした顔でセシルに言った。

「それでセシル、貴方には特別演習が言い渡されています」

「……って、え？」

突然のことにセシルは思わず聞き返す。

「ちょ、ちょっと特別演習って何？」

慌てて声を挙げるセシル。自分がどういう状況なのか、さっぱり分からない。

だがテアナはにやりと笑うと

「……ふふふ、ここでの入院生活は退屈でしたよねえ？」

「え？ ああ、まあ一週間もいればそれは……」

そこでテアナは立ち上がり、セシルに背を向けてドアの方へと歩いて行く。

そしてドアの手前まで来たところで一度振り返ると

「つまりそういうことです、じゃあ私はこの辺で……」

「いや、意味が分かんねえよ!!」

そんなセシルの突っ込みは、また笑って誤魔化されるが……それにテアナが

「鈍いですねえ……せつかく貴方が退屈で死にそうだって言うから私が推薦してあげたんですよー」

「死にそうとは一言も言っていないけどな……って、あんたが持ってきたのかよ!!」

「ええ、今回は厳選された人材が必要なんで」

それにセシルは心の底からめんどくさそうな声で答える。

「厳選された人材？ それならマイルに任せればいいだろ」

だがテアナは

「何言ってるんですか、もちろんマイルも行きます。で、あなたも一緒に行くんです」

「……まじで？」

「はい」

セシルは団体行動が苦手だった。
団体だとサボることができないからだ。

「あ、ちなみに私も行きますから。男と女が他国で二人きり……そんな危ないシチュエーションでは何か間違いがあったら困りますしねえ」

そして三人以上は確定らしい。というか、さっきもの凄く重大なことを言ったような……

「何が間違いだか、危ないシチュエーションだか知らないけど、そんなことよりも、他国ってなんだ!？」

慌てて問いたただすセシル。テアナはそれにあっけらかんと

「国外での演習ってことです、それが何か？」

何を言ってるんだこいつは、という風な目で見てくるテアナ。

それにセシルも文句を言う気力もなくして

「……はあ、当分休みはなしなわけか。まあいいや、授業サボれるし」

「それはどうですかねえ」

「え?」

セシルが聞き返したとき、テアナの表情には……いつもの微笑ではなく、悪戯っぽいニヤニヤとした笑いが浮かんでいた。

そのままの表情で、セシルの方を見て

「そうそう、セシル。あなたの体はもう完全に回復していますからもう退院できます。というか、もう退院手続きも全て終わっていますか今すぐ着替えて教室まで来てください。重大な発表がありますからあ……出来るだけ急いで下さいねえ」

バタン……

一気にまくし立て、言うことだけ言ってテアナは帰っていった。

「何なんだよ、全く」

独り言を言いながら、テアナの言うことを思い出す。

特別演習とやらの話。どうやらアルバートの国外に行くというダ
ルいことこの上ないもの。

それから重要な発表があるという。今日は何かあったのだろうか
……。
何かあったような気がする。でも思い出せない。

（何だったかな。どうでもいいことだったような気もするけど。ま
あ行けば分かるか）

着替えを済ませ、荷物をまとめて部屋を出て行くセシル。

セシルの気分とは裏腹に、相変わらず空は嫌味と思える程晴れ渡
っていた。

「はい、じゃあ呼ばれたら取りに来て下さいね」

テアナの明るい声が教室に響く。それと同時に、順番に候補生達
がテアナからあるものを受け取る。

成績表。

仮にも、彼らはアカデミーの“生徒”であるのだから当然こんな
ものも付けられる。

まあ学習内容は普通の学校とはかなり異なってはいるが。

「はい、アイフィーナ。今回はなかなか頑張りましたね、これから
もこの調子で頑張ってください」

「は、はい。ありがとうございます……」

生徒達は皆、個別にテアナの言葉がかけられる。

それに笑顔で応えて席に戻っていく生徒達。そんなやりとりが、40回ほど繰り返される。

成績を見て、落胆したりや嬉しそうに顔を緩ませる生徒が大半を占める中、その様子を限りなくどうでもよさそうな表情で見つめる男が一人。

「忘れてた……今日がそうだったか」
成績発表。

確かに重要っちゃ重要なものだ。

セシルが真面目に授業に取り組んでいるかどうかなど、成績表を見るまでもないのだが。

期待は出来ないな、と思った。

「お、怪我はもう良くなつたんだな、セシル」

声をかけられて振り返ると、そこには金髪の男がいた。

小柄だが、引き締まったその体のあちこちには、外からは見えな
いが大量の暗器が仕掛けられている。

セシルは片手を上げて答えた。

「退院して早速、これだからなあ。すっかり忘れてたけど」

「そろそろお前の番だろ？ 早く行ったほうがいいんじゃないのか
？」

確か名前は……一瞬考えてセシルは

「ん、ああ……分かってるって、テル」

「誰だよそりゃ！」

と、叫ぶデйм。するとその後ろから、また見知った顔が出てき
た。

「うるさいですよデйм。今はホームルーム中なのでですから、静か
にしないと」

「あ、悪いな」

現れたのは、少しウェーブのかかった柔らかい栗色の髪の少女、ルーン。デームは、昔からの典型的な優等生タイプであるルーンには頭が上がらないのだった。ルーンはその様子を一瞥すると、今度はセシルの方を見て

「で、セシル君も呼ばれますから早く言った方がいいですよ」

「はいはい。んじゃ、ちょっと行ってきます」

そしてとぼとぼと歩き出すセシル。

成績には全く期待していないこともあって、その足取りは限りなく重かった。

テアナは憂鬱だった。自分とある程度とはいえ、対等に戦った生徒の成績を見て……。

「はい、セシル。あなたはもつと頑張りましょうねえ……」

そう言っって手渡された成績表は

銃	技	：	A	1	0	0	/	1	2	0
魔	法	：	E	3	/	1	2	0		
体	術	：	B	8	0	/	1	2	0	
理	論	：	B	8	0	/	1	2	0	

総合評価……C

ちなみに成績は120点満点で、S～Eまででランク付けされている。

実戦に加え、理論の理解度を総合的に判定したものだ。セシルの成績は相変わらず平凡だった。

だが、誰もが突っ込まずにはいられない箇所が一つある。

「へえ、まあ良い方かな。魔法がまた下がったけど」

「はあ、相変わらずやる気がないですねえ」
「んなことは、……いやあるけどさ」
テアナは呆れた表情でセシルを見ていた。

「おい、セシルどうだった？」

「ほら」

「……3点で、お前……」

「うるせえ」

「あー……銃技は結構すごいじゃないですか」

ディムは絶句し、ルーンは必死で褒めるところを探していた。

そんなこんなで、生徒達はそれぞれの評価をもらい、教室を後にした。

「ああ、セシルにはまだ用が残ってるんです」

テアナが出て行こうとするセシルを呼び止める。

「え、何それ？」

「ほら、あの話ですよ。ルーン、ディム、セシル借りて行きますね」

そう言って強引にセシルの腕を取って引つ張っていった。

後に残された二人は呆然とそれを見送っていた。

「どづいつこつたらうね」

「補習とかじゃないんでしょうか。まあセシル君も素質はありそうだから秘密特訓したりとか……」

「あの先生がか？ 冗談だろ」

「ま、ここで待っててもしょうがないし、食堂でも行きましょうか。マールもしばらく時間かかるみたいですし」

「そつだな。……今日はうどんの日だな」

「いつもと一緒にじゃないですか」

なんてやりとりをしながら、二人はそろって食堂へ出かけていった。

一方その頃、とある執務室で。

背中まで流れるように伸びた茶髪。

切れるように鋭い眼の奥には、今はエメラルドグリーンに染まった真っ直ぐな瞳が輝いている。

マール・アイボリーは、学校の中にある軍部にこの間の訓練中の出来事を報告していた。

「……というわけです」

レアル・フォームズはテアナの話を黙って聞いていた。大柄で眼鏡をかけたその男は、一見すると豪胆な人物に見えるが、目や表情からはどこか知性を感じさせた。

年齢は30代半ばでまだ若いが軍の中では出世株であり、実質アルバートアカデミーの長でもあった。

「なるほど」

その報告に静かに頷くと、真っ直ぐにマールの眼を見据えて

「そのルイスとかいう神父風の男は、君の固定魔法を奪おうと襲ってきて……しかも他国のものと思われる魔法も使ってきたというわけだな」

男はメモを取りながら要点を纏めていく。

これをさらに上に報告することになるが、賊の侵入を許し、おまけに取り逃がしたとなると、また上から嫌味を言われるだろう。今から憂鬱だった。

「ご苦労だった」

言ってから彼は眼鏡の端を持ち上げ、頭を整理するために目を瞑

った。

この間の訓練の時に起きた事件……既にいくつもの情報が彼の耳には入っており、それが現在、頭を悩ませている問題だった。

アルバートアカデミーは、他国との国境に近いという立地条件もあって、その造りは極めて頑丈で一種の要塞になっている。

他国あるいは犯罪組織などと交戦になった場合には、ここを拠点に防衛および攻撃をすることになる。

そのため、アカデミー内に張り巡らされた罫や魔法による結界や更に最新の探知システムは数知れない。

だが……今回侵入してきたスパイは、それらを全てを避けてアカデミー内に潜入した。

マールの話によると、敵も固定魔法を持っていたということだ。魔獣を無限に呼び出し、使用者を空間転移させる効果を持つという本……厄介な代物だった。

そしてテアナが来て助かったが、間に合わなければマールは殺されていたということ。それだけの実力を秘めていた。

(テアナのやつですら、取り逃がしたとなると……)

一級軍士ですら追跡不可能で、どこへでも変幻自在に現れる他国の侵入者。

その事実、今のアルバートに重く圧しかかっていた。

「……………」

沈黙が続く。今は、圧倒的に情報が足りなかった。次は皆殺しだと、ルイスは言った。

次があるとすれば、敵はさらに強力な戦力と、緻密な計画を用意してくるだろう。

下手をすれば、アカデミーが内部から崩されかねない。

そして、アカデミーの崩壊はそのままアルバート共和国の崩壊にも繋がっていく。

なら、それを回避するためにどんな行動を取れば良いのだろうか？
だが何をやるにしても、今のままでは情報が少なすぎる。
すでに国外各地に偵察を放っていたが、それでもまだ足りない。

焦ってはいけない、だがグズグズと時間を掛けていられる問題でもない。

相手に気付かれることなく、自然な形で情報を収集できるように、早急に偵察を送り込む必要があった。

そう、自然な形で。

「あのう……私もう帰っていいですか？」

険しい表情の教官を見て、恐る恐る遠慮がちに尋ねるマール。
レアルはいったん考えるのを止めて彼女を見る。

「いやまだ……ところで、腕の調子はもういいのか？」

マールは遭遇したスパイ……神父との交戦で、腕を折られていたからだ。

一週間入院して治療を受けたとはいえ、もしその怪我が深刻ならば……今後、支障が出てくる可能性もある。

だがマールは自分の腕を見つめ、肩をぐるぐると大きく回してみせると

「完全……じゃないですけどね。通常の動きに支障がない程度は回復しました。治療の魔法もかけてもらいましたし、元々ただの骨折ですから」

あはは、と笑って答える。

マールにしてみれば、『ただの』骨折くらいでは全く大したことではないのだろう。

レアルはそれを聞いて安心した様子で

「そうか、それなら大丈夫だな」

「……？ はい」

不思議そうに答えるマール。それから教官はマールの目を見ながら

「では、さっそくだが特別演習に参加して貰う。これから君には、ライスコーフまで行ってもらいたい」

「ら、ライスコーフ！？ って、あの砂漠の国に……何の演習なんですか？」

ライスコーフとは南東にある五大国の一つで、国土の大半が広大な砂漠だ。

急なことに、マールは驚いた。ちよつと前まで入院していたというのに、いきなり特別演習だということ……。

レアルは、有無を言わずといった感じでマールを見つめている。どうやらノーとは言えない雰囲気のような、とマールは思った。

「詳しいことは後で説明する。メンバーは君と目付の軍士一人と、それからもう一人」

ガチャッ

教官が言い終わる前に、執務室のドアが開いた。

「失礼します。テアナ・コーランド・イリアと、セシル・クラフ

トです」

入ってきたのは、いつでも笑顔の女教官と、怠そうな表情の男。
マールの視線がドアの方に向いて

「あ、先生……それと、セシル？ 何であんたがいるの」

マールは驚いて声を掛ける。まさかセシルが来るとは思っていなかったから……。

セシルは疲れた表情でマールの方を見ると

「さあ、俺が聞きたいくらいだよ。今日、急に言われたんだし」と、かなりげんなりした表情で言う。

「目付の軍士はテアナ先生だとして。それじゃあ、もう一人私と一緒に行くメンバーってのは……」

マールはまさかと思いつつも、テアナの隣にいるセシルを指差す。

「セシルですよ。何か問題でもありますが、マール？」

「いや……問題というか、意外だったんで」

マールは驚いて目を丸くしていた。

「今回セシルを推薦したのは私なんです。成績表には現れてませんが彼の“特技”は今回使えるはず。それは一級軍士である私が保証します」

テアナにそう言われてはマールも特に言うことはない。

「それはそうと……はい、マールの成績表です。後で見えて下さいねえ、いつも通り貴方はトップですけど」

「そうなんですか。ありがとうございます」

教室で渡しそびれていた。

受け取りながら、セシルを見やる。特技、銃の他に何かあるのだろうか、と思っただが

「腹減ったなあ。はやく終わらんかなあ……」

セシルはいつものセシルだった。

「というか、それは置いていて、そろそろ俺らが何するのか教えて欲しいんだけど……特別演習としか聞かされてないし」

「そうだな。全員そろったところでそろそろ説明を始めようか」

その一言で、レアルに3人の視線が集まった。

それを確認したところで、説明を始める。

「今回、君らはライスコーフまで行ってもらう。そこで、この間の襲撃事件に関する情報を集めてきて欲しい。めぼしい場所や人物のリストは、コーランドに渡してあるから後で読むように」

「つまり、偵察任務……?」

マールは不思議そうに尋ねる。レアルの言っていることは、簡単に言えば偵察という任務だ。

それも、本来なら三級以上の軍士が担当するレベルだった。演習という範疇を超えている。

人聞きの悪い言い方をすれば、こそこそとスパイ活動をしてこいということなのだから。それも、友好を保っている同盟国でだ。

「さすがにそりゃ……俺らには荷が重いんじゃないですかね?」

セシルも心配そうに不満を漏らした。

そして、どうなってんだよ、という風にテアナを見つめる。

「最後まで聞け。これには君らの協力が必要不可欠なんだ」
不安そうな二人を制して、説明を続ける。

「まず、先に言った特別演習とは、一言で言えば留学だ。

セシル・クラフトとマール・アイボリーは、これから交換留学生として、ライスコーファカデミーへ向かってもらう。その引率にコーランドがついて行く。交換留学制度については知ってるな？」

「はい、まあ……そこまで詳しくは知りませんが、要は一定期間、お互いの学校の生徒を交換しあうってことですよね」

レアルは頷く。

「各国の士官養成学院……つまり同盟国間でアカデミーの優秀な生徒を互いに交換しあう、短期的な留学制度のことだ。交流と銘打っているが、実際にはそれによって『こちらはこれだけの戦力を育てている』ということを、他国へアピール……別の言い方をすれば圧力を与えるわけだ。これには、若干の政治的な意味合いも含まれているが、この際それはどうでもいい」

更に補足を加え、説明を続ける。

うんうん、と真剣な表情で聞き入っているマールと、壁にもたれて眠そうな目をしているセシル。

二人の様子を後目に、教官は言葉を続ける

「それで君達はアルバートアカデミーとも繋がりのある、ライスコーフのアカデミーに交換留学生として訪れることになっている。怪我は癒えたみたいだし、君達なら適任だと判断してのことだ」

マールはともかく、セシルは担当の教官に怪我を負わされたのが……。

セシルはその言葉に苦笑しつつ

「へえ……そういう建前で、ライスコーフを探っただけでこいつで

すね」

「ま、そういうことだ」

こんな大変な時期に、しかもわざわざこの間の事件の当事者を、外国に行かせるなんていう危ない橋を渡らせる理由は一つしかなかった。

レアルは、マールから聞いた情報をもとに各国の調査を行っていた。その結果、最近不穏な動きを見せているという国をいくつか割り出した。

その一つが、ライスコーフだった。

「交換留学生として向こうに行くわけだから、疑われることはまずありません。まさか同盟国の代表が堂々とスパイ活動をするとは思ってもいなくてしょうしねえ」

「その上これは毎年続いている伝統行事だからな、何の違和感もなくこちら側の人間を送り込める良いチャンスだ」

アルバートとライスコーフは、過去に何度か戦争はあったが、今では同じ五大国として同盟を結んでいた。

だが、かと言って気を許せる情勢でもなかった。

軍勢力が釣り合った状態で維持されている、吊り橋のような関係だった。

「とはいえ、実際の情報収集任務はコーランドがやる。君たちは普通に向こうで学生生活をしてくれればいい。何かあれば、コーランドから指示がいくはずだ」

「なるほど……」

マールは神父……ルイスのことを思い出す。今度会った時には、あんな失態は繰り返さない。借りは必ず返す。そう心に決めていた。

「話はそれだけだ。出発は一週間後、今から準備しておけ」

「ういす」

「分かりましたー」

そして、危ない状況を楽しむように、マールは笑顔で答える。迷いのない、真っ直ぐな目。

そして意気揚々と出て行くマールの後ろを、セシルは怠そうについて行った。

「さてと、どれくらい向こうにいるのかな。着替えは多めに持って行かないと……」

「あんな暑いところ行きたくねえよー。行くなら海のある、リアとかが良かったなあ」

「ああ。でもあそこは確か今、傷ついたサンゴ礁の保護だとかで、海岸の大部分は遊泳禁止になってたわね」

「ええー!? なんだよそれ」

外から聞こえる声が執務室に響き、それが徐々に遠ざかっていく。テアナは、そんな様子に微笑を浮かべて

「騒がしいですねえ、レアル先輩」

二人を見送ってから、椅子に座ったまま様子を見ていた教官……レアル・フォームズに声を掛ける。

「まったく、気楽なもんだ」

さつきよりも若干表情を柔らかくして答える……といっても、付き合いの長いテアナくらいにしかその変化は読み取れないだろうが。

そうやって話しながらコーヒーを入れ、二人は応接用のガラステーブルを挟んで向かい合って座った。

「……で、テアナ。何故彼を推薦したんだ？」

さつきまでの事務口調とは違った、砕けた様子で話しかける。

「それはもちろん、彼が優秀だったからですよ。予想以上に手こずりましたしね」

テアナもいつも通りの笑みを浮かべて答える。

その言葉の意味は、レアルにもよく分かった。

以前彼女と共に任務を共にしたことがあるが、最前線に出ているにもかかわらず、ほとんど無傷での帰還というのが少なくなかった。

最年少で、それも女性で一級軍士になったテアナのポテンシャルは、それほど飛び抜けていた。

「幻の固定魔法か……まさか使い手が現れるとはなあ」

「万象の指輪は、思ったより厄介でした。使い勝手が良すぎるんですよね……。私の魔法も無効化されてしまいましたし」

「そりゃそうだ。あんな特殊型は他にないからな」

そう言ってコーヒーをすすする。レアルは砂糖はあまり入れない主義だ。

テアナは対照的にドバドバと砂糖を入れて甘ったるくして飲んでいた。

「……しかし、“没収”はしなかったんだな」

「それも考えてたんですが、あえて“観察”にしました。彼は固定魔法を悪用するようなタイプでもないですし、わざわざ父親の形見を取り上げる必要もないと思ひまして」

「だが敵に奪われる危険はあるぞ」

レアルはあくまで冷静だった。彼は固定魔法がどれほど恐ろしい兵器なのか、嫌と言うほど分かっていた。

「……レアル先輩、あれほどの兵器がどうして今になって起動したと思います？ 持ち主のセシルも、今の今まで固定魔法だと気付い

てすらいなかったというのに」

「さあなあ……」

あまり興味もなさそうに、コーヒーをかき混ぜる。

「きつと、今が使うべき時なんです。この20年ほど、誰も使えなかった幻の固定魔法の使い手が現れた……何か意味があると思いませんか？」

テアナは熱っぽく語る。特に理由はないが、彼女には予感があった。

今回のことは序章に過ぎない。もつと大きな波乱が起きる、と。

「君はそういうのが好きだな……オカルトやら陰謀説やら」

レアルは、やれやれと言った感じでため息をつく。

「まあ、奪ったところで敵も使えませんし。倉庫で埃をかぶっているより、鍛えたほうがアルバートのためにも彼のためにもなります」
そう言って、またコーヒーをすすする。

「ちゃんとあれが使いこなせるようになれば、マールに次ぐ実力者になれるそうです。まあどういわけか魔法はからつきみたいですけどねえ」

教官としては頭が痛いところだった。

しかし、いくら教えても一切使えないのだ。魔法は個人のセンスによる部分が多いので、どうしようもないかもしれない。

レアルは一通り聞くと、柔らかく笑いながら

「ま、君がそういうならそれでいいか」

長年の付き合いであるテアナは、レアルからの信頼も厚かった。

「彼がアカデミーに来る前の情報には、父親がいたとあります。父親が地元の村にセシルを預けて、そのまま蒸発した、と。指輪は蒸

発する直前ぐらいに父親からもらったらしいですね」

「あいつか……」

レアルは遠くを見るように呟いた。

「レアル先輩知ってるんですか？」

「何、昔ちよつとな。科学者だとか名乗ってやがったが……全く、子供放り出して今頃なにやってんだか」

遠い過去の記憶。もう十数年も前のことだった。懐かしさからか、自然と口調も当時のものに戻っていた。

「まだうちがいろんな国と戦争してたころだ」

「戦争……」

テアナは自分の手を見つめる。

血塗られた手。

桁違いの魔力を持って生まれたテアナが軍人として生きるのは、時代の流れるに必然だった。

そのおぞましい力を振るい、ここまで生き延びてきて、一級軍士にまで上り詰めた。

そしてまだ二十歳を迎える前に、既に何千という敵を殺してきた。ためらいなどなかった。そんなもの必要もなかった。

だが、レアルの勧めでアカデミーの教官をやり始めてから、自分の中で何かが変わった気がした。

自分と大して年も変わらない、若い世代を育てる……。そのことに、それまでとは違ったやりがいを感じていた。

戦争になれば、自分はまたこの力を使って多くの命を奪わなければならぬだろう。

そして、生徒達も戦場に狩り出されるだろう。

(出来るなら、無駄な殺しはしたくないですしね……)

今回の任務の成功には、想像以上に重い使命が課せられていた。彼女もそれを十分に承知していた。

決意を固め、自分の暗い気持ちを押し殺し、テアナはレアルの方を見て

「……では先輩、私もそろそろ準備に取りかかりたいと思います。いつも通りの微笑み。」

それに、レアルも力強く頷いて

「ああ。……そうだ、ちょっと待て。セシルのやつに渡して欲しい物がある」

そう言い、机から何かを取り出した。小包のようなサイズの木箱だった。

「なんですかこれ？」

「昔、あいつの父親に言われてたことを思い出した。いつか、息子がアカデミーに入学するだろうから、その時、時期がきたらこいつを渡してくれ、ってな。……何となく、その時期って言うのが今のような気がしてな」

「へえ、すごいですね」

テアナは木箱を受け取る。意外と軽かった。何が入っているのだろう……気にはなつたが見当も付きそうにない。

荷物を渡し、レアルは神妙な顔つきでテアナを見つめた。

「……じゃあ、子守は頼んだぞ。やつらにとっては、初の国外任務だしな」

「はい、分かりましたあ」

それにテアナはどこか楽しげに答えてから、執務室を後にしたのだった。

「さてと、着替えは何枚いりますかねえ」
どこかで聞いたような独り言をつぶやきながら……

それにレアルは

「ふう、あいつも変わらん。よくやってきてはいるが」

呆れたように、しかし嬉しそうにため息をついたのだった。

（当面の問題は……スパイの居所探しと、“万象の指輪”を持ったロイのガキか……。ロイに言われたとおり手向けも用意してやったし、セシルに関してはテアナに任せるか）

レアルは物思いにふけりながら、残っていた事務処理の仕事に戻り始めた。

ライスコーフは砂漠の国。悠久の歴史を感じさせるミステリアスな国。

砂漠ならではの独特な町並みや文化、それに遺跡が観光の目玉にもなっているらしい。

「うーん……」

ライスコーフとはどんな場所か。というのを、セシルはなんとなく雑誌をめくって調べてみた。

「ライスコーフか。砂漠はアルバートより何倍も暑いんだろうな！。怠いなあ……」

目に付いた言葉は、砂漠、オアシス、ラクダ、日焼け止めが必要です……等々。

他には、各地の世界遺産や名所が書いてあるがそこまで行く気にはならなかった。

だからだとベッドの上を転がり、やがて雑誌を放り出して仰向けになった。

(留学かぁ。まさか俺まで付いていくなんてな。まあ意外と面白いかもしれないけど……)

なんだかんだで、結構楽しみにしていた。

だが、その前に解決しておかなければならない問題があった。

(銃、どうすっかな)

セシルの手元に今銃はなかった。

前の銃は元々安物であり、セシルの使い方が荒かったせいでガタが来ていた。

その上、テアナとの戦闘で限界以上に酷使したため、バラバラに壊れてしまっていたのだ。

(つてか、銃が無くちゃさすがにやばいよな……俺、魔法使えないし)

魔法ランクEのセシルにとって銃は生命線でもあった。

(今から調達してくるか？ でも金はこの間マイルに借りたまんままだ返してないし、今は銃買う金なんてないし……)

だが、そこで誰かが扉をノックするのが聞こえた。

誰だろう。

「セシルー。お届け物ですよー」

セシルが扉を開ける前にテアナが入ってきた。手には木箱を持っていた。

ベッドから起きあがり、荷物に目を落とす。靴箱程度の大きさの四角い箱だ。

「どうしたんだ先生？ これは？」

「プレゼントですよ。ありがたく受け取ってください」

なんだ？ この先生がプレゼントとは珍しい……訝しみながら、セシルは木箱を受け取った。

「……ちなみに、何が入ってんのこれ？」

「さあねえ。自分で確かめてみて下さい。あ、そろそろ訓練の時間だから遅れないように」

荷物を渡して、テアナは忙しく去っていった。

「何なんだ一体」

疑問はあるがとりあえず、箱を空けてみた。

「……ん？」

何かが布を被せられて、膨らんでいる。

布を取ると、そこにあつたのは……銃。

だが、ただの銃ではない。

銀をベースとした配色に、銃身には金で描かれた螺旋状の模様が入っている。だが、それよりも……銃にしては細く、何よりも軽い形状。

どこか儂げで、美しい銃。それだけで芸術品としての価値はあるだろう。

珍しいこともあるもんだと思った。でもまあちょうど良いタイミングだった。

「……この銃は……あれ？」

銃を手にとってみる。奇妙なことに、ほとんど重さを感じない。まるで羽のように軽かった。

そして、銃身には小さく金色の文字が書かれていた。

『ヴィアゲイター。未来ある旅人の君へ。嘆いてはいけない。足を止めないものだけが未来を勝ち取るのだ』

(ヴィアゲイター……ってのは、この銃の名前か。でも何だこの変な詩は)

「とりあえず、貰える物は貰っとくか」

ヴィアゲイターというらしい、新しい銃をしまい、セシルはまたベッドに寝っ転がって、次の訓練まで時間を潰すことにした。

第二章 7話：砂漠へ…（後書き）

これから舞台は変わって、二章に入ります。
それにしても長かった…… ^^ ;

8話：旅立ち（前書き）

あれから更に一週間が経ちました。
セシル達は朝っぱらから、ライスコーフに向けて出発します。

8話：旅立ち

「遅いわよ！」

まだ薄暗い空に響く、マールの声。

ちなみに時刻は朝の5時である。

集合場所であるアカデミー玄関前にはすでにテアナとマールが到着していて、それぞれ小さな石の置物に腰掛けていた。

セシルは少し遅れて、最低限度の物だけ詰めた、先に来ていた二人よりも格段に少ない荷物を持ってよたよたと歩いてくる。

今日は彼ら三人がライスコーフに向けて出発する日だった。

毎年恒例のアルバートとライスコーフの交換留学の代表に、セシルとマールの二人が選ばれたのだ。

といっても、一週間前に決まったのだが。

まだアカデミーの生徒達の誰もが寝静まっている中、彼らは特別演習という名の偵察任務へ向かおうとしていた。

交換留学生として向こうのアカデミーに行き、向こうの国の内情を探るといふ危険な任務だ。

「セシルも来たことですし、全員揃いましたねえ。じゃあ行きますよお」

間延びした声で引率する、教官であり今回の任務の目付役であるテアナ。その声だけを聞くと、なんとなく遠足のような雰囲気があったが。

「先生、なんでこんなに朝早いんだよ」

セシルが眠たそうな声を上げる。

「ライスコーフまでは地道で行きますからねえ。東へ数百キロほど、列車で行きます。昼過ぎには着く予定なんで」

つまり一日のほとんどは、列車の上ということだ。ならゆっくり眠れるな、とセシルは安心した。

「さて、ひとまず駅まで行きますか」

そうして、3人は国境に向けて歩き始める。

街から離れて行くにしたがい、手付かずの自然が現れてくる。

振り返ると街はもう見えなくなっており、視界の先には地平線が広がっていた。

それからしばらく歩いた後、これまで山だったのが一転して谷になり、隣国とアルバートに分けるように巨大な河が流れていた。

それがアルバートの国境だった。

「へえ、すごいな」

国外へ出る、というかアカデミー付近から出るのも初めてだったセシルは、感嘆の声を上げた。

目に飛び込んできた壮大な自然は、パンフレットやテレビでは感じられない圧倒的な存在感があった。

森と泉の国と言われるアルバートは、意外とこういう景色を求めて来る観光客も多かったりする。

そしてその国境近くに、アルバートの軍部専用のプラットフォームはあった。

国境の検問所には物々しい警備がしかれていた。ライフルやサブマシンガンを持った屈強な守衛の男達が周囲を見張っている様子が見えた。

「やけに厳重な警備だな……」

「まあ状況が状況ですしねえ。警備は固めるようにと言ってありま

すから」

そう言ってテアナは一人でスタスタと検問所の方へと歩いていった。

するとすぐに、反応したライフルを構えた男達が素早い動きでテアナを取り囲んだ。……かと思えば、次の瞬間にはライフルを地面に突き立てて、直立不動で整列する。迅速な行動だ。

守衛全員がテアナに敬礼し、テアナもそれに笑顔で応じる。

「……なあマール。先生つてあんなに偉かったのか？」

その様子を見て、セシルは隣にいるマールに視線を投げかける。

マールは頷いて。

「まあ先生は一級軍士だし。あの人達は三、四級くらいかな。そりゃ、自分より遙かに上位の人には敬意払うでしょ」

「へえ」

気のない返事をするセシルが、普段教官に敬意を払っている可能性は極めて低いようだったが。

そうしている間に手続きを終えたテアナが、早く来いと叫んでいた。

列車は三人を乗せて、一直線にライスコーフまで進んでいった。

周りの景色はビデオの早送りのように一瞬で過ぎ去っていく。やがて緑一色だった風景も、少しずつ砂漠へと移り変わっていった。

時刻は昼頃になっていた。列車に乗った瞬間からずっと寝ていたセシルも、目を覚まして昼食を取っていた。サンドウィッチなどの簡単な軽食だった。

「でもすごいわよね」

窓から薄暗いトンネルの中を見ていたマールが呟く。

「何が？」

「こんな長い線路、よく作れると思うわ」

同盟五大国の間に通されている、軍部専用の直通線路だ。それぞれの国を覆っているので、大陸を一周する巨大な円の形になっている。

「大昔から計画されてたのが、最近になってようやく完成したみたいですねえ。ユーウェイって言うらしいです」

テアナも同じように外を見ながら語る。

確かに言われてみれば、すごいことなのかもしれないとセシルも思う。

「科学の力ってすげー」

流れていく景色を眺めながらその速さを感じる。やっぱり魔法より科学だな、とセシルは内心ほくそ笑んでいた。

「なあ、先生。ここまで来といて何だけど……」

「はい？」

「なんで飛行機使わないの？」

当然、軍用機も空港もあるはずだ。だが、何故列車なのだろうか。だってその方が旅って感じがするじゃないですか」

目を輝かせてそう言うテアナがすごく楽しそうだったので、セシルは何も言わないことにした。

そして数時間後、ライスコーフについた。

「おー、すげえな。本当に砂ばっかだ」

アルバートとは違い、ギラギラの日差しが地上を照らしていた。

昼は40度を超える灼熱、夜はマイナスまでいく極寒という砂漠特有の極端な気候だ。

見渡す限りの砂漠。黄色い砂以外のものは見あたらず、遠くの方の景色は塵気楼で霞んでいる。見ているだけなら、幻想的で美しく

もある風景だ。
だが

「暑っ！」

「うー……」

「暑いですねえ」

早くもダラダラと汗が吹き出てくる。うなだれる生徒二人をよそに、テアナはいつのまにか日傘を差していた。

表情もいつもどおりニコニコしているので、本当に暑いのかどうかも分からない……。

「とりあえず、手続きだけ済ませてきますねえ」

そういつて優雅に歩いていった。

マールは眉をひそめる。

ねっとりと絡みつくような視線を感じた。好奇の目で見られていることはすぐに分かった。

幼い頃から、よく感じていた視線だ。

手続きのため、さっきまでテアナと話していたライスコーフの守衛達が、今は交換留学生の二人を見ていた。

「ほう、彼らが……随分とお若いすな。いや、そちらはあのアイボリー家の娘さんとなれば当然ですかね」

昔からよく言われてきて聞き飽きた言葉だった。マールはうんざりしつ

「どうも」

ぶっきらぼうに一言だけ答えて、それ以上は話さなかった。

ちなみにセシルはというと、自分に話題が振られないのが少し不満げなようだったが。

「いつも通り俺は無視か……いいけどさ。」

まあそれよりさっさと行こうぜ先生。これ以上こんなところに突

っ立ってたら焼け死ぬって」

上着を脱いで、手を団扇のようにして扇ぐ真似をする。

手で扇いでも風はほとんどこないのに、ついやってしまうのはなぜだろうか。

「……はい、これで手続きは完了です。街までは一直線ですから分かると思います」

「分かりました。じゃあ我々はこれで失礼します」

「あ、車貸しますよ」

テアナも頷いて守衛に別れを告げるといよいよ国境を越えて歩き始める。

「ここから先は歩いていきます。なに、アカデミーがある街はここからすぐ近くにあるみたいですよ」

「……」

「……」

「だってその方が……」

「車使おうぜ頼むから」

炎天下、セシルは土下座しかねないほどの勢いで懇願する。だがテアナはあっさり切り捨てる。

「でも私こつち用の免許持ってませんし」

「そんなバカな……」

「歩くしかないわね……」

こうして三人は歩き始めた。

一応、道らしきものはあるが砂にまみれて見えにくく、油断すればすぐに迷ってしまう。遭難なんてしようものなら、一日も経たずにミイラが出来上がるだろう。

国境を過ぎてから数分後……大きな看板があった。

『 国境を越えたら、もう目前！ 宿のご予約はお早めに。ライス
コーフ旅行代理店まで 』

……等々。ホテルの宣伝と一緒に旅行代理店のイメージキャラク
ターのイラストまで入った豪華な看板。

イメージキャラの名前はキュンキュンと言っらしい。どうでもい
いことだが。

「おいおい、目前だつて。これは結構近いんじゃないのか」

セシルは思わず声を挙げる。何キロも歩くのだと思っていたので
かなり嬉しい情報だ。

だが、テアナは首をかしげる。

「んーどうでしょうねえ。私の聞いた話ではまだまだ先のはずなん
ですが……」

「よーし、目前だつて言うんなら俺も頑張ろうかな」

そしてセシルはそのまま意気揚々と早歩きを始めた。目標があれ
ば頑張れるタイプらしい。

そして、看板を見てから一時間近く歩いた頃……

「何が目前なんだか……」

街はまだ見えてこない。

見渡す限りの砂漠に、地平線が陽炎に揺らいで見える。オアシス
のようなものも見えるが、多分塵気楼だろう。

看板を見て一番喜んでいたセシルも、今はげんなりとしている。

「いい加減なもんよね。つて、また同じ看板があるわね」

マールが呆れながら指差す先には、さっきと同じ旅行代理店の看
板があつた。

もちろん、あのキャラクターのイラストも一緒だ。

黄色い体に赤いリボンを付けた、ウサギだか犬だかよく分からない、可愛さもそこそこなキャラ。

子供に人気な邪気のない笑顔が、今はこの上なく憎たらしかった。

「おいこそウサギ、笑ってんじゃねえぞ！」

見当違いの怒りをぶつけてみるが、もちろん看板は反応しない。大声で叫んで、余計に疲れるだけだった。

「暑苦しいからやめなさい。ん……？ あれ、先生。ひよつとして」

マールが何かに気付いて、テアナに声を掛ける。かすかに、塵気楼の揺らめく先に白い影が見えた。

テアナは頷いてそれに答え、黙々と進んでいった。

見渡す限りの砂漠。地平線では陽炎が揺らぎ、周囲にはライスコーフの文化財である石像や遺跡が建ち並ぶ。

ライスコーフの街は近い。

そしてその頃、アルバートアカデミーでは

「やつら今どの辺にいるんだろうなあ」

「時間的にそろそろライスコーフに入ったぐらいでしょうね」

今は昼休み。訓練を終えた生徒達が、それぞれの場所で休んだり語らったり、寝ていたりしている。

デイルとルーンと、数人の生徒も、学園内にある食堂で昼食をとっていた。

「てか、マールっちはともかくとして何でセシルも留学生なわけ？」
そう言いながらペペロンチーノを頼張るのは、同じクラスのレー

シア。

桃色の髪をカールしていて、どこぞのお嬢様のようにも見えるが
いろんな意味で過激な女子生徒だった。

「確か先生に推薦されたって。意外とセシル君も素質ありそうですね
よ」

「そうかなー？ まあ銃はすごいけどねあの子。てか、やっぱりあの
二人って付き合ってたの？」

「いや、どっちもそういうの興味なさそうですね」

カレーを口に運びながらそう言うルーンが、一番興味なさそうだ
ったが。

そして、その隣りでも男共が同じような話をしていた。

「おいカイン、最近調子はどうなんだよ？」

「絶好調さ。この間もジェーンと愛を深めてきたよ！ おはよう・
こんにちは・こんばんは・おやすみのキスは欠かさないし、廊下で
すれ違うたびに『愛してる』と囁くのさ」

「あーうぜえ。死ね。別れろ」

「ははは、嫉妬するなよデйм」

優男風のカインはそう言って笑った。デймは苦々しくその笑顔
を見て

「俺は調子はどうなんだ、と聞いたんだよ。それなのに何で惚気話
になるんだ？」

「ジェーンがいれば僕はいつでも調子が良いんだよ」

バカツプルの鑑のような言葉だったが、本人は幸せそうなので何
を突っ込まれても気にしないようだった。

その後、何だかんだと適当に雑談しながら、話題は交換留学の話
に戻った。

「……それにしても、ライスコーフってどんなところなんかね」

「砂漠ですよ。今ぐらいの時間が一番暑いつて聞きましたけど」
時計を見ながらルーンが言う。ライスコーフとアルバートの時差は一時間ぐらいだ。

「ご苦労なことだね。全く。とりあえずセシルもマールもしばらくは戻って来ないんだろう?」

「まあ短期留学なんで、3ヶ月ぐらいつて言っていましたね」

通常の留学は1年程滞在するが、この交換留学制度は外交上の理由もあり、超短期間での留学となっていた。

お互いの戦力を見せつけあう威嚇のようなものだ。

「んじゃさ、当然こっちにも向こうの留学生来るよね?」

レーシアは急に目をキラキラと輝かせて話し始めた。

「イケメンが来るといいなあー」

彼女の主な関心事の大半はそういうものだった。

「レーシア、君は程々にしとかなないと、いつか刺されるんじゃないのかい?」

「あはは。別に、大丈夫だつてー!」

「懲りねえよなあ……」

見た目通り派手な交友関係だったので、関係がこじれて修羅場になることもしばしば。それでも、当の本人はいつもこの調子だった。

「ね、ルーンも気になるよね? いい男来たら勝負しなきゃ! ラ

イスコーフはお金持ちの国だし、もしかしたら王家の血筋の人とかも来るかも?」

「……確かに」

ルーンも適当に同意しておいた。

「金髪で王家の血を引いてて、あと、筋肉質な子がいいですね。電車を投げたり、崩れた家を支えられるぐらいの」

「……ルーンの好みって特殊なんだねえ」

苦笑いを浮かべるレーシア。そしてカインが笑いながら茶化してくる。

「ははは。おいディム、今から筋トレしなよ。君も金髪じゃないか」

「無理に決まってるんだ

ろ！」

そんな会話を適当に流しつつ、ディムはうどんをすすりながら、3枚あるカマボコにもそろそろ手を付けようかどうか悩んでいた。

アルバートアカデミーは、今日も何事もなく平和なようだった。

「アカデミーのやつら……きつと今頃飯食ってるんだろっなあ、ちくしょう」

セシルはクラスメート達と、今の自分たちの置かれている状況の差を考え、うなだれていた。

「なんとなく想像できるわね」

いつもの食堂の光景を思い浮かべてみる。

レーシアが男の話ばかりしてルーンがそれに適当に相槌打って、カインはいつも通りうざくて、ディムはうどんのかまぼこ食べるタイミングを伺ってる……。

「あと3ヶ月はこっちにいるから、あの子達にもしばらく会えないわね」

「ああ、寂しいねえ」

ぶっきらぼうに答える。正直、暑さと疲れでそれどころではなかった。

このまま歩き続けてたら、干物になって死んでいくのか……。そんなことを考えていたとき、テアナが前を指さした。

「街が見えてきましたよ」

黄色い砂漠に現れた、真っ白な建物の群れ。巨大な街がそこにあった。

ライスコーフの中心都市で、アカデミーもここにあるはずだ。

街の入り口らしい広場の門に『ようこそ砂漠の国、ライスコーフへ！』と垂れ幕がかかっているのが目に入った。

「くう、目が痛い。でも……やつと着いたか」

砂漠の強烈な熱射を反射するために建物のほとんどの塗装は白く塗られているのは、ライスコーフ独自の景観と言えた。

ただ、外から見た街は、強烈に日光を反射して目が潰れるほど眩しかったのだが。

セシル達三人は反射光に手をかざし、目を限りなく細めながら街へ入っていった。

9話・白い街(前書き)

ようやくライスコーフに着きました。

9話：白い街

ライスコーフ。そこは異国情緒漂う、砂漠の都。

「へえ、賑やかな」

マールは街に入っつてすぐの広場を見渡してみた。広場中で店が出され、色んな物が売られていた。テントを張って商品を並べただけの露店だったが、その数が半端じゃない。ところ狭しと敷き詰められた露店は、ざっと見ただけで100は超えているだろう。

広場では店で買い物をする人や商人、呼び子など大勢の人が行き交い、賑わっている。街の住人は大抵、白い布のような民族衣装を纏っていて、それがまた一層ここが異国だということを認識させた。そんな中で、普段着でいるセシル達三人は浮いていると言えるほど浮いていた。

「この街で一番大きい、メイン広場です。行商人が集まってフリーマーケットみたいになってるんですね」

「ふう……これは見て回るだけでも一苦労しそうですね」

「うわ、なんか豚の頭が売られてるぞ!？」

早くもカルチャーショックを受けた彼らはきよろきよろと辺りを見回しながら先へ進んだ。

ラクダが行き交い、普通の食品やアクセサリーから、よく分からないサソリやヘビの漢方薬なんか売られている雑多な商店街。

商魂がたくましいのか、足早に歩いているセシル達にまで強引に物売ろうとしてくる程だ。

そんな区域を抜けて、丘になっている場所にそれはあった。

「こりゃあ、すごいな……」

「ライスコーフが元々金持ちな国だったのは知ってたけど、ここま

ではね……」

二人は驚きを隠すこともなく、その建物を見上げた。

白を基調とした実用性重視の強化コンクリートの壁面に、美しい宝玉がバランスよく埋め込まれた外壁。

いくつもの巨大な大理石を支えられ、屋根には黄金の、丸いキューブのような装飾が施されている。

砂漠という乾燥帯にあつて、噴水が湧き出る中央広場。

荘厳にして優雅、学園というよりは宮殿と呼ぶに相応しい場所だった。

周囲は砂に覆われているにも関わらず、その敷地内だけは緑の芝生が敷き詰められていおり、広く見渡せるように設計された開放的な庭園には喫茶店まである。なんともセレブな場所だ。

セシルはその規模に目を丸くしながら

「先生、あれがアカデミーだって？」

「はい、ライスコーフ王国立士官育成学院……通称ライスアカデミーです。私も来るのは今回が初めてです」

「へえ〜」

そうして、もう一度中を見回してみる。セシルやマールと同じ年代の、士官候補生が数人、楽しそうに談笑しているのが見える。

ここでは制服が決まっているらしく、みんな同じ格好だった。

やはり白を基調とした軽量の装束に、布を腰回りに巻いて固定している。「砂漠特有の戦闘服で、通気性や動きやすさを重視したもののらしいですよ」とテアナが言う。

見回すと誰もが育ちが良く、賢そうな顔立ちだった。

「ここは由緒ある軍人の家系の人間しか入ることの出来ないんですよねえ。だからここに居るのは、みんな国内選りすぐりのエリートさん達です」

「ふーん。じゃあ強いんだ、ここの連中。面白そう」
クスクス、と悪役にしか見えない笑みを浮かべる。

普通の学園生活を送ってくれ、と言われていたが意外と刺激になりそうだとマールは思った。

「俺エリートって苦手なんだよなあ……」

横で悪い笑みを浮かべているクラスメートをちらつと見ながら言うセシル。

「とりあえず挨拶に行きますか」

そう言っつて、宮殿のような建物の中に入っていった。

時折、通り過ぎるライスアカデミーの生徒たちが、物珍しそうに彼らを見ていた。

「あれが噂の留学生か？」

「どうやら、そうらしい。アルバートの最優秀なやつらしいな」

「くくく、早く戦ってみてえなあ」

「アルバートってどんなところなんだろ？」

「仲良くなれるかな」。特に女の子の方と

「あ、あの子……か、彼氏とかいるのかな？ はあはあはあ……」

「いや、あつちの先生もなかなか」

「あの男の子も可愛いわねえ。はあはあ……う……はあ……」

「おい、早くカメラ持ってこい！」

反応は様々だった。

ちなみに、通り過ぎた生徒は全員男だった。

「……外は暑いのになんか寒気がするなここは」

とにかく、三人は奥にある執務室へと通された。

そして手続きと挨拶を終え、それぞれの寮へと案内された。

テアナは、教官専用の寮の空き部屋へ。セシルとマールは、一般

生徒寮の中にある留学生専用の部屋だった。二人の部屋は隣同士だ。

「遠路はるばるお疲れ様でした。生徒さんお二人の授業は明日からとなっておりますので、今日はゆっくりなさって下さい」

いろいろあったが、ようやく腰を落ち着けることが出来た。セシルは荷物を放り投げ、置いてあるベッドに横になった。

(あゝ疲れたなあ……とりあえず、今日はゆっくり寝るか)

そう思っていた矢先。ドアをノックする音が聞こえた。

「セシルー！ 入るわよ」

マールが入ってきた。着替えてきたのか、いつもの赤い上着ではなく、白いTシャツだった。なんとなく、周りの環境に合わせたのだろうか。

「あー？ マール、悪いけど俺はこれから……」

「テアナ先生からの伝言で、これから地理を把握するのも兼ねて、街の探索に出かけるように、だって」

「え〜!？」

これから寝ようと思っていたところなのに、と悲鳴を上げる。

「勘弁してくれよ、疲れてるんだって」

「敵は待つてくれないのよ。ここにだってたった3ヶ月しかいられないんだから、今から出来ることをやって情報集めといたほうがいいでしょ？」

「そらそうだけど……」

「じゃあ、行くわよ」

初めからセシルに拒否権などないようだった。

セシルは泣く泣くベッドから起きあがり、マールと共に集合場所へと向かうことにした。

街の入り口に集合した三人は、すぐに動きを開始した。

三人はひとまずばらけて行動する。何かあったら、通信機で連絡

すること。後は自由に街を見て回り、地理を頭に叩き込みつつ可能な限り情報を集める。

これだけ決めて、マールもテアナも街の雑踏の中に消えていった。あの二人のことだから、それなりに働きを見せるのだろうが……。そしてその場に残されたセシルは……

「二人とも行っちゃったし、俺はどうしようかなー……」
街をぶらぶら歩きながら、呟く。

というのも、セシルはこの街では知り合いもいなければ、道も分からない。情報収集とかそんなことよりも、迷わないようにするのが大変だった。

とりあえず通行人の様子を観察してみると、やはり皆一様に白い布を織り込んだような民族衣装を着込んでいた。

軽くて涼しい上に、洗濯するさいに必要な水も、普通の服よりも節約できるということで水が貴重な砂漠の生活では便利な日常の品らしい。

と……テアナの言っていたことを思い出す。

「俺も着てみようかなあ」

あまりに暑いので、脱いだ上着は宿屋に置いてきた。

Tシャツだけのラフな格好だったが、やはり暑いので汗は噴き出してくる。

どうせなら現地人に紛れ込んだ方が情報収集しやすいのではないかと考えたが、金がないので止めておくことにした。

しばらく歩き続けていると、屋台や露店が建ち並ぶ広場に続いていた。

祭りのような活気に包まれた広場。多くの人都在这里集まり、買い物をしたり食事をしたりする。

元々は観光客相手の土産屋が集まって出来たところだが、今では

現地の人も多く活用している。

「これだけ人が集まったら情報も手にはいるかな」

人が集まるところに情報も集まる。情報収集をするなら、ここはもってこいの場所だ。

そう思い、さっそく行動を開始しようとする。
すると

「てめえどうしてくれんだ、こら!？」

「兄貴の服がいくらするか知ってるのか？ シミになってるじゃねえか！」

……突然、広場の一角から怒声が聞こえてきた。その異変に、周囲の目はその一角に集中する。腹の底から響き渡るような大声に、辺りが一瞬で静まりかえる。

何事かと思い、セシルも人の群れの中から様子をうかがってみる。どうやら、大男が二人いて露店の店主に向かって怒鳴り散らしているようだ。露店では絵が売られており、布を敷いたスペースの中に並べてある。そしてよく見ると一人の男のズボンには、少し絵の具が付いていた。

「あゝアレか。まさか他国に来て現実に見るとは思わなかったけど……」

呑気にその様子を遠巻きに見ているセシルの前では、漫画のようなシチュエーションが繰り広げられていた。

絵描きが、柄の悪い男二人に脅されている。

置いていた絵の具が服に付いたと言っているが、実際には男が自分からぶつかって来たというのは誰の目にも明らかだった。だが、誰かが仲裁に入ることもなくみんな遠巻きに見ているだけだ。

まあ世間とはそういうものだろう……と、完全に他人事でセシルは思った。

柄の悪い男達はさらに声を挙げる。

「弁償しろやこら！ それとも金がないなら体で払うか？ そつちでも俺は構わねえがな」

そんなことを言つてゲラゲラ笑う男二人。

品性の欠片もない言動。どこの街にでもいるならず者のようだった。

膨れあがった筋肉に黒いタンクトップ、スキンヘッド、顔にへびのような刺青が入れてあるという、悪役であることを全力でアピールする風貌だ。

似たような二人だが、兄貴と呼ばれた男は白、もう一人は赤のズボンを履いている。

セシルは心の中で、白パン、赤パンと単純に名付けた。

「……………」

一方、店主の方は服の上から華奢な体格が見て取れる。どうやら女のようにだった。

男達の気迫に圧倒されているのか、頭にフードを被ったまま俯いているので、顔は見えない。

「びびつて声も出せねえか？ まあいい、ちよつと来いよ」

そう言つて、白パンが手を伸ばして女の体に触れる……瞬間、白パンの体は見えない力に操られるようにして宙へ舞い上がり、そのまま背中から地面に叩き付けられた。

その一瞬の出来事に、誰もが息を呑んだ。

「は？」

「痛てえ……………」

白パンは痛みに悶絶し、赤パンは啞然としている。

「へえ、やるなあ」

周りで見ていた観衆が呆然としている中、セシルは感心していた。

（あれは柔術、それも長い間訓練を積んだ動きだ。ただの臆病なお

嬢さんじゃなさそうだな)

しばらく驚いていた赤パンだったが、しばらくしてようやく正気に戻り、当然のように食ってかかる。

「あ、兄貴！？ くそ……てめえ何しやがった？」

「触るな汚らわしい」

のびている白パンと、予想外の出来事に慌てふためいて喚き散らす赤パンを真っ直ぐに見据え、女は顔の布を外して淡々とした口調で言った。

アルバートでは余り見かけない、水色の髪。青い目。

砂漠特有の褐色の肌を陽光の下に晒して、男達を睨み付けながら

「お前らが自分から私の商売道具にぶつかってきたのだろう。それなら自業自得だ。私を脅して金と身体を奪おうというのなら、無駄なことだ。身の程を知れ下郎」

そう言った女は、既にさっきまでとは明らかに違う空気を纏わせていた。

どこか気高い風格のような……ただの絵描きの女が何故そんなものを纏っているのかは分からないが。

赤パンは、それに気圧されていたが、やがて顔を真っ赤にして目を見開く。

「うるせえ！ なめてんじゃねえぞ！」

怒鳴りながら懐に隠していた拳銃を取り出した。

途端に、行方を見守っていた観衆はそれを目にした途端、悲鳴を上げて逃げ出す。

わーだの、きゃーだの、人々の怒号と悲鳴で広場は大混乱に陥った。

セシルだけは混乱した人並みを避けながらぼーっと様子を見てい

たが。

「ぶち殺されたくなかったら大人しく……」

ダアンダアンダアン！！

赤パンの言葉はそこまでだった。突然の銃声に遮られてしまったから。そして、持っていた銃がいつの間にか木っ端微塵に破壊されていることに気付いた。

驚いて振り向くと、ほとんどの観衆が逃げてしまった所で、銃を抜いたセシルが少し離れたところに立っていた。

目は半開きで、腕の力はまるで入っておらずにブラブラしていたが、銃弾は一発も外れることなく、赤パンの持つ銃身を砕いていた。

だが、セシルは顔を歪めて、手にした銃を見る。

「なんだこりゃ……反動がまるでない。撃ってる感じがまるでないな。羽みたいに軽い上に反動はないし、おまけに軽く絞っただけで連発されてるし。一体どうなってんだろなーこの銃」

そう言っつて、白銀色の銃身に珍しい金色の螺旋模様が入った、まるで芸術品のような銃に目を落とす。

テアナが「ある人からのプレゼントです」と言っつて木箱に入れて持ってきた、ヴィアゲイターというらしいその銃は、マールの持つ重厚で大型なエア・アンカーとは対照的な軽量で細身の銃だ。

とはいえ、実際に使ったのは今が初めてだったのだが。

「誰からの差し入れか分からないけど、気味悪い銃だよなあ……。よし、金貯まったら新しいやつ買って売っ払おう。うん、それがいいな」

そついうセシルは、まだマールへの借金も返していないのだが……借金を返すということは収入の問題ではなく、性質の問題でもあ

った。そして今度はどんな安物の銃を買おうかと考えを巡らせていると

「な、なんだてめえは!!」

「……………」

銃を壊されて、混乱している赤パンがうるたえながら叫ぶ。

水色の女は、安堵……………ではなく、警戒した目でセシルを見ていた。

まあそれは当然だろう、とセシルは思った。彼女にしてみたら、どちらも不審者には変わりないのだ。

セシルは両者の視線を受け流しながら、赤パンの方を見て

「俺？ あ……………ただの通行人だよ。ただのカツアゲかと思ったら、銃出してきたからさ。さすがに駄目だろと思って注意しようとしたら、これだ」

やれやれ、といった様子で得体の知れない自分の銃と粉々になった赤パンの銃を見ながら言う。

本当は一発だけで銃創を壊そうと思っていたのだが、慣れないせいか完全に大破させてしまった。

だが、赤パンにしてみればたまったものではない。

弱い女を狙ったはずが逆に倒され、最終手段として銃を出したがそれも破壊された。

彼は完全にヤケになっっていた。

「ふざけんな!! こうなったら女共々ぶっ飛ばして……………」

あと頼れるのは、己の肉体のみ。セシルに向かって殴りかかろうと走りだしたは良いが、それも長くは続かなかった。銃が離れた時点で、水色の女はすでに至近距離まで接近していた。そして、足を引っかける。

「愚図め」

そうして体勢を崩し、倒れそうなところで襟首を掴み、思いつき

り投げ飛ばした。

ドシヤア！

数秒後に、嫌な音と共に赤パンは気絶した。今度は頭から落ちたようだ。

「……っておいおい。殺すなよ」

「心配ない。弱者をいなす術くらい心得ている」

いなしてない、思いつきり手荒だ。……とセシルは思ったが自分も投げられそうなので止めておくことにした。

水色の女は振り返ってセシルをにらみ据えて

「それよりお前は誰だ。いきなり現れて」

ごく当たり前の質問だった。それにセシルは言い訳を考えながら「あー、えっと……だから通行人だって。エキストラとかそんな感じ」

言い訳になつてない言い訳に、さらに水色の女の追求が続く。

「嘘を付け。あの銃さばき、何かの訓練を受けているのか。……それとも軍がなりふり構わず私を暗殺にでも来たか？」

そう言つて、睨み付けてくる。本気の間だった。

アルバートではほとんど見かけない、鋭く研ぎ澄まされた青い目がこちらを射抜いてくる。

「何の話だよ!？」

物騒な単語に、慌てて聞き返す。

水色の女はそれでもしばらくの間、セシルを睨んでいたが、やがて何か納得した様子で

「まあよい。私がまだ生きているということは、お前は暗殺者ではないのだろうな。あれだけの銃技があれば、お前はわざわざ姿を現すこともなく、瞬きする間に私を殺せたはずだ。とりあえず、助けてもらったことには感謝しておこう」

「買い被りだつて。あんただって派手にやったもんだ」

セシルは肩をすくめる。そして辺りを見渡ししてみる。

幸いさっきの騒ぎでほとんどの観衆が逃げてしまったために、広場はいつになく静まりかえっていた。

水色の女は、ふっと笑うと

「何、あれくらい造作ない」

「いや、そう言う問題じゃなくてね……まあいいや。広場の人達は逃げちまったし、どうしたもんかね……」

もともとは情報収集のために広場に入ったのだが、肝心の聞く人間がいなければ話にならない。普段は活気に満ちあふれている広場が、今は静寂に包まれている。

時折ヒューと吹く風に砂が舞い上がり、騒ぎで崩された屋台がどことなく哀愁を漂わせている。

こんな状況で話を聞ける人間など……いや、一人だけ目の前にいた。

セシルはげんなりしつつ、一人目の聞き込みを行うことにした。

「……えつとさ、あんたがここで商売してるんなら聞きたいことがあるんだよ」

「何だ？ 私に分かることなら答えてやろう」

そう言われ、セシルはしばらく考えていたがやがて

「それじゃあ……最近この広場で動きが活発になつてきた店とか組織とか知らないか？ あるいは、ここ一週間以内で入ってきた新入りで……武器や資源なんかを扱つてるところとか。それか、この辺であんまり人が立ち寄らないような、廃屋とか洞窟とかない？」

とりあえず、スパイ活動をするのならある程度力を蓄える必要があるだろう。それに人に見つからないような拠点も。

どこから支援を受けているのなら話は別だが。

その質問に、水色の女は少し考えて

「私がここで絵を描くようになったのは最近のことだ。この広場の勢力はよく知らない。」

「……だが、人が立ち寄らない洞窟ならあるぞ」

「マジで？ どこ？」

「教えても良いが、入れない。あそこは王家の所有地だ」

「王家ねえ」

アルバートでは聞かない言葉。

同盟国とは言え、ライスコーフとアルバートは政治の仕組みが全く違うのだ。ライスコーフで王家といえば、最高権力者。

スパイがまさか王家の所有地に潜伏してるとは思えないが……。他に情報らしい情報はないので、聞いておくことにする。

「まあ入れなくてもいいや、見物だけして帰るから場所教えてくれよ」

とりあえず、場所を教えて貰う。今日は基本的な下調べだ。

礼を言い、その場を去ろうとしたセシルだったが、それを水色の女が呼び止めた。

「待て」

肩を落としながら帰ろうとするセシルに、水色の女が後ろから声を掛ける。セシルが気怠げに振り向くと

「お互い名も知らないわけだが。私はステレイア・ハイラルドと名乗っておこう」

何て言ってくる。突然自己紹介されて、若干戸惑うセシル。

「ああ……俺は、セシル・クラフト。でも何で？」

「恩人には礼を尽くす。それが家訓だ。何か困ったことがあったら、私のところに来い。私はいつでもここにいるから」

言い終わると、水色の女……ステレイアは布を被り、人気のない

広場を去ってどこかへ行ってしまった。

「なんなんだあ、あの女」

後に残されたセシルは、首をかしげるばかりだった。

10話：歓迎？洗礼？（前書き）

一日明けて、今日から留学生活が始まります

10話：歓迎？洗礼？

朝、二人は授業に向かっていた。

本当にこの先に教室があるのか不安になりながら、見慣れない廊下を、一歩一歩確かめるように歩いていく。

「昨日どうだった？」

「別に。特にめばしい情報は見つからなかったなあ……ちょっとトラブルはあつたけど」

「トラブル？」

「どこの国にもチンピラっているもんだな……」

セシルは昨日の喧嘩、そして絡まれていた水色の女、ステレイアのことを思い出していた。

（遺跡も見に行ったけど、やっぱり入れなかったしなあ……ま、それより今は学校のこと考えないと……めんどい）

留学一日目。

いや、正確には昨日来ていたのだが、今日は記念すべき最初の登校日となった。

セシルとマールは、物珍しそうにきよろきよろしながらライスアカデミーの廊下を歩いていた。

高価な壺だったり有名な画家が描いた絵画だったりといった調度品の数々が、各教室に繋がる廊下の端に並べられている。それを見ながらセシルは、へえ、だとか、ほお、といった呟きを発していた。

「すげえよなー。さすが金持ちな国は、隅から隅まで金掛けてるんだな」

「あんだ、美術品に関心があるの？」

「そういうわけじゃないけど」

セシルはもう一度調度品を見回して

「いい絵は心を豊かにするんだってな」

「ふうん」

そういうものか、と思いつつまールも適当に絵を眺めてみた。何か気に入るものはあるだろうか……。

「あれなんか、良いわね」

ぱっと目に止まったものを指さす。

絵には、巨大な化け物と戦う軍勢が描かれていた。

やけにリアルな絵で、白い犬のような化け物の周りには無数の死体が積み重なっている。

だがそれでも、軍勢は止まることはなく、化け物に向かっていくという図だ。

絵からは、本当に自分がその戦場にいるような臨場感が伝わってきた。

恐ろしく睨み付けてくる化け物の悪意、恐怖、圧力。斧や剣を持った筋肉隆々の兵士たちの息づかいや、荒々しい雄叫びも。

「……………」

リアルすぎて気持ち悪い絵にしか見えないセシルは顔をしかめ、呆れていた。

「平和だの愛だのを謳った女神様が民衆を救うような絵は、実家で見飽きてるからね。逆にこういうののほうがいいわ」

無惨な死体と凶悪な化け物しか描かれていないこの絵には、神の救いなど微塵も見受けられなかった。

ただ、一見グロイだけのこの絵は、何者にも頼らず巨大な敵に立ち向かう力と勇気をテーマにしてるんじゃないだろうかと、マールは思った。

「変なやつだな……」

「それはお互い様よ。私のことはよく知ってるでしょ」

マールは笑いながら言う。

「ああ、まったく。よく知ってるよ」

そう気怠げに答えるセシルを、マールは満足そうに見つめながら、指示された教室へと向かっていった。

教室に入ると、すでに中には大勢の生徒と教官がいた。

それに気付いた何人かの生徒が、ざわざわと話し始めた。それがやがて教室全体に広がる。

「……」

「……あのー」

視線が集まり、若干気まぎらくなって、教官に話しかけてみる。痩せ形で背の高い、ひよろつとした男だった。そしてボサボサ頭で、なぜか白衣のようなものを来ている。

何かの研究者なのだろうか。

「おお、もう来たのか。じゃあちょっとこっちに来てくれ」

教官は二人を見ると、こっちに来るように促した。

「よし、授業の前に紹介しておくぞ」

ざわついていた教室は静かになる。そして、二人を教卓の前に立たせて

「アルバートアカデミーからの留学生、マール・アイボリー君とセシル・クラフト君だ」

簡単にそれだけ言って、ぼさぼさの頭をかきながら教室を見回し、空いてる席を見つけると

「んじゃ、アイボリーはそこ、アーミツシユの横。クラフトは向こう側、ヴィトンの横に座れ。」

「じゃあ後は訓練が始まるまで自習、以上」

それだけ言っただけで教官は出て行ってしまった。

とりあえず、言われたとおりに二人は席に着いた。

(随分いい加減だな……)

もうちょっと配慮とかないんだろうか、と思っっていると隣の席の男が話しかけてきた。

「気にすることはない、あの人はいつもそうなんだ。あれで他の教官と同じ給料貰ってるっていうんだから、理不尽だよ。ああ見えて魔法工学系の博士らしいけど。」

それに、名字で呼ぶのもあの人の癖なんだ。ほら、僕もヴィトンって名字で呼ばれてた。ちなみにフルネームは、ギル・ヴィトンっていうんだけど。まあしばらくの間だけだよ。よろしく」

よく喋る男だ。第一印象はそれだった。ギルというらしい。

なんだか芝居が掛かった口調が微妙に鬱陶しいが、それとは別にセシルは苦い顔をして

「研究職ねえ。まあ変な教官だとは思ってたけど……まあ、変な教官ならこっちにもいるか」

悪魔のような笑みを浮かべるテアナの姿を思い出す。

ギルは笑って

「まあどこのアカデミーでも教官は基本的に変人なのさ。こんな業界だし。……そういや、前にも留学生が来てたことがあってね。その時の引率の教官もまたぶっ飛んだ人が多かったな。エルフィやグラム……中でもグラム皇国の教官はトップクラスの変人だったね。それに……」

喋り続けるギルの話は、その後20分ほど続いた。

初対面でよくここまで話せるよなーと思いつつ、セシルは相槌を

打ち続けた。

「変な人だなんて思ったでしょ？ ティール先生は、いつもああなの。魔法工学担当の教官よ。研究職だから、軍人じゃないけど。私はメティ・アーミッシュ、どうぞよろしく」

丁寧な人、第一印象はそれだった。なんとなく育ちが良さそうな印象がある辺り、やっぱり貴族だな、とマールは思った。

「そう、ティール先生っていうのね。こちらこそよろしく、メティ」
「ええ。それにしても、アイボリー家の人と、こんなところで会うなんてね。ちよっと驚いたわ。噂には聞いていたけれど、こっちでもかなり有名よ。その活躍でアルバートを救った英雄の一族だって」
「そんな大げさな……」

マールは苦笑する。えらい持ち上げられようだった。

「知ってると思うけど、このアカデミーの生徒達は、みんな貴族か軍門の家系なの。私も貴族だから境遇としては、マールと似たようなものね」

「まあ……貴族って感じじゃないけどね、うちの実家は」

頬杖を付きながら昔を思い出してみたが、訓練に明け暮れた思い出しかなかった。

「まあ、向こうじゃいろいろと苦労してるだろうけど、こっちじゃ思いつきり羽を伸ばしていったね」

国は違えど、特別な立場にいる者同士、気苦労は知れているのだろう。気遣ってくれているんだな、と分かった。

「そういえば今夜、あなた達の歓迎パーティーをやる予定なんだけど、どう？ せっかくだし、遊ばなきゃね！」

歓迎会……とは予想していなかったが、素直に嬉しかった。マールも笑って答える。

「ええ、すごく楽しみだわ」
残念ながら遊びに来た訳じゃない、とは言えなかった。

そしてその日の夜。

「それでは、アルバートからの留学生の二人の歓迎会を始めたいと思います。乾杯！」

司会の女子生徒の音頭で、セシルとマールの歓迎パーティーが始まった。

といつても、どんちゃん騒ぎといったものではなく、賑やかだが気品のある社交パーティーのような雰囲気だった。

学園内のホールを貸し切って行われたというパーティーだが、やたら高い天井に豪華なシャンデリアがぶら下げられ、オーケストラの音楽がBGMに流れている。

どうやら学園中の生徒達や教官が一カ所に集まっているようだ。

「さすが貴族だよなあ」

壁にもたれかかり、ぼーっと会場を眺めながらセシルは呟く。立食パーティーなので、みんな思い思いに歩き回りながら和やかに談笑していた。

テーブルにはセシルが見たこともないような高そうな料理が並んでいる。

だが、それにがつついていく者などももちろんおらず、丁寧に小皿に取り分けられた料理が、それぞれのテーブルに置かれている。

アルバートでは学食しか食べていなかったセシルには、こっそり弁当箱に入れて持って帰りたいぐらいだったが、さすがにそれは止めておいた。

だが、ぼーっとしていたのも束の間。さっき司会をしていた女子生徒に、すぐに前に引っ張り出された。

「はいはい、主役がこんなとこにいないで」

「え、あ、ちよっと……」

腕を取られて、ホールの真ん中まで連れて行かれる。そこにはマールがいた。

だが、いつものマールじゃない。普段見慣れない、ドレスで着飾った姿だ。

彼女に合わせ、赤系で胸元の開いた大胆なパーティードレス。周りの男子生徒たちはみな、一様に息をのんだ。

「……なによ」

マールはセシルに気付くと、少し恥ずかしそうに目を伏せた。

いつもの快活な少女の面影はなく、それこそ貴族、令嬢のような美しさだった。

(普段とのギャップがすごいな)

不覚にもドキツとしたが、セシルはそんなことを表には出さないようにして

「あれ、お前そんな服持ってたのか」

「借りたのよ、メティにね」

と、隣りにいるメティを見やる。

彼女は露出の少なめの大人しめな白いドレスだった。セシルに気付くと、彼女は微笑みで答えた。

「セシル・クラフト君ね。私はメティ。よろしくね」

「ん、よろしくな」

そんな挨拶の間にも、そろそろと人が集まってくる。

みんなそれぞれパーティー用に着飾っていて、普通に私服で来ていたセシルははつきり言っただが、本人がそれを気にする様子はなかった。

「やあセシル」

ギルもその中にいた。よう、と手を挙げて答えた。だがそれも束の間。すぐにパーティーの華となっていたマールに声を掛けに行く。

「それにマール・アイボリー。最初見た時より今日はまた一段と美しいね。僕はギル・ヴィトン、以後お見知りおきを」

最初の時と同じ……いや、それ以上に芝居がかかった口調と仕草で挨拶をするギル。

「ええ、こちらこそよろしく。あなたも私のこと知ってたのね」

「当然だよ」

そう言い、ニコリと微笑む。

どうやら、相手が男か女かで対応の仕方がかなり違うらしい。

男達は、みんなマールのところへ行ってた。

マールは苦笑を浮かべながらそれらに対応していた。

「……天使ねえ」

そんな様子をつまらなさそうに眺めるセシルと、他の女子生徒達。

「いいの？ あなたのハニーが取られちゃうわよ」

メティはそう言つて、セシルに近寄ってきた。

「誰が誰のハニーだ」

「あら？ あなた達そういうんじゃないんだ？」

「いや、全然。俺らは、そういうのとは違うからな」

「ふうん」

ワインを飲み、意味深な笑みを浮かべる。少し酔っぱらっているのか、頬が赤みを帯びていた。

「もったいないわねえ……」

目が少しとろんとしている。貴族のわりには砕けた感じだな、とセシルは思った。

「そうそう、今度はこっちのメンバーの紹介をするわね」

メティの周りには何人かのクラスメイトらしき男女が並んでいた。

「左から、ジノーヴィイ、リリア、ダリオ……うちのクラスでトップクラスの3人よ」

「よろしくな！」

「……はじめまして」

「よろしくね、セシル君」

3人がそれぞれ挨拶をする。

ジノーヴィイは、色黒で癖毛の男子生徒。

リリアは、背の低い、濃紺の髪をポニーテルにした女子生徒。

ダリオは、金髪で背の高い、いかにも貴族といった風体の男子生徒。

「ん、よろしく……」

初対面で、それぞれの視線が交錯する。

その瞬間セシルは全身が逆毛立つ感触を覚えた。

ゾワゾワした冷たいものが背中を伝わり、体はそれに素早く反応する。

(……！)

思わず銃に手を伸ばして身構えた。

メティが驚いた顔をしているが、それに気をやる余裕は無かった。

「……」

セシルは3人を睨み付ける。特に、真ん中の背の低い女子生徒だ。

一見、ただの女の子に見えるがその目には殺気が込められ、冷え切っていた。そして、品定めするように……いや、実際品定めしながらセシルを見つめている。

「急所……特に腎臓のガードが甘いよ」

と、いつから持っていたのか右手にステーキ用のナイフを忍ばせながら言う。

「こら、失礼だろリリア！ 留学生に対してそんな」

ダリオと呼ばれた男がリリアをたしなめる。そんな様子に、また

かよと呟きながら頭を抱えるジノーヴィ。

「この人、大して強くないよ。アイボリーはともかく……留学生は優秀な人が来るんじゃないやなかったの？」

何故か若干怒り気味に言う。

無表情でクールなように見えて、けっこ熱い女子生徒のようだ。

そこで、事態を理解したメティが詫びを入れてきた。

「ちよつとリリア！ こんな所で何言い出すのよ……。ごめんね、この子ちよつと喧嘩っ早いから」

「いや……」

そう言いつつも、セシルは内心焦っていた。

(まいったな……さつそく実力が見透かされるなんて……)

本来なら、留学するのに必要な実力はセシルにはない。

それでも連れてこられたのは、テアナの気まぐれだ。留学とは名ばかりの、スパイ調査のための数合わせ。

(多分、俺の“指輪”が切り札になると踏んだんだろうけど……それと銃以外は大したことないからなあ俺)

だから他のもつと優秀なやつにしろと、セシルは何度もテアナに言ったがそれが聞き入れられることはなかった。

結局、セシルはこの留学の間、優秀な振りをしなければいけないという試練も背負っていた。

「まあマイルと比べりゃ俺もまだまだだからな」

余裕を見せるように、笑って流す。

アルバートアカデミーのNo.2という設定で、この留学を乗り切らなければならない。

だが、リリアはまだ納得していないようだった。

「……決闘」

「は？」

「場所は、第3演習場。明日の昼休みに」

「リリア！ そんないきなり……」

メティは止めるが、リリアは一瞥もくねずに続ける。

「来なければ、あなたの負け。それはアルバートの負けも意味する。アルバートのレベルが落ちたなんて思われたくなければ必ず来て」

それだけ言い、リリアはパーティー会場から出て行ってしまった。あまりにも突然のことで頭が回らないが、喧嘩を売られた挙げ句に決闘することになったらしい。

呆気にとられていると、色黒の青年、ジノーヴィイが苦い顔をしながらセシルの肩を叩いた。

「あーあ……すまねえな、セシル。おいダリオ、とりあえず追いかけるか」

「悪いね、セシル君。あの子はああいう子なんだ。……ただ、僕も君の実力には興味がある。アルバートがどれほどの戦力を持っているのか……。だから出来ればこの決闘、親善試合だと思って受けてやって欲しい。何、彼女も本気は出さないだろうさ」

そう言っただけでジノーヴィイとダリオは、リリアを追いかけて行った。

騒ぎを起こした後のその後ろ姿は、会場のほぼ全員に見送られることになった。

(やつぱは仲良いんだなあ三人って)

セシルもそれを見ながらどうでもいいことを考える。

「……なんか大変なことになっちゃったわね」

メティが心配そうにセシルを見る。

ほんとはめんどくせえから勘弁してくれよ、と言いたい気持ちでいっぱいだったがそうもいかない。

リリアの起こした騒ぎは会場中に広がったようで、今やセシルは

注目的となっていた。

広々としたホールの中は、異様な興奮に包まれていた。

留学早々、決闘を始めるアルバートの留学生とライスコーフ。

ライスコーフの学生達にとってみたら、最高のショーなのだろう。

もう後には引けない。

「なに、いいさ。俺もちょっと楽しみだよ。いきなりライスコーフのトップクラスと戦えるなんてね」

会場に広がる歓声を聞きながら、心にも無いことをのたまう。

顔で笑って心で泣くセシルだった。

11話：暇人達は高見の見物（前書き）

パーティーで喧嘩を売られたセシルは、珍しく思い悩みます

11話：暇人達は高見の見物

パーティーが終わり、セシル達は留学生専用の寮へと戻っていった。

そして夜も更け、今は深夜。

セシルは憂鬱な顔でベランダから外を見ていた。

(あゝあゝ、まじめんどくせえ。なんで俺が……)

セシルはアルバートアカデミーのNo.2、という表向きの肩書きを持っている。これも任務のためだ。

あの森での演習中に侵入してきたスパイ……ルイス・シユレディンガーの足取りを追うため、この国に手がかりを求めてきたのだ。

もし、ルイスがこの国の人間ならば、戦争にもなりかねない。

表だって調査するわけにもいかず、交換留学生という制度を利用してライスコーフへ潜入し、証拠を集めているのだ。

きっと今でも裏でテアナが調査していることだろう。

だが、基本的にセシルは任務のための表向きの顔だ。普通に学生生活をやっていたらよかったですけど……。

先程のパーティーで、ライスコーフのトップ3とかいう連中が現れて、そのうちの一人にセシルは決闘を申し込まれた。

普段なら、そんなめんどくさいものは断るのだが、表向きはNo.2という立場上、そういうわけにもいかないという状況になってしまった。

そんな憂鬱さもあってか、セシルはなかなか寝付けずにいた。

そんなわけで、空を覆い尽くす満天の星空を、ぼーっと寮のベランダから眺めていた。

昼間と違ってヒンヤリした夜の砂漠の空気が気持ちよかった。

「このまま朝にならなきゃいいのになあ……」

そんな愚痴をこぼしていた時、ドアを叩く音がした。

コンコン

「セシル、起きてる？」

よく知る声が聞こえた。

「マールか」

「眠れないの？」

ドアが開き、寝間着姿のマールが入ってきた。

「ちよつと考え事……」

「あんたがそんなにへこむなんて珍しいわね」

マールはセシルの横のベランダの手すりにもたれかかった。

「だってなあ」

留学生とはそもそも、その国の力を象徴するものだ。

それがもし、決闘で敗れたとなると……その国の戦力が疑われることになる。

スパイにまで入られているアルバートが、これ以上隙を見せるわけにはいかなかった。

「負けることは許されない……だろ。」

「そうそう。分かってるじゃない」

マールは笑って答えた。

そしてそれつきり、しばらく沈黙が続く。

二人は星空を見ていた。

国も人も、アルバートとは違うが、目前に広がる星空だけは同じだった。

「……でも」

マールが口を開く。

「本当に危なくなったら、逃げなさいよ」

「……大丈夫だって。向こうも本気じゃやらないっていつてたし」
珍しく不安そうなマールに、そう言って軽く笑うセシル。

だが、あのリリアとかいう女子生徒はかなりのやり手らしい。

(やっぱり、こいつを使うしかないのか)

左手にはめてある、指輪。父の形見でもあるそれは、万象の指輪と呼ばれる固定魔法だという。

(これ使ったら、さすがに負けなйдらうけど……)

しかし、これは反則みたいなものだ。切り札をこんな親善試合で見せるのは得策ではないだろう。

「今回ばかりは、私がフォローできることじゃないわね。でも…

…」

そう言って、ポンツと肩を叩く。

「まあ、あんたもやる時はやるんだから頑張りなさいよ」

「……」

「4年前、初めて会った時のこと覚えてる？」

「ああ」

セシルは言われて、ぼーっと昔のことを思い出していた。もう何年も帰っていない故郷での話だ。

マールとはそこでたまたま会った。本当にたまたまだったのだが、それが今まで続いていることは奇跡というか運命というか、腐れ縁に違いないだろう。

「あの時のあんたは、格好良かったわよ」

「え？」

「今はどうなのかしらね」

「……」

「私が見ていてあげるから……明日も早いし、おやすみ」

マールは最後にそれだけ言って、部屋に戻っていった。

「やる時はやる、か」

一人になったセシルは、ふと呟いた。マールなりに、はっぱを掛けに来てくれたのだろう。

「……ま、どうにかなるか。悩んでもしょうがないし」

たった一言で随分気が楽になった気がする。

さっきまでの憂鬱さはいつの間にかなくなっていた。

そしてその途端、急に眠気が襲ってきた。セシルはのろのろとべ

ツドに入り、5分もしないうちに眠り始めた。

次の日。寮から出て授業に行く。昨日のパーティーであれだけの騒ぎを起こしたのだから、セシルはもうかなり有名になっていた。

すれ違い様に色々な人にじろじろと見られているのを感じながら教室にたどり着いた。

「おはようセシル、昨日はすごかったね……いきなり決闘することになっちゃって、大丈夫かい？」

朝一番にギルが話しかけてきた。

しかもどうやら情報はもうクラス中、いや学園中に広がっているようで、時々セシルの方を見ながらひそひそ話をしているのが聞こえていた。

「ただの親善試合だって。まあ俺も一応留学生だから挑戦されたら逃げられないんだよな」

「なるほど。まあメンツつてもものもあるしね……それにしても災難だったね、リリアに目付けられちゃうなんて」

しばらく話しているうちに、教官が来て朝の授業が始まった。

ギルも、他の面々もそれぞれの席に着いていった。

セシルも自分の席に着くと、あることに気付いた。

(ん？ あれって確か……)

よく見ると、右前の席には渦中のリリアが座っていた。最初気付かなかったが、彼女とは席が近かったようだ。

彼女はちらつと一瞬、セシルの方を見ると、すぐにぶいっと前を向いてしまった。

まあ昼には嫌でも顔を合わせることになるが。

だがやはり少し気になって、セシルはそつと、隣のギルに聞いてみた。

「なあ、リリア……ってこのクラスで一番強いのか？」

「んー、まあトップクラスだね。一番はダリオだと思っけど……こ

のクラスだと、ダリオ、リリア、ジノーヴィが三強だね」

ギルがシャーペンをくるくる回しながら答える。

「まあアルバートへの留学には他のクラスの連中が行ったんだけどね。あの三人、全員めんどくさいからって断ったらしいんだよ」

「案外ゆるいんだな……」

どうせならリリアがアルバートに行ってくれたら良かったのに、とセシルは心底思った。

そうすればわざわざ喧嘩売ってくるやつもいなかっただろうに。

「うちのアカデミーには貴族が多いからね。中には教官より家柄が上のやつらもいるしさ。生徒の権限が強いんだ」

貴族がわざわざアカデミーに入る事情も分からなかったが、そういうもんか、とセシルは思った。

「そっぴや、ギルも貴族なのか？」

「まあね。一応この国じゃ僕の家は有名な方だよ。ま、だからってあんまり恐縮しなくてもいいけどね」

別にセシルも今更どうしようというつもりもなかったが、分かったよ、とだけ言っておいた。

そうして、いつも通り授業は進んでいく。

とは言ってもセシルの頭の中にはその内容は何一つ入らなかった。ぼーっとしているうちに、あっという間に時間が過ぎていった。

そして昼休み……いつもは教室でだらだらしている生徒達も今回ばかりは様子が違っていた。

アルバートから来た留学生、セシルとライスアカデミーの中でもトップクラスに優秀だというリリアの親善試合が行われようとしているからだ。

クラスのほとんどが、その試合を見守るために試合場に集まっていた。

セシルはリリアに指定された通り、第三演習場に来ていた。コロシラムのように、周りを高い壁が覆い、下を見下ろせるように壁の上に観客席があった。

決闘……というか試合にはおあつらえ向きの場所と言える。

「まさかと思っただけど、こんなに集まるなんてなあ……」

会場は色んな歓声が飛び交っていて、とんでもなく騒がしかった。セシルは苦い顔をして周りを見回した。

「まったく、みんな暇だよなあ……リリア、だっけ」

リリアはセシルより早く来ていたらしく、ずっと前から座って待っていたようだった。

セシルの姿を見ると立ち上がり、パンパンと砂をはいた。

「遅い」

「ん、時間ぴつたりだけど」

時計を見る。約束の時間の一分前だった。

「こつという時は、男が先に来るのが普通じゃないの？」

「デートじゃないんだから……」

などと話しながら、リリアはずっと座っていて疲れたのか背中を伸ばしたり腕を伸ばしたりしていた。

「とりあえず、ルールだけ説明するから」

「ルール？」

「殺さない程度で、相手を戦闘不能にするか負けを認めさせれば勝ち。それと……この第3演習場の敷地内から出たらその時点で負け」
単純明快なルールだった。

「質問なんだけど」

言いながら軽く手を挙げた。

「何？」

「武器は使っていないのか？」

セシルは腰に下げた銃を見せた。

「武器も魔法もなんでもあり。でも、殺しちゃ駄目。そこはお互いのさじ加減で。万一に備えて救護班が待機しているけど」

「結構適当なんだな……」

ぼりぼりと頭をかきながら呟いた。

「審判もあそこにいるから、いざとなれば止めに入る」

そう言っつて、リリアが指さした方向から、人が歩いてきた。

「あれっつて……テアナ先生？」

今までどこにいたのか、テアナがニコニコしながら向かってくる。

「一応アウエーだから、審判はアルバートの人間を付けた。だから、危なくなったら止めてくれるよ。大丈夫」

本当に止めてくれるんだろうか、とテアナの性格を思い返してセシルはかえって不安になっていた。

「先生、審判だったのかよ。ていうか今までどこにいたんだ？」

セシルがだるそうな目で久々に見るテアナと顔を合わせた。

「ずっと違うクラスを見てたんでなかなか会いませんでしたねえ。」

私も昨日の今日で急に審判やれっつて言われたんでびっくりしましたよ……そうそう」

テアナはさりげなく近寄ると、セシルだけに聞こえるように小さな声で呟いた。

「”指輪”の力はなるべく見せないように。……でも負けは許しませんよ？」

「無茶言っつよな結構……」

だが、セシルの抗議はもちろん無視される。

テアナは二人をコロシアムの中心まで連れて行き、二人の間に立つて言った。

「それじゃ、あと一分で始めますねー」

そしてカウントを開始する。

その言葉に反応して、リリアは後ろへ飛び、間合いを取った。そ

して、いつでも動けるように身構えているのが見えた。

もう向こうは敵を倒すことだけを考えている。

もはや言葉は通用せず、こちらが何を言っても答えることはないだろう。

「まったく。気の早いこつて」

仕方ない、とばかりにセシルも距離を取って銃を取り出す。白い銃身の装飾品のような美しい銃、ヴィアゲイター！。

この前、街で喧嘩を止めるのに一度だけ使った。

いまいち使い慣れないが、今はこれに頼るしかない。

「ふうー……」

深呼吸をする。

体の隅々まで酸素を行き渡らせるように、深く、長く。

心と体を落ち着かせ、すぐさま全力で動けるように。

そして、頭を臨戦態勢へと切り換えた。

離れた場所にいる、リアアの一挙一動を見据える。

そのわずかな動きも見逃さない……セシルの集中力は、一刻一秒ごとに極限まで高められていった。

55、

56、

57、

58、

59、

「始め！」

テアナの声で、試合は開始された。

「……」

先に動いたのはリアアだった。

小柄な体からは想像できない力で地面を蹴り、急接近してくる。

(いきなり突っ込んでくるなんてな。接近戦タイプか。でも)

しかし、捉えられないほどのスピードではなかった。

セシルは冷静に銃口の先にその姿を捉える。そして、引き金を絞った。

ダン！ ダン！ ダン！

放たれた弾は3発。それらは全て、リリアの足に向けて発射され、突き刺さった。

(まさか、こんなに簡単に……?)

呆気なさすぎる。セシルがそう思ったのも束の間、弾が当たったその瞬間にリリアの姿は煙のように消えてしまった。

「え？」

呆気にとられる。リリアはどこにもいない。

本当に跡形もなく消えてしまった。

(どういうことだ……? まさか人間が本当に消えるわけじゃないだろうけど)

そう思った矢先のことだった。

セシルの肩に、焼けるような痛みが襲った。

「……っ！」

肩には、針のようなナイフが刺さっている。痛みとともに血がにじむのが見えた。

「こっちだよ」

後ろにはリリアがいた。

「くっ……」

後ろに回し蹴りを放つ。

だが、それより早くリリアはナイフを抜いて、後ろに跳躍して下がっていった。

蹴りは空を切り、そのまま回転して少し離れた場所にいるリリアと向かい合う。

(一瞬で移動したのか……? いや、でもいくらなんでもそんな早く動けるわけが……)

だが、考える暇もなく、もう一度リリアは突っ込んできた。

「リリアは完全なヒットアンドアウェイ戦術なのよね」
観客席から見ていたメテイが呟く。

メテイの隣にはジノーヴィ。その横にはダリオもいた。

「ま、最初はわけわかんないだろうなあ。攻撃しても当たらないんだから、焦るよな」

「セシルは見破れるかな。リリアの魔法」

三人は楽しそうに、それでいて真剣に二人の試合を見守っていた。

12話・優等生は手加減を知らない(前書き)

リリアの作戦に翻弄されるセシルですが……

12話：優等生は手加減を知らない

「さて、どうなるのかな……」

マールも、一番見やすいところを確保した。屋根の上だ。

パーティーで知り合った男達から、一緒に見ようと誘われたが、

「一人で見たいから」と全て断つてここに来たのだ。

「多分リリアも本気は出さないだろうし心配ないよ。セシルだって一応留学生だろう?」

「まあそうだけど……てかなんでギルもここに居るわけ?」

だが何故か、隣にはギルがいた。

「いやあ、たまたま僕の特等席に君が座ってたんだ。でも、もちろんマールなら大歓迎さ!」

テンシヨンの高いギルと対照的にマールは浮かない表情だ。

「やっぱり心配ですか?」

突然後ろから声を掛けられた。

振りむくとそこには

「テアナ先生!？」

さつきまで審判として、試合場の中にいたテアナが、マールの後ろに立っていた。

「今まで何してたんですか? てか、審判は……?」

「こつち来てからも仕事は全然減りませんしねー。私もけっこう忙しいんですよ。あと、審判は試合の邪魔にならないように、様子がうかがえるところで待機することになってるんです」

おそらく昼は普通の教官として、夜は情報収集に励んでいて、相当ハードな二重生活を送っているのだろうが、テアナに疲れた様子は見えなかった。

この辺りも一級軍士という超人の一片なんだな、とマールは思った。

「ま、心配することはありませんよ。それにセシルはいつもだらけ

過ぎですから、ちょっとぐらい怪我してもらったぐらいが丁度良いです」

「はあ……」

そう言っつて、テアナはのんびりした表情で試合を見ていた。いざとなればすぐに止めに入るつもりではいたが。いろんな意味で。

「あー、どうなってんだ一体？」

セシルは首をかしげて、目の前に迫ってくるリリアを見つめていた。

右手には針のようなナイフを逆手に持ち、そこそこ素早いけど、捉えられないほどではないスピードで一直線に突っ込んでくる。

さつきと全く同じパターンの攻撃だったが。

ダン、ダン、ダン！

両腕と右の太ももを狙って射撃。狙いは完璧で、全て命中したように思えた。

だが攻撃を受けた瞬間、まるで最初からいなかったかのように、リリアの姿は、ふっ……と消えてしまった。

「くそ、またかよ……」

やはりさつきと同じだった。

（何かの魔法か？ 幻術の一種かもしれないな……普通に攻撃してたんじゃ当たらないか）

セシルは考える。このまま同じ事を繰り返していてもジリ貧だ。

「無駄……」

後ろから声がした。恐らく、次に攻撃が来るのだろう。

だが、何度も同じ手を食らうわけにもいかない。

「そうかよ」

ダン！

セシルはすぐさまそれに反応した。

後ろは一切振り向かず、銃を持った右手を左の脇腹から通して、後ろに銃口を向けて撃つたのだ。

これ以上ない不意を突いた反撃だった。だが、命中した気配はない。

「意外といい反応するね」

リアの姿は後ろにはなかった。いつの間にも移動したのか、声が出た方向とは全く違う、少し離れたところに立っていた。

「あー訳が分からん……」

セシルは混乱していた。まるで幽霊を相手にしているようだった。しっかりと命中しているにもかかわらず目の前のリアはまるで手応えがない。

そうこうしているうちにもう目前まで接近してきた。

手にはやはり、針のようなナイフをもっている。

とりあえず、攻撃を避けなければ……と、さっき刺されて血のにじむ肩を押さえながらセシルは迎撃体勢に入る。

「じゃあないか……まあ加減なんて出来る相手じゃないし」

セシルはそう言い、さっきよりも引き金を強く絞った。すると、

ダダダダダン！

雷鳴のような銃声が響き、さっきとは全く違うものすごい勢いで弾が連射された。

拳銃でありながら、マシンガンのような弾の雨がまき散らされる。そしてこの銃の驚くべきところだが、連射の反動が完全に殺されていて、銃口がぶれることがないのだ。

普通なら肩ごと持って行かれそうな連射でありながら、一発一発がセシルの精密な射撃を活かすようになっていた。

セシルはそれでどこからリアが来ても対応できるように弾幕を張った。

「……!？」

まるで別の銃を持ち出したかのような変化に、リリアの表情が驚きに変わる。

案の定、目の前に迫っていたリリアは消え、全く別の場所から現れたもう一人のリリアが、弾幕を避けて後ろに下がった。

そのリリアは腕から出血していて……どうやら弾が当たっていたようだった。

「よし、もう一丁！」

このチャンスを生かすべく、セシルはさらに引き金を絞る。

無数の弾丸が、襲いかかった。

だが、リリアはその一極集中すぎた銃弾の雨を上手くサイドステップで避けると、素早く攻撃の軌道から外れた。

そして、捕捉されないようにジグザグに動きながらセシルの視界の端から逃げ切った。

「アース・ウォール」

そうして距離を取ると同時に、一瞬にして魔法を詠唱する。

その瞬間、地面がせり上がり、リリアを囲い込むように壁が作られた。

弾は全て、命中する直前で土の壁に吸収されていった。

「くそ、防がれたか……」

セシルはそう言いながら撃ち尽くしたマガジンを入れ替えた。

そして、一方のリリアは訝しげな表情で傷口の止血をしながら話しかけてくる。

「なに、その銃？」

あれほどの弾幕を張れる拳銃なんて聞いたこともなかった。

「さあねー。俺にもよく分からん」

軽く答えるセシル。

だがリリアは、すぐにセシルの武器の性能を理解した。あれに真っ正面から向かうのは危険だ。

土の壁に隠れながら、慎重に駒を進める。

「足りない実力を補うのに、おかしな道具を使うのね」
そう言いながら、また別の魔法を唱えた。

「スペア・イリジョン」

すると一瞬だけ辺りに濃い霧のようなものが現れた。そして霧はすぐに、まるで粘土をこねるようにしてイビツな人の形を形成していく。

やがてそれに顔が現れ、服を纏い、すらりとした手足が伸びていった。

気が付けば、何もなかったはずの場所に、もう一人のリリアが立っていた。

「さっきの正体はこいつか……」

セシルは、現れたもう一人のリリアを睨んだ。

「魔法で分身を作り出す幻術の一種か？ 結構ねちっこいな、全く……」

分身と本物は寸分変わらず同じ外見だった。今まで真正面から突っ込んできたのは、全て分身だったのだ。分身が陽動となって、本体が死角から攻撃する。

これで、相手の攻撃は全て空振りに終わり、自分の攻撃だけは確実に当たるというリリアの攻撃パターンだった。

この作戦の狙いは、攻撃と同時に相手の精神を削ることにあった。何度攻撃しても、敵は無傷。なのに向こうからの攻撃は食らうという状況に、普通なら心を折られかねない。

だが、その作戦は突破されて、リリアは次の手を考え始めた。

そして、幻術で作られた分身のリリアが、これまでと同じように真っ正面から向かってきた。

セシルは舌打ちをしながら銃を構える。

「そう何度も同じ手を食うかよ！」

セシルは、分身の動きは無視して周囲を見回した。
そして、さつきと同じように引き金を絞り、弾幕を張る。
ダダダダダン！

360°。全てを弾が覆い尽くしていた。
それほどの高連射にもかかわらず、銃身は全くぶれていない。
だが、その弾丸の雨の中を幻のリリアは、まるで気にすることもなく向かってきていた。

まあ幻なので当然だったのだが。
しかしさつきと違うのは、魔法がキャンセルされないことだ。

術者に弾が当たるとこの魔法はキャンセルされて消えてしまう代物だったが、未だ幻のリリアは健在だった。

それはつまり、本物のリリアに弾が当たっていないことを示していた。

「くそ、どこにいるんだよあの女」

一心不乱に撃ちまくるセシル。

そうこうしているうちに、幻が近付いてきた。そして、弾を気にすることもなくそのまま手に持った針のようなナイフを振り上げ…
…セシルに向けて振り下ろした。

「うわ!?!」

いくら攻撃を受けないと分かっているても、セシルは反射的にそれを避けてしまった。

そして、ナイフを振り下ろした瞬間に、幻のリリアの姿は消え失せた。

「くそ、どこだ?」

悪態を付き、今度は背後を警戒する。

さつきと同じパターンなら、次の攻撃は後ろから来る。

しかし、振り返ってもリリアはいなかった。声もしない。

周囲を見回すが、弾丸の雨に晒され、無惨に崩れた景観だけが目

に映る。

さつきまであれほどの弾幕を張っていたのに、どこにも引つかからなかったのだ。

（おかしいな、どこにもいない。少なくとも目に見える範囲には……てことは、どっか遠くにいるのか？ それなら狙撃される可能性も……）

思考を巡らすセシル。だが、その矢先のことだった

「こつち」

声が出た。その方向に、首を向ける。上だ。

リリアはセシルの上に飛び上がっていた。それに気付いたときには、上空から落ちてくるリリアの姿が眼前にまで迫っていた。

「ぐえ！？」

バフ、という音と共に、セシルの顔にリリアの体がぶつかってきた。

普通なら、ここで首の骨が折れてもおかしくはない。

しかし、リリアは小柄で軽かったため、その衝撃も少なかった。

（フェイントを利用して、今度は上から体当たりか。でも、体重がないからそこまでダメージはないな……よし）

セシルはこのままちょこまかと動くリリアを両腕で抱えるように捕まえた。

丁度、後ろから抱きしめるような感じだった。

「……エッチ」

そう呟いて、真顔で後ろから抱きしめるセシルの顔を見つめた。

「え、あー……」

「ごめん、と一瞬手を離しそうになったが今は試合中だということ
を思い出す。」

「惑わされかけていた自分をなんとか奮い立たせ、このまま一気に
勝負を決めてしまおう、そう思った矢先だった。」

「痛いのが好き？」

「え？」

「”デイス・チャージ”」

リリアがそう呟いた瞬間、閃光が走った。そして、バン！という音と同時にセシルの体をすさまじい衝撃が突き抜けた。

まるで何十本ものムチで体中を同時に打たれたような、とてつもない衝撃だった。

リリアの体からは紫色の稲妻が放電され、接触していたセシルは感電して、何万ボルトもの電圧が叩き込まれた。

(痛……熱……)

そのショックで、一瞬で意識を飛ばされる。その隙にリリアは脱出し、そのまま放電の勢いを強めた。

そのうちに、バチンツ！ という弾けるような音を上げて、セシルは数メートル先に吹っ飛んだ。

リリアは髪をかき上げ、それを涼しい顔で見ている。そしてゆっくりと歩いていく。

(くそ……体動かねえ)

黒こげになって倒れたセシル。吹き飛ばされた衝撃で意識だけではどうにか取り戻したものの、ボロボロの状態だ。

普通ならここで試合終了になってもおかしくはない。もし、普段のセシルならここで降参していただろう。

だが

「降参、する？」

リリアが余裕の表情でセシルを見下ろしていた。

「……強いなお前」

セシルは、痛む体にムチ打って、上体だけを無理矢理起こした。

激痛というよりも神経が通っていないような感触で、うまく力が入らないが、両手を後ろについて体を支えて座っている状態だ。

それにリリアは少しだけ驚いた。

「まだ起きあがってくる根性があるなんて……大抵あの魔法を食らえば起きてこないのに」

ふとリリアはこれまでのアカデミーでの訓練の日々を思い出していた。

今までライスアカデミー内で多くの人間と組み手をしたが、大概の者はすぐ諦める。リリアには敵わない、と言って逃げてしまう。無駄に怪我をしたくないから。

リリアも別にそれをなじる気はなかった。相手もよく分かった上での判断だ。これ以上やっても勝てない。それなら、せめて傷が浅いうちに負けを認めてしまおう、と。

アカデミー内ではほ敵なしの状態になっていたリリアだったが、退屈もしていた。

誰か本気で自分に向かってくる人間はいないだろうか、といつも思っていた。

そんな時に現れたのが、アルバートからの留学生だった。

マール・アイボリーの名は、ライスコーフでも有名だったのでそっちに挑んでも良かったが、その隣にいた一見冴えない男の実力も気になった。

つまりセシルのことだ。

正直、警戒するのはマールだけで、セシルの方は軽く見ていた。

憂さ晴らしと退屈しのぎにでもなれば、と軽く挑んでみたのだが……

(アイボリーのおまけと言ってもアルバートの留学生。背負ってるものが違う、か)

リリアは余裕の表情を消し、油断なくセシルを見る。

「全く、俺はお前が何やってんだか全然分かんないのに、お前は俺の攻撃全部見切ってくるもんな。それでいつの間にかこの有様だ」

痛てて、と今度はゆっくりと手を添えながら片膝を着く。

「でもな、俺はお前よりもっと強いやつを知ってるから」

言いながら、ゆっくりと立ち上がろうとしていた。

「そいつに比べりゃ、まだ優しいな」

そう言って、ふつと笑った。フラフラしているが、セシルはどうか立ち上がることが出来た。

「だから何？ そんな状態のまま私に勝てるわけない」

言われたとおり、セシルは肩で息をしていた。見るからに苦しそうな状態だ。

そして、最初に傷を負った肩からは、まだ血が噴き出ている。痛々しい光景だった。

「さあ……どうだろうな」

砂をはたきながら、セシルが答える。

だが、まだ立っていらられるだけでも大したものだ、とリリアは思う。

そして、この一方的な戦いを早く、簡潔に終わらせることを考えていた。

「これで、決める」

リリアはそう言い、また別の魔法を唱え始めた。

「ヘル・クライム」

一瞬で詠唱を終わらせると、掌から渦を巻く炎の塊が現れた。

「魔法か……めんどくせえ」

そう言う間にも、炎は凝縮され、勢いよく迫ってきた。

セシルは服を若干焦がしながらどうにか避けると、もう一度狙いを定めた。

だが、それはおとりで、丁度リリアはもう一つ別の魔法の詠唱を終わらせたところだった。

「ライト・キャンサー」

唱え終わると、ピン、と立てたりリアの人差し指から青い光が溢れ出した。そしてそれはどんどん大きくなっていき、指全体を光が覆い始めた。

「まずい。くそ、何か……」

そのまま光る指を向けると、光の速度で放たれた閃光が一直線に

セシルへと襲いかかった。

避けるのも間に合わない。そして、着弾する。

「っ!?!」

ドオン! という重低音の爆発音と共に、辺りが砂煙に覆われた。

13話・留学生はいつになく頑張る(前書き)

かなりダメージ食らったセシルですが、まだ粘ります

13話：留学生はいつになく頑張る

確かに命中した。リリアは確信していた。恐らくこれで決着だろう。視界は遮られたが、手応えは確かだった。

「ワール・ウィンド」

魔法でそよ風を発生させて、砂煙を散らす。だが、砂煙が晴れると信じられない光景が目飛び込んできた。

「ゴホゴホ、ぐっ……」

セシルが咳き込みながら、リリアの方を睨む。

一方のリリアはセシルの手元を見て、珍しく目を丸くして驚いているようだった。

「まさか傷一つないなんて、一体どうなってるの……その銃？」

後ろの方へ転がったセシルの銃、ヴィアゲイターを見てリリアは言った。

リリアは確かにセシルに魔法を撃った。

だが、セシルの体に向けて稲妻を放ったわけではなかった。リリアが狙ったのは、セシルの得物……手に持っていた銃だった。

リリアの狙いは、最初から武器破壊。

リリアはセシルが全然魔法を使ってこないところを見て、セシルが魔法が不得手だと判断した。

それなら武器さえ壊せば勝負がつくと判断してのことだった。しかし実際には、壊れるどころか傷一つない。

直接手に持っていたセシルは若干火傷を負ったようだったが

「知るかよ……ゴホゴホ。熱いし痛てえ……。くそ、最悪だ。砂まみれだし」

ぺっぺ、と口に入った砂も吐き出す。

リリアは呆れたようにそれを見守っていた。

「でも、お前本当に優しいよな。直接俺を狙えば簡単に勝負はついたらはずなのに」

砂をはたきながら言う。

「……殺したら、駄目だから」

死なないように手加減をしながら戦闘不能にするのは、殺すことより難しかった。

「確かにあんなの食らったら死にそうだ。いや、絶対死ぬな。うん」
セシルは一人で納得していた。

それを見て、リリアは問いかけた。

「……本当に降参しないの？」

銃さえ壊せば勝負はつく、とリリアは踏んでいたが、それも失敗した。

そうになると、あとは実力で倒すしなくなる。

リリアは、セシルがそう簡単に降参するとは思えないと判断したため、本気で倒しに掛かる必要があった。

降参するなら、これが最後のチャンスだった。

「それはないな」

だがセシルは即答した。

「どうして？」

そう言われて、セシルは一瞬その理由を考えた。

そして、ただなんとなく思ったことを口にする。それぐらいしか思いつかなかった。

「俺だつてたまには、格好つけないときもあるんだよ」

セシルはふと、昨日の夜のことを思い出していた。

「……そんなにボロボロになってまだそんな口が聞けるのね」

リリアはセシルの状態を見る。”デイス・チャージ”のダメージは大きかったらしく、まだフラフラとしている。

そして最初にやられた肩口からはまだ血が止まらないで、滲み出ている。

リリアの持つ針のようなナイフの先端は形状が特殊で、血が止まりにくい傷口を作り出すものだった。

このまま放っておいてもいずれ失血で気を失って倒れるだろう。だが……

セシルがゆっくりと銃を持つ腕を上げる。度重なるダメージのせいか、少し腕が痙攣していて狙いも定まらない。

試合開始直後の、あの射撃精度はもう出せないだろう。

だがそれでもセシルにはそれしかなかった。他の一般的なアカデミーの生徒達と違い、セシルは魔法が使えないのだ。

そんな様子を、ほぼ無傷のリリアは無表情で見ていた。

「そう……」

ここまでの戦いの中でリリアの中のセシルの評価は大幅に改善されつつあった。

凡庸には違いないが……熱が、執念が違った。

つまらない相手じゃなさそうだ、とリリアは思った。

「なら、本気で相手をしてあげる。最後まで、倒れないで」

そう言い、ほんの少しだけだったが……リリアは初めて薄く笑った。

14話：そして決着（前書き）

リリアが本気になりました。
そしてセシルはどうとう……

14話：そして決着

試合もいよいよ終盤を迎えようとしていた。

セシルは度重なるダメージと出血でフラフラになりながら、途切れそうな意識をどうにか保っていた。

「一分で、終わらせる」

先に動いたのは、リアだった

凄まじい力で地面を蹴ると、風を切つてその場から消えた。

その動きのキレも速度も、さつきまでとは比べ物にならないものだ。

「け……ちょこまか動きやがって」

セシルは痙攣する右腕を無理矢理押さえ込んで、狙いをすます。

だが、早い動きの上、体力も消耗した今の状態では普段の射撃は出来そうになかった。

動きを先読みしつつ足を狙つて、という普段やっている精密射撃も今は影を潜めていた。

数発の銃弾を放つたが、かすりもしない。

(この距離で外すか……駄目だなこりゃ)

セシルは自分の限界を悟っていた。

自分の特技は、この射撃技術のみ。それが使えないとなると、もう手はなかった。

そしてすでにリアのスピードは、もはやセシルに追えるものではなかった。

棒立ちのセシルの懐に入り込み、みぞおちに向けて正確に蹴りが叩き込まれる。

小柄で重さもないが、その分スピードが乗って加速された蹴りは、セシルを吹き飛ばすのに十分な威力を持っていた。

「ぐ……」

とつさに腕でガードしたが、衝撃は殺せなかった。

地面をえぐりながらブレーキを掛けて転がることはなかったが、吐き気と共に口の中に血の味が広がるのを感じた。

「ふっ」

今度は左側から、飛び膝蹴りが飛んでくる。

それはどうにか身をよじてかわし、銃口を向けた。

だが、すでにそこにリリアの姿はなく、今度は少し離れたところに移動しているのが見えた。

手には、あのアイスピックのようなナイフを持っている。

セシルは反射的にその場を退いたが、次の瞬間にはセシルのいた所の後ろにあった木に、何本ものナイフが音もなく突き刺さっていた。

これが、ライスアカデミーのトップクラスの実力が……とセシルは感心したが、余裕は全くない。

ただ逃げ回っているだけで精一杯だ。

「アース・オレゴン」

リリアがそう呟いた瞬間、セシルは急に足がぐんと落ちるのを感じた。

「な、なんだ!?!」

見ると、さっきまで普通だった足下が崩れていてそこに足がまっつってしまった。

普通の土だった足下は、砂になり、渦を巻くようにしてセシルの足を絡め取っていた。

「捕縛用の魔法か……」

抜け出そうとしても、渦になった砂場がきつく締め上げていて、一切動くことは出来なかった。

「逃がさないよ」

そして、砂場の範囲は更に広がっていく。

ただの土が砂に変わっていき、それがセシルの足が埋まっている場所を中心に渦を巻き始める。

普通の地面が、一瞬にしてアリ地獄と化した。

飲み込まれたら最後、このまま生き埋めにされるのも時間の問題だと言えた。

だが、それはあくまでも時間稼ぎだった。

とどめをさすための魔法を唱える時間稼ぎ。

この魔法を使うのはいつぶりだろうか。もしかしたら人に向けて使うのは初めてかもしれない。

リリアは、少し時間の掛かる魔法を詠唱しながらそんなことを考えていた。

(でも、もう終わり)

「スファイア・プラズム」

その瞬間、バチバチ、と音がしたかと思うと、巨大な雷が周囲に降り注いだ。

幾筋もの雷は、ある一点に集中して溶け合うように重なっていき、やがて一つの球体となった。

離れた場所で這いつくばるセシルに向け、リリアがそれを放とうとしていた。

もともと、魔獣の群れをまとめて殲滅する時などに使われる魔法であり、もっと魔力を込めれば、山一つ消し飛ぶ威力にまでなる強力なものだった。

「おいおい、殺す気かよ……!!」

思わず突っ込まずにはいられない。

「威力は抑えてあるから死にはしない、大丈夫。大火傷を負うだけ」
本来の100分の1程度に抑えたものだったが、それでも十分すぎる威力があった。

「全然大丈夫じゃねえだろそれは……」

セシルの言葉に構わず、リリアは腕を振るった。すると、プラズマ球が、稲妻をまといながらセシルを押し潰すように直進してきた。食らえば終わりだ。

だが逃げることはできない。どれだけ力を込めても、その分砂に沈んでいくだけだった。

ズズズズ……キィィン！

その間にも、プラズマ球は勢いを増してセシルへと向かっていった。

（今度こそ、勝ち）

リリアは勝利を確信していた。

これ以上ないほど追いつめ、何も出来ない状況に追い込んだ。

この状況でこれ以上何か起きることなどありえなかった。

長かった戦いにもようやく終わりが近付いていた。

だが、信じられないことが起きた。

セシルを包み込もうとしたプラズマが、セシルに当たる手前でその動きを止めたのだ。

「え……」

リリアは突然動きを止めたプラズマ球に目を丸くしていた。

ほんの数秒後には直撃していたはずが、突然の静止。

プラズマ球の高熱で、近くにあった草木が焦げ付いたり、燃え広がっているものもあるというのに。

それを目前にしたセシルには、火傷の一つも出来ていなかった。

セシルは知らず知らずのうちに左手を突き出していた。

そして、その中指にはめた指輪が輝いていた。

「なに……?」

状況が飲み込めず、リアは啞然としていた。
それは観客も同様だった。

奇妙な事態に歓声は静まりかえり、代わりにざわざわとした話し声
が聞こえてきた。

「なんだあれは？」

観客席で見ていた者は、みんな訝しげに止まった魔法を見ている。
「結界、か？ でもあんなの聞いたことねえ。アルバートにはあんな
のがあるのか？」

「そうね。魔法をかき消すならともかく、その場に留めるなんて」
ライスコーフの人間は、みなアルバート固有の魔法による効果だ
と
思っていた。

「へえ、すごい魔法だねえ。さっすが留学生だ」

ギルが呑気な声をあげる。

マールは聞いていなかった。それどころじゃなかった。

(なに、あれは？)

頭の中は、それでいっばいだった。信じられないものを見たのだ。
(魔法をその場に留める？ 結界？ そんなの、聞いたことないわ)
言葉を失っているマールと、その隣でやけに慌てている人がいた。

「あ……。あ、セシルもやっと使えるようになったんですね」

テアナは焦りを誤魔化しながら言葉を発する。

そろそろ止めに入ろうと、飛び出そうとしていたテアナの動きは、
観客席の手すりに手を掛けた時点で止まっていた。

万象の指輪のことを知っているのは、この場でテアナだけである。
だから、目の前の状況には驚かなかったが、周りに固定魔法のこ
とを気付かれないかかどうか気が気でなかった。

生徒はともかく、ライスコーフの教官達もこの試合を見ているは
ずなのだから。

「これは使う気なかったんだけどな、体が勝手に動いちまった……
まあしょうがないか」

セシルの左手にはめられている指輪……固定魔法”万象の指輪”
が、その輝きを増していた。

まるで見えない手で掴むかのように、一定範囲内にあるものの動きをコントロールする力。例えそれがどれだけ強力な魔法でも、セシルの意思一つで意のままに操ることができた。

セシルもこれを使うのは二度目だった。

なるべく使わないようにとテアナに釘を刺されていたが、追いつめられてとっさに”切り札”がある左手を突き出すと、勝手に発動していたらしい。

あとでテアナにどやされ、マールに激しく問いつめられることを想像して、ゲンナリした。

「しょうがないな……」

そう言いながらセシルは、前に突き出していた左手を横に軽く振った。

すると、静止していたプラズマ球が、ゆっくりと動き出す。

魔法を放った、リリアの方へ向けて。

「!?!」

魔法が逆流してくるなんて、リリアには考えられないことだった。そして、もう一度コントロールしようと、魔力を込めてみる。

だが、自分が放ったはずの魔法は、一切言うことを聞かなかった。そうしているうちに、プラズマ球の速度は上がっていく。

「まずい……」

リリアは最初と同じように分身を作った。

そして、魔法が当たる直前に左右に分かれて走りだした。

すると、プラズマ球は分身の方へ向かっていき、幻影のリリアを

すり抜けてコロシアムの壁……観客席の下の壁に激突した。

ドオオオン！！

「うわっ！？」

「きゃあ！？」

「な、なんだ？」

凄まじい轟音と震動が観客席を揺らし、プラズマ球が直撃した壁には大穴が空いていた。

その光景を見て、リリアは冷や汗をかいた。

「威力が……上がってる？」

もし食らっていたら、立ち上がっていた自信はなかった。

というより、死んでいたかも知れない。

「避けてくれて助かった」

後ろから声がして、ハッとして振り向いた。

動けないはずのセシルがリリアの前に立っていた。

どうやってあのアリ地獄を抜けたのか、と思って見てみると、砂地の渦の動きが止まり、その上に足跡がついていた。

どうやら普通に歩いて出てきたらしい。

「まさか、ね」

リリアは、ようやくこれがセシルの力であると理解した。

「ちょっと強めに返したから、当たってたらやばかったな」

「……そんなの、持ってたんだ」

リリアは驚きつつもセシルを睨み付ける。

（こんな魔法がアルバートにあったなんて……）

今まで一度もセシルが魔法を使ってこなかったので、油断した。

リリアは自分の浅はかさを呪った。

最後の最後にこんな隠し球があるとは考えもしなかった。
だが

「ここまで来て、負けるなんて……！」

リリアは距離をとり、さらに魔法を唱えた。

「ヘル・クライム」

掌から炎の渦が飛び出し、セシルを包み込むように襲いかかる。

だがそれも同じ事だった。

「それも、いただきだ」

セシルが左手を掲げただけで、炎はセシルの身を焦がす直前に見えない手につかみ取られたようにその動きをピタリと止めてしまった。

セシルは次に、左手を引き抜くように振るった。

すると指輪が光り、それに応じて炎に変化が生じた。

ゆらゆらと揺らめいていた不安定な炎が、ねっとりとした液体のように形を変えていった。

それはやがて細くなり、分かれて、何本もの矢の形へと変化した。

「そんな……」

リリアはひとまず距離をとる。

このままでは危ない。魔法で攻撃しては駄目だ、と判断した。

それは既に遅すぎる判断だったが、セシルの次の攻撃を回避するため、さっきと同じように分身を作り始めた。

「スペア・イリジョン」

相手を惑わす幻影が発動し、広場の中に20人のリリアが現れた。今のリリアが一度に作ることでできる、最大数だ。

幻影に攻撃する能力はない。ただ、本物を隠すためのカモフラージュに過ぎない。

最初と同じように、分身の影に隠れて隙をうかがうという作戦だった。ただ、今回は分身が20人いて、本物はたった一人だ。本物を探し当てるのはより困難になっていた。

セシルは、冷静に21人のリリアを見つめた。

「最初と同じ、分身か……だけど、全部消しちゃえばいいだけだ」
冷静で冷徹な顔で、セシルは確実にリリアを追いつめていく。
炎の矢はセシルの意のままに動き、それぞれのリリアに襲いかか
った。

デコイとなったりリリアの分身をことごとく貫き、消していく。
普通ならば、幻影に攻撃しても、ただすり抜けるだけだ。

だが、どういうわけか、この炎の矢は貫いた幻影にダメージを与
えて消してしまっていた。

「ん……くっ……！」

炎の矢は雨のように細かく分散され、20人いた分身は、凄まじ
い勢いで減らされていった。

そして、ついに本物のリリアへと矢が近づく。その数は一本や二
本ではなく、とても避けられない。

リリアは覚悟を決めた。だが、矢がリリアに激突する直前……

「そこまです！」

聞き覚えのある声があった。

かと思えば、突然、強烈な風が吹き始めた。

それも突風なんてもんじゃなく、小さな嵐のようなものだった。

「うわっ！」

「きゃ！」

二人とも、思わず目を瞑って腕で目をガードする。

その暴風に巻き込まれ、リリアに迫っていた炎の矢は全て消えて
いた。

「な、何……？」

しばらくして風が止み、恐る恐る目を開けてみると、いつのまに
かりリアとセシルの間には審判のテアナが立っていた。

会場にいた全ての者が、目を丸くして驚いた。

「セシル、そのくらいにしておきなさいね。女の子に火傷させるも
んじゃありません」

にこり、と笑うテアナ。その笑顔がものすごく怖かった。
(ちよつとやりすぎたか……絶対怒ってるなありゃ……)
身震いしながらセシルは無言で頷いた。

「大丈夫ですか？」

「あ……、はい」

立ちつくしていたリアには笑顔で優しく声を掛けた。そして、
今度は観客に向かい、叫ぶ。

「勝敗は決しました！ 留学生、セシル・クラフトの勝ちです。親
善試合はこれで終了とします！」

その声で、固まっていた観客達もざわざわと騒ぎ出した。
そして、少しの動揺が広まった後、大きな歓声が上がった。

セシルはあまりに突然のことで呆然としていたが、テアナに腕を
取られて上に掲げられた。

「痛てて……先生痛いつて」

よりによって肩を刺された右腕の方だったことに悪意を感じつつ
も、歓声を浴び、照れながら曖昧な笑みを返していた。

親善試合は終了した。

観客の大部分は、試合の余韻に浸りながら、ざわざわと試合場を
あとにした。

広場に残されたのは、セシル、リア、テアナの三人。

試合を終えた二人はテアナにヒーリングを掛けてもらい、傷を癒
して休んでいた。

「はあ……さすがに死ぬかと思った。超頑張ったし、俺」

「珍しいこともあるもんですね。明日隕石でも降るんじゃないです
か」

「そりゃ言い過ぎだ。てか先生、もっと早く止めてくれよマジで」

セシルは疲れ切った声で訴えた。

「珍しく頑張つてましたし。降参するまでほつとこつと思つたら、まさかこうなるとは……」

涼しい顔でテアナは答えた。

だが、改めて固定魔法の力を思い知つた気がした。あの状況から一気に逆転できてしまうほどの力……。

幸い、会場の誰にも固定魔法だとばれることもなく、あれはセシルの力ということになってしまった。

アルバートの二人が馬鹿話をしている間、リリアは無言で木の陰に座っていた。

時々何か言いたそうにセシルの方をちらちらみたりしているが、それに気付くセシルではなかった。

そんな様子を、テアナは横目でちらりと見た後、立ち上がって歩き出した。

「さて、と。私も仕事ありますし、そろそろ戻りますか。あ、セシル……あとで私の部屋まで来て下さいね」

「……はい」

テアナが去り、げんなりするセシル。

あとで説教やら質問攻めやら、いろいろめんどくさいことがあるだろうと思うと憂鬱だった。

とはいえ、このまま焦げるような暑さの屋外にいるのもしんどいので、とぼとぼと演習場の出口に向けて歩き出した。

今はライスコーフ滞在3日目の昼。

ちなみに砂漠の日中の気温は、40 を越える事もあるという。

試合場は直射日光が差し込んできて、そろそろ暑さがきつくなってくる時間帯だった。

「暑い……」

あんまり教室に帰りたくないけど、早く帰って涼みたいというジレンマにセシルは頭を痛めた。

そしてふと、木陰に座ったままのリリアが目に入った。

そこにいたのは、さっきまで殺し合い寸前のことをしていた相手ではなく、普通の女子生徒だった。

こうして見ると、別に普通だよな。と思いながらセシルは何の気なしに声を掛けてみた。

「そろそろ戻るかー？ お前も暑いだろ？」

「……慣れてる」

リリアは少し驚いた顔をしたものの、涼しい顔で言う。実際、大して汗もかいていないようだ。

そこら辺は砂漠の国の住人らしく暑さには強いらしかった。

「そーかい」

もう少し休むつもりなのか、とセシルは解釈して、そのままただら歩いていった。

だがしばらくして、後ろから足音近付いてきた。

座っていたリリアが立ち上がり、セシルに追いついてきたようだった。

「……ん、なんだ？」

「ごめんなさい」

「え？」

「私、あなたを見くびってたから。さすがは留学生なだけのことはあるね」

心なしか、表情が柔らかいように感じた。思えば、セシルは初対面で喧嘩を売られたりして常にリリアの怒ったような表情しか見ていなかった。

このギャップがなんだか妙な感じだった。

「ああ……いや、あんなのたまたまだし」

セシルは曖昧に返事をした。

反則のような固定魔法まで持ち出したの勝利だ。

純粹な実力なら、足下にも及ばなかっただろうとセシルは思っていた。

「でも、負けは負け……」

無表情のままだが、心なしか少し落ち込んでいるようにも見えた。
（冷たいように見えて、負けず嫌いで熱いやつなんだよなあ……）
どう慰めようかと思っていると、リリアは顔を上げてセシルの方
を見てきた。

「これから……」

「ん？」

「これからもよろしく、セシル」

そう言って、握手を求めてきた。

この様子を、普段のリリアを知るダリオ達が見ていればものすごく驚いただろう。

誰かに負けるなんて、久しぶりのことだった。良い意味でも悪い意味でも、リリアには大きな衝撃となった。

「ああ……ま、よろしくな」

肩がまだ痛むがどうにか腕を上げて、出された右手を握り返した。
そういえば、名前呼ばれたのも初めてだな、と思いながら。

15話・進行、水面下で（前書き）

試合は勝ちました。とりあえず教室に戻ります

15話：進行、水面下で

昼を少し過ぎた時間帯。

ライスコーフでは、一番暑い時間帯だ。灼熱の太陽に照り返された地面からは、塵気楼が上っている。

試合を終え、ただでさえ疲れているセシルは、足早に教室に戻っていった。

「やれやれ……でも心配なのはこつからだよなあ」

セシルは、教室の前まで来て、少しだけ入るのをためらった。

だが、意を決して恐る恐る教室へと足を踏み入れた。

だが、クラスメートの一人がセシルを発見すると、その瞬間、割れんばかりの拍手に包まれた。

「お、留学生が帰ってきたぞ！」

「やるじゃん！」

「まさか勝つとは思わなかったぜ！」

「くそ、俺の賭け金返せ！」

色んな所から歓声やら罵詈雑言が飛んできて、それに拍手が教室中に響いた。

突然のことにセシルが驚いていると、誰かが近付いてくるのが見えた。

「どうやら、みんなでセシルが帰ってくるのを待っていたらしい。

「まさかリリアに勝っちゃうなんて。すごいじゃない！」

「ああ、僕も驚いたよ。大したもんだ」

観客席で見ていた、メティ、ダリオ、ジノーヴィイの三人だった。

「お前強かったんだなあ、あんなすごい魔法持ってたなんて。おい、今度は俺と戦えよ」

そう言つて、ジノーヴィが肩を組んできた。彼も性格は違つがリアと同じタイプらしい。

「いやいや、まぐれだつて。もう二度とやらないぞ」

セシルは少し照れながら言った。このクラスの誰もが、いや、アカデミー中の人間の予想ではリアの圧勝ということだったが、それを見事にひっくり返した。

悪い気はしないが、こういうのには慣れていないので、むず痒い感じがした。

正直、実力で言つて、セシルがリアに勝つのはありえないことだ。

だから、もしかしたら自分が固定魔法を使ったということがばれるんじゃないかという不安があつた。

反則のような固定魔法を持ち出せば、誰が相手だろうと容易く組み伏せられるだろう。

誰かが、そう疑つてくるのではないかと心配だつた。

だが、この様子ではどうやら固定魔法のことはばれてないらしい、とセシルは安堵した。

ただセシルがすごい魔法を使ったということだけが広まっているみたいだ。

だが、それはそれでもう一つ問題があつた。

「セシル」

その声に、血の気が引いた気がした。今一番会いたくなかつた相手の声だ。

ゆつくりと振り向けば、ギルとマイルがいた。

「いやあすごい試合だつたね。僕らも見てただけで、まさかあそこから逆転するなんて。あんな隠し球持つてたんだねえ」

「い、いやあ。ははは」

火に油を注ぐギル。

隣には氷のような笑みを浮かべたマールがいる。

「うん、まさかセシルがあんなことできるなんて思ってもなかったわ」

（予想はしてたけど……やっぱりアレを黙ってたこと怒ってるんだよな）

付き合いの長いセシルにはすぐ分かった。

だが、それを今ここで説明するわけにもいかない。

「あ、あとでな。ほら、授業始まるし」

ちようどいいタイミングで入ってきた教官を指差して、セシルは逃げるように席に戻った。

「そうね、あとでじっくり聞かせてもらおうわ」

そう言って、マールも席に戻っていった。

セシルは授業が始まると、ため息をついた。これからは、大変だ。

ちなみにリリアは一緒に教室まで戻ろうとしている途中で、「授業を聞く気分じゃない」といってどこかへ行ってしまった。前の席は空席だ。

（俺も授業なんか抜け出せばよかった……）

そんなことを考えながら授業は上の空で、窓に映る景色を眺めた。砂漠らしく、からっとした暑さの快晴だった。白い建物に反射する太陽の光が目にも染みだ。

そして、その日の夜。

セシルとマールは急にテアナの部屋に呼び出された。

そこで待っていたのは、仏頂面のマールと、タンクトップに短パンという超ラフな格好のテアナだった。

「……もう寝る直前かよ」

呆れて言うセシルにテアナは軽く答える。

「何ですか、いやらしい目で見ないでくださいよー」

「見てねえよ」

そうは言いつつ、直視はできないセシルだった。

「んなことより、セシル？」

「ああ、分かった分かった。今説明するから」

セシルは、とりあえずマールにも説明することにした。

昔から大事に持っていた父親の形見の指輪が、実は固定魔法だと最近分かったということ。

その力を使つて、今日の試合も勝ちを拾ったということ。

元から別に隠しておくつもりもなかった。ただ、言うタイミングがなかったただけだ。

「……というわけなんだ」

「なるほど。その指輪がねえ……」

納得がいったマールは、セシルの指にはめられてある指輪をまじまじと見つめた。

「まさかあなたのお父さんが固定魔法所持者だったなんてね」

「俺も親父のことは全然覚えてないけどな。めんどくさい物を渡してくれたよな」

とはいえ、これで二度もこの指輪に救われたことになる。

(不思議なもんだな……)

セシルは左手にはめられた銀の指輪を見つめていた。

「まあとりあえず、固定魔法については今回はばれずに済んだみたくで良かったですね……それより、今日の試合についてです」

テアナは神妙な顔つきで二人に向き合った。

「二人を呼んだ理由、ここからが本題です。マール、何か気付いたんでしょう？」

「はい」

「……え？ 何が？」

真剣な表情の二人をよそに、セシルはなんのことだか分からない

様子で、テアナとマールを交互に見ていた。

「セシル、気付かなかった？ 今日の試合、リリアが使った魔法よ」
言われて思い出してみる。

アルバートにはない、ライスコーフ特有の魔法が次々と放たれてきた。

「えーっと……幻影のやつと、光の矢と、炎と、プラズマと……それぐらいか？」

どれもこれも、まともに食らえばとても無事ではいられなかっただろう、とセシルは今更ながら身震いした。

「もう一個あつたでしょ。あの風のやつよ」

「風？ ああ〜」

光の矢が、セシルの銃を狙って来たときのことだ。

あの時、爆発によって砂煙が起こった。それを払うために、一度だけリリアが唱えた魔法があつた。

「確か……なるほど、そういうことか」

セシルも、ようやく納得がいった。

そして、テアナが二人をここへ呼んだ理由も。

「さて、本当なんですか？ あなたたちがアルバートで遭遇したスパイが使っていた魔法と、今日リリアが試合で使った魔法が同じというのはいは」

「忘れもしない。二週間ほど前の話。」

セシル達がアルバートで演習を行っていたときに襲ってきた神父服のスパイ……ルイスが、最初に使った台風のような魔法。

「「ワール・ウィンド」、確かにそう言っていました」

ルイスのものとは大分規模は違うが、リリアのも同じ魔法だった。なるほど。今回はしらみつぶしに行う情報収集任務の一つでした。が……これは、いきなり大当たりかもしれないねえ」

「だいたい、国ごとで魔法の使い方も名前も違う。」

同じ魔法だとすれば、ルイスもこの国の出身者の可能性が高い。

「そうと分かれば……本格的に調査する必要があるそうですね。私ももう少し念入りに探ってみます。二人にも、明日からやってもらうことがあります」

「……ここで、ケリつけるのか？」

「当然でしょ」

「マールははっきりと断言した。」

そして、それは必ず自分が付ける、と固く決意していた。

「借りは必ず返すわ」

あの時の屈辱を忘れた日はなかった。油断して捕まった拳げ句、エア・アンカーを奪われそうになったという屈辱を。

「まあまだ情報が足りません。今は焦って行動しないように。何か分かったら私から連絡します」

暴走しそうなマールを、テアナが諫めて、その日は解散になった。
(めんどくさいことは続くもんだなあ……早く帰ってえよ)

セシルは部屋まで戻りながらそんなことを考え、大きな欠伸を一つつけた。

その日の深夜

奇妙な光景だった。

光が届かないはずのその地下遺跡の中が明るく照らされている。

魔法によつて遺跡全体に白熱球のような淡い光が行き渡り、遺跡というよりは何かの地下施設のような様相だった。

ローブを頭まで被った奇妙な男は、そんな遺跡の中を進んでいた。

遺跡……王家の墓には、盗賊避けの罫が至る所に仕掛けられており、下手に動いて作動させてしまえば、それこそ命を落とす危険性もある。

大昔の人間が知恵をしぼって作り出した罠の数々は、数百年という月日が経つてもその機能を失うことなく、下手な要塞よりもほど攻略困難だと言えた。

だがローブの男は、そんな罠などまるで関係ないようにスイスイ進んでいく。

地図を片手に、狭く入り組んだ迷路を一瞬の迷いもなく進む様子は、まさに一流の盗賊の業といえた。

次々に罠を解除し、くぐり抜け、必要とあれば破壊しながら。

途中に見かけた部屋を一つずつ入念にチェックしながら一步一步を進めていく。

そして、最後の部屋に入る。多くの壁画や装飾品が埋め込まれた狭い石室。

部屋の中央には、これみよがしに大きな石の棺があった。

これが男が探し求めていたものだった。興奮するのを抑えながら、最後に張り巡らされた罠を慎重に解除する。

そして、全ての罠の解除が終わると棺に駆け寄り、石蓋を乱暴にこじ開ける。

中には、一本の剣があった。

派手な装飾が施された金色の剣。

淡い白熱色の光を反射して鈍い光を放つ、妖しげな宝剣。

「ははは」

彼は、力無く笑うと剣を手に取り、確かにその重みを噛みしめた。

「これが。宝剣……『生殺与奪』。ここまで来るのに苦労したが、最後は割とあっさり手に入ったもんだ」

一人、満足げな笑みを浮かべながら、その剣をしばらく見つめていた。

だが、ふと誰かの気配を感じて後ろを振り向く。

そこには彼の見知った顔がいた。

色白の痩せた男だった。

中心に赤い十字架が描かれた、真つ黒な神父服を纏っている。

片手には聖書のような本を持ち、ニヤニヤとした笑みを浮かべながらその場に立っていた。

「ルイス・シュレディングー。なんでお前がここにいるんだ、何をしに来た」

驚きと警戒を含んだ声で問いかける。

アルバートに固定魔法を奪いに行く任務に失敗して大怪我を負い、今は休養中のはずだった。

ルイスはそれは答えず、彼の持つ剣に目を向けると口を開いた。

「……しばらく見ないと思ったらそんなものを探していたのですか。なるほど、ちゃんと仕事はしてたみたいですね、ウエザー」

質問には答えず、ルイスはニヤニヤした表情を変えずに言う。

ウエザーと呼ばれた男は心外だと言うように眉を寄せて

「当たり前だ。それより、お前こそアルバートの一件は失敗したらしいじゃないか。固定魔法エア・アンカーの回収がお前の仕事だっただろ。俺は……この通り手に入れたぞ」

そう言つて、彼は手に持った剣を軽く振る。そのたびに、刀身に光が反射して鈍い輝きを放つ。

「ええ、そのはずだったんですけどね……とんだ邪魔が入りまして全く、面目ないですね」

そう、困ったような調子で苦笑いを浮かべる。

そう言うんだったら少しは申し訳なさそうにしる、とウエザーはイライラしながら

「なんで今回は失敗したんだ？　今まで嫌みなくらい完璧だったお

前が。固定魔法保持者がそんなに手強かったのか？」

「いえ、相手は貴方もご存じでしょう。アルバートの陰の歴史、アイボリー家の娘ですよ」

「ああ……例の伝説の一族の末裔か」

闇の戦闘屋一族のアイボリーの名は他国にも知れ渡っていた。ウエザーも噂ぐらいは聞いたことがあった。

だが、疑問が浮かんだ。

「アイボリー家とはいえ、お前なら小娘一人くらい、そう難しいことでもないだろう。お前も、それをもってるしな」

と、大事そうに抱えられた聖書のような本を差して言う。魔獣を生みだし、異空間を作る固定魔法だ。

だがルイスは残念そうな顔で

「小娘だけなら問題はなかったんですが……一級軍士に出てこられたのでね。逃げるので精一杯でしたよ……命は助かりましたが、その代償に、ほら」

そう言つて、包帯だらけの右腕を見せる。

本来なら、腕を丸ごと切り落とさなければいけないほど重度の火傷だったが、ありつたけの薬と魔法を施し、どうにか少し動かせる程度まで回復していた。

ルイスの言葉を聞いたウエザーは眉根を寄せて

「一級軍師だと……。そんなレベルの連中が動いてたのか」

「ええ。追いついてくる前にさっさと逃げようと思つてたんですが、思ったよりも動きが早かったのですね。これからは、連中も私を追つて来るでしょう。自分の国に入ったスパイを見逃すわけはありません」

「厄介だな……」

苦々しく顔をゆがめる。ちよろちよろと嗅ぎ回られると、今後行動がしにくくなるだろう。先手を打つ必要があった。

「ええ。ですが目的は必ず達成されます。まずは五大国のパワーバ

ランスを崩し、戦争を起こす。そしてその後は……」

言いながら、ルイスは手に持っていた本を開いて、そのページの一部をそっと指でなぞる。

すると、瞬く間に彼の足下に黒い魔法陣が現れ、上に乗っていたルイスは、まるで沼の中に沈むようにゆっくりと身体の半分までを魔法陣に埋めた。

「では、色々と準備がありますので私はこれで……。貴方も事が済み次第、その宝剣を持って本部まで戻って来て下さい」

その身体が完全に地面に溶けてなくなると同時に、魔法陣も消えて無くなった。

ウエザーはそんな異常な光景を、苦い顔で、しかし慣れた様子で見送る。

「まったく、あいつはどうも苦手だ……」

「ああそうそう言い忘れてました」

「うわぁ!？」

ずぶつと消えたはずの魔法陣が突然現れて、ルイスがそこから上半身だけをのぞかせる。

それに、ウエザーは眉をつり上げて

「消えた瞬間に、いきなり現れるな……心臓に悪い」

独り言を聞かれたばつの悪さもあって、無愛想に答える。だがルイスはそれを気にした様子もなく話を続ける。

「この遺跡、爆破しといてください」

とんでもないことを言うルイス。

ウエザーは全く訳が分からないといった様子で

「爆破？ 馬鹿を言え、そんなことして何の意味がある。ただでさえ国の重要文化財なんだ、足が付かないように侵入するだけでもどれだけ苦労したか……」

「いえ、それでいいんです。私に考えがありますから」

ルイスはニヤニヤしながら作戦を簡単に説明した。
何を考えているか分からない笑みは、ウエザーをことごとくいら
つかせたが彼もルイスに乗ることにした。

というのも、彼にとってもルイスの作戦は理想的だったから。

「目立つ行動は避けたかったんだがな……」

「しかし、ノーリスクでのリターンはありません」

偉そうに……と彼が言いかけたところでルイスは魔法陣の中に沈
んでいった。今度は本当に帰っていったのだろう。

それを見送った後、ウエザーは魔法を唱え始めた。大きな遺跡を
消滅させるほど強力な破壊魔法を。

「黒陽球……“セクメトの火”」

魔法の詠唱が終わると、ただちに狭い石室内に黒い球体が現れた。

その威力は、遺跡一つを跡形もなく完全に破壊するほどのものだ。
とてもゆっくりとした早さで、風船が膨らむようににして黒い超高
熱の球が膨張していく。

触れた壁の一部が消滅するように溶け始める様を満足げに見つめ
ると、ウエザーは盗んだ剣を大事そうに抱えると足早に出口へと向
かったのだった。

16話：一夜明けて…（前書き）

スパイがライスコーフにいることを確信したセシル達ですが、めんどくさいことが起こりました

16話：一夜明けて…

夢を見ていた。

ここは……どこだろう。

セシルは目に映る風景を観察した。だがよく見えない。

視界は全体的に白いモヤが掛かったようにぼやけている。

『見つけた』

透き通るような声がした。

前にも見た。時々夢に出てくる、あの女性。

白衣を着た、科学者風の女が、優しく笑いかけてくるのが見えた。

『あなたが、噂の……ね』

何か言っている。答えようと思ったが、声が出ない。

『ああ……そうだけど』

ふいに口から、男の声がした。

自分が発した言葉らしいが、セシルの意味ではない。

意識はあるが、身体は全くセシルの思うとおりにならず、他人のものみたいだ。

幽霊が取り憑くとしたら、こんな感じなんだろうか……なんてことを考えながら、セシルの意識は目の前の女性に集中していた。

セシルの記憶にはない、その女性。

だが、彼女を前にすると、愛おしさや懐かしさ、悲しさなんかいろいろ混ざった感情が沸き上がってきた。

『よろしく……。私は……よ』

肝心なところがいつも雑音が入って聞き取れない。

そこでいつも意識が途切れてしまう……

セシルは薄れゆく意識をどうにかして食い止めようとした。

(もつすこし、あと少しだけ……)

『で、メ……』

身体が何か言いかけたところで、セシルは強制的に夢の世界から追い出された。

ジリリリリリリ！！

けたたましく打ち鳴らされるアラームの音。

さっきまでのまどろみから一瞬にして、覚醒したセシルは、やかましく鳴り響く目覚まし時計を、殴るようにして止めた。

「ああ……なんかすごい後味悪いな……」

もう少して、何か聞き取れただろうに……と思うと名残惜しい目覚めだった。

そして、ベッドに座ったままセシルは考える。

あれは誰なんだろうか。確実にどこかで会ったことがある気がしていた。

(遠い昔……ガキの頃か？ 親父から指輪貰う前の記憶は全く思い出せないけど……)

そうして物思いにふけっていると、ドンドン、とドアを叩く音が聞こえた。

「セシルー、早くしなさいよ！ もうすぐ授業なんだから！」

ドアの向こうから、マールの声が聞こえてきた。

朝っぱらからうるさいやつだ、と思いながらも、さっき殴りつけた時計を見ると、確かにあまり時間がないことに気付いた。

考えるのを止め、慌てて準備を始める。

「ちょ、待って。まだシャワー浴びてない……」

セシルは焦りながら答えた。もちろん冗談だが。

寝間着を着替え、急いでそこら辺に置いてあったパンを口に入れた。

「何がシャワーよ馬鹿。二、三日ぐらい風呂入らなくても死にやしないでしょ」

「二、三日って……お前いちおう女だろ」

「私はもちろん毎日二回は入るけどね」

「あと、髪の毛もセットしないといけないし、今日着ていく服もまだ決まってるないし……」

「あゝ鬱陶しい！ もういいっての！ 早く早くー」

わざとらしくなよなよした声を出してふざけながらも、セシルは凄まじい早さで支度をしていった。

着替えて顔洗って歯を磨いて、あとは散らかり放題の部屋からカバンを発掘するだけだったが、これが一番時間が掛かった。

2分ほど部屋を引っかき回してようやく見つけた。中身は昨日とほとんど同じだ。

「よしOK、行くか」

いつも通り怒られながら、なんだかんだ言いながらも支度を終わって、セシルもすぐに廊下に飛び出した。

「でも、これからどうするんだろうなあ」

「とりあえず指示待ちね。先生がそう言ったんならしょうがないわ」

セシルは昨日のテアナとの話を思い出しながら言った。

本格的にスパイの調査をするらしいが、まだ具体的に何をするかは決まっていない。

マールも、闇雲に動くのが得策ではないことは分かっているので、無茶をするつもりはなかった。

「まあ大人しくしとこうぜ。こないだの試合で、俺ら注目集まってるだろうし」

「それは分かってるけど……歯がゆいわね」

今すぐにも動きたいという気持ちは高まる一方だった。

だが、今はとりあえず授業に出なければ行けない。

留学生として普通に振る舞うのも、任務の一つだ。

セシルとマールが教室に着くと、教室の中は騒然としていた。

騒がしいのはいつものことだが、何か様子がおかしい。みんな、真剣な目をして何かを話し合っているようだった。にぎやか、というよりかは緊迫した空気が流れていた。

「何なのこれ？」

「さあ……」

いつもと違う教室の雰囲気、二人とも首をかしげた。

「おい、二人とも今頃来たのかい？」

二人を見つけたギルが、教室の奥から駆け寄ってきた。

「まあな。てか、なんだよこの空気。朝からなんか重くないか？」

「大変なことになったんだよ！」

そう言うギルの声色は、いつもと違って堅いものだった。

「大変なことって……？」

「今朝のニュースでやってただけだね……王家の遺跡の一つが爆破されたらしいんだ」

「爆破……？」

啞然とするマール。

「へえー。そらまた、物騒なことするやつがいるもんだなあ」

セシルは、頭をぽりぽりとかきながら感想を述べた。向かいの家が燃えないゴミの日に生ゴミを出した！ という程度の話聞いたような反応。

「いまいち、大変さの実感が沸かない。」

「のんきな事言ってる場合じゃないよ！ アルバートの君達にはピョンと来ないかも知れないけど……ライスコーフで王家って言ったら、絶対の支配者だからね」

ギルは大真面目な顔で語った。

（こいつもこんな顔するときあるんだなー）

まだ浅い付き合いだったが、珍しいものを見たような新鮮な気分だった。

そして、更に彼らに近づいてくる人影があった。

「あら、マール。それにセシルじゃない。今来たの？」
そう言いながら、更にメティもやってきた。

「このバカがなかなか起きなかつたからギリギリだったのよ」

「はいはい、すいませんね」

指を指されて、ばつが悪そうに答えるセシル。

「てか、今聞いたんだけど、王家のなんとかが爆破されたって？」

「そうらしいわ。物騒な話よねえ……」

「君ももうちょっと真剣に考えてよ……」

自分の国のことなのに他人事のように言うメティにギルは呆れて肩を落とした。

と、そこで担当教官のティールが入ってきた。

それを見て、浮き足だつて騒いでいたクラス中の人間が一斉に静かになつて、みんな席に着き始めた。

混乱の中に教官という秩序が現れたおかげで、慌ただしく不安定な状態から、ピン、と張りつめた雰囲気となつた。

その様子をじっくり眺めていたティールの顔も、いつになく厳しい。

どうやら本当に緊急事態らしい。

「さて、君達ももう知っているな？ 昨晚、何者かによつて王家所有の遺跡の一つが爆破された。犯行声明などは出ていないが、おそらくテロだと思われる」

そして、ゆつくりと話し始めた。誰も言葉を発さない。固唾をのんで、教官の次の言葉を待った。

「これは明らかにライスコーフに対する挑発だ。ライスコーフの威信をかけて、必ず犯人を見つけなければならぬ。今回は警察には荷が重いため、軍が捜査指揮を執ることになった。そして、このアカデミーの建物は、捜査本部として使われることになった。そのため、アカデミーは休講だ」

休講と聞いて、「お、ラッキー！」とセシルはガッツポーズしそうになったが、さすがにそんな空気ではなかったので止めておいた。

「何かあればこちらから連絡するが、君達は事態が収拾するまで実家で待機してもらおうことになった。今日もこれからすぐに捜査が開始される。なので、今から出来るだけ早くアカデミー内から出るように。以上だ！」

そう言い残して、ティールは急ぎ足で教室を出て行った。そして、その途端また教室はざわめき始めた。

「なんかすごいことになったな」

「テロリストだって。怖いねえ……」

「しばらく授業休みだって、ラッキー！」

等々、口々に言い合いながら、教室を出て行くクラスメイト達。

「さて、と。帰って言われちゃしょうがないよね。僕らも行こうか」

「犯人捕まるまでは休講かー。暇ねえ」

ギルとメティも立ち上がる。

「あなた達も、留学して早々こんな事態になるなんてね……」

メティが、座ったままのセシルとマールを見やった。

「ははは、まあしゃあないよな。テロなんだし！ 授業なんかして場合じゃない」

「嬉しそうにするんじゃないの！」

マールに軽く頭をはたかれたが、まだ微妙にテンションの高いセシルだった。

メティは少し笑ってため息をついて

「その様子じゃ、心配することもあるさそうね。それじゃ、またいつ再開になるか分からないけど……」

「おおー。んじゃ元気だな！」

そう言って、セシルは笑顔でメティとギルを送り出した。

「さあて、俺らも帰るか。帰って寝直そう……」

「帰るって、どこに？」

「どこって、寮に決まってるんだろ」

何を言ってるんだ、という風にマールを見る。

「でも、ティール先生は『このアカデミー内から出るように』って言ったのよ。寮もアカデミーの一部じゃない」

「あ、確かにそうか。実家で待機ってたし……」

「留学生の私たちが、実家で待機って言われてどうしろってのよね……とりあえず、テアナ先生のとこ行きましょうか」

冷静にそう言って、マールは職員室に向けて歩き出した。

「ああ〜めんどくせえ……。最悪だな、テロって」

さっきまでのテンションはどこへやら。うなだれながらマールについていくセシルだった。

職員室に行くまでもなく、テアナは途中の廊下で見つけた。

「ああ、ちょうど探してたところですよ。状況は分かっているとと思いますが、ひとまず寮まで戻りましょうか」

「私達の寮はまだ使えるんですか？ 全員退去するようになると言われたんですけど……」

「我々の部屋だけは、特別に許可が下りました。とりあえず、話は私の部屋で……」

テアナの部屋に案内された。

セシル達の部屋より若干広い気もしたが、それほど大差はないシンプルな部屋だった。

私物が細々と部屋の隅に片づけられていて、真ん中にはテーブルと椅子が用意してあった。

「どこまで聞きましたか？」

席に着くなり、そうテアナは切り出した。

「ライスコーフの王家の遺跡が爆破された、とかなんとか。それで大騒ぎになってると聞きましたけど……」

「そういうわけです」

ふう、とテアナはため息をついた。

「先生、これってやっぱり……」

「はい、まだはつきりとは断言できませんが、アルバートのスパイと関係している可能性があります」

「ん、なんで？ どうかの馬鹿がやらかしたテロじゃないのか？」

セシルが疑問を浮かべた。関連性が分からなかった。

「実は、爆破された遺跡というものの詳細を調べてみたんですが……どうも、内部から爆破されたみたいなんです。しかし、この遺跡は特殊な作りになっていて、とんでもない数の盗賊よけの罠が仕掛けられていたらしいんです。素人はもちろん、そこいらの軍人だってそう簡単に奥まで入っていきません」

「つまりそのテロリストは、凄まじい数の盗賊避けの罠を全てくぐり抜けて最深部まで到達して、そこから爆破したっていうことですね……無茶苦茶だわ」

だが、そんな無茶苦茶をやつてのける人物に心当たりはあった。

ルイス・シュレディングァー。あの神父なら、なんの問題もなくどこへだろうと侵入できるだろう。

時空間を飛び回るあの固定魔法、黒い本の力なら。

「ええ。そこら辺の過激派に出来る芸当じゃありません。となると

……それなりの実力者を抱えた組織が動いている可能性があります」
「その組織が、あの神父の仲間かもしれないってことか」
セシルがそう言うと、テアナも頷いた。

「でも、一体なんのために……？」

「それは恐らく、アルバートと同じです」

「同じ？」

「固定魔法です」

あつ、と言われて気付いた。

あの神父が狙っていたのは、マールのエア・アンカーだった。なら、この国での狙いも同様だろう。

「これだけ派手なことをやらかしたんです。そのリスクを払ってまで手に入れるとしたら、固定魔法しかありませんし。爆破された遺跡に隠されてあつたのかもしれませんが」

「で、でもそれじゃもう奴らに奪われてるんじゃない……」

「……その可能性は、高いですねえ」

そう言うテアナの言葉は全員に重くのしかかった。

すでに固定魔法を手に入れた賊が、いつまでもこの国に長居するとは思えない。

早急に手を打たないと、逃げられてしまつかもしれない。

だが、この緊迫した状況で任務を急ぐことも出来ない。なんせ国中が警戒態勢だ。スパイ活動なんて、できるわけがなかった。

「……困ったわね」

マールが、手に持ったペットボトルを弄びながら呟いた。

歯がゆい。せっかく、スパイがこの国の人間だという確証を得たというのに。

情報だけ与えられて、動けないというのは耐え難いジレンマだった。

「でもさ、なんで爆破なんだろうな」

セシルがポツリとこぼした。

「固定魔法だけ奪って逃げればいいのに、わざわざ遺跡を爆破なんかして。目立つだけだろ、そんなことしたって……なんでかな」

「それは……まだ分かりません。そうしなければ、手に入れられない固定魔法だったのかもしれないし」

テアナにしては珍しく歯切れが悪かった。

結局、向こうのしっぱも意図も掴めていないのが現状だった。情報収集するにしてもこの状況では限度があり、仮説も憶測の域を出ない。

「正直、分からないことだらけです。この状況でどこまで出来るか分かりませんが……私も出来る限り情報を集めます。そして、賊がこの国を抜ける前に……必ず捕らえます」

そう、テアナは力強く断言した。

コン、コン

突然、扉を叩く音がした。

「テアナ・コーランド・イリア先生、いらっしゃいますか？」
「はい？」

テアナは、扉を少しだけ開けて顔だけ覗かせる。ひよろりとした白衣の男が立っていた。セシル達の担任でもあるライスコーフの教官、ティールだった。

「今回の事件について、作戦会議が開かれます。あなたも参加してください」

「はあ……私はアルバートの人間で部外者ですけど、いいんですかあ？」

「構いません。それでは、会議室の方までお越し下さい」

そう言つて、ティールは帰っていった。

扉を閉め、テアナは若干困惑気味にため息をついた。

「はあ……なんだか急に呼び出されちゃいました」

「どうすんの？」

部屋の隅に移動していたセシルが尋ねた。

「呼ばれたからには、行くしかないですね……あなたたちは、とりあえず部屋で待機してて下さい。また何かあったら連絡するんで」

そう言われ、その日はそれで解散となった。

この時はまだ、誰も気付いていなかった。

事態は思ったよりも、悪い方向に行き始めていた。

17話：疑惑の種（前書き）

まるっきり他人事だと思っていたテロ事件が、とんでもない形で関わってきました。

17話：疑惑の種

「あいつか？」

「そうだな、間違いない」

「油断するなよ。あのリリアを退けたんだから」

男達は口々に言いながら、遠巻きに近付いていった。

セシルは、誰もいないアカデミーの中庭を散歩していた。

ここに来た時から目に入っていた、アカデミーの中央にある噴水を見に来ていたのだ。

砂漠の中にあるとは思えないほど、豪快に水が噴き上げられている。こんな砂漠の国では噴水など存在自体が罰当たりなようだが、それと同時にアカデミーの権威を象徴しているかのようにだった。

「ああ〜涼しい……」

時折飛んでくる水しぶきが冷たくて気持ちよかった。

今は王家の遺跡を爆破したというテロリストの対策本部にこのアカデミーが使われているため、今この生徒はほとんど実家で待機している。

留学生であるセシルとマール、それにテアナは特別にここの寮にそのままいても良いということになっていた。

そのため、今はほぼ貸し切りのような状態だった。

他国のアカデミーを貸し切るというのも、なかなか珍しい状況だが。

「しかし、暇だねえ。授業ないと寝放題だけど……さすがに退屈だよな」

テアナは昨日会議で呼び出されてからまだ姿が見えない。

マールは、街に出かけたらしく、セシルが起きた時にはすでにいなかった。

後を追おうかとも考えたが、めんどくさいので止めておいた。

しばらくベンチに座って噴水を眺めていたが、ふとセシルは横を向いた。

こちらに向かってくる何人かの人影を捉えたからだ。

留学生であるセシル達のような例外を除いて、確か今はアカデミーは封鎖中で誰も入れないはずだ。

だが、彼らは、このアカデミーの制服である白い装束……砂漠特有の戦闘服というらしいものを纏っている。

不思議に思いながらも、何の気なしに様子を伺っていた。

だが、突然、セシルの視界から彼らの気配が消えた。

「え!？」

驚いて、身体ごと向き直る。だが、やはりそこには誰もいない。気のせいだったんだろうか……なんて思いながら、座り直した。

「アルバートからの留学生だな？」

「うわあ!？」

驚いて、ベンチから落ちそうになった。

さっきまで少し離れた所にいたはずの彼らは、今セシルの目の前に立っていた。

そしてあるうことが、自分から声を掛けてきた。

3人。制服からして、この生徒には間違いないだろうが、セシルよりも少し年上に見えた。

「こんなところで何をしている？」

「え、な、何って……散歩してただけだけど」

「このアカデミーは封鎖されたはずだ。何故、ここにいるんだ?」
めんどくせえなあ、と思いつつセシルは弁解する。

「留学生は特別にここの寮を使っても良いって許可もらったから……だからまだここに住んでるんだよ」

「……………」
セシルの説明に納得したのか分からないが、表情を変えずに黙ったままだ。

「……………てか、あんたらこそ何だよ？ 生徒はみんな実家で待機だったんじゃないのか？」

その言葉に更に目つきが鋭くなったが、やがて一人が舌打ちしながら答えた。

「……………私たちは、生徒の中で特別に選ばれて、軍の補佐をすることになった警ら隊だ。だから怪しいやつを見かけたら、尋問する権限が与えられている」

そう、目の前の”怪しいやつ”を見ながら言う。

「だから留学生だつての……………」

どうにも居心地が悪かった。相手にせず、さっさと立ち去ろうとセシルはベンチから立ち上がるが

「まだ話の途中だ」

そう言つて、リーダーらしき男は、腰に下げた銃に手を掛ける。言つとおりにしないと、銃を抜く。

その意味が分からないわけでもなく、セシルは仕方なく動きを止めた。

「……………何がしたいんだよ一体？」

うんざりしながら尋ねると、男は重々しい口調で言葉を紡いだ。

「そろそろ本題に入ろうか。お前は……………いや、”お前らは”事件のあった夜、どこで何をしていた？」

そう言つと、男達の目つきが一層厳しくなった。

だが、セシルはその質問を理解するのに数秒かかった。

「え……………」

どういう意味だ？ そう思ったが、言葉が上手く出てこない。

身体中に鉛が巻き付いているように重い。身体も、神経もすり減

らされるような重圧。

今浴びせられているもの、それは明確な殺意だった。下手に動けば戦闘開始となるだろう。

理由はまるで分からないが……。

「答える。まさか抵抗しないよな？」

三対一。まともにやりあつて突破するのは不可能だろう。

ちらちらと目線を動かして逃げ道を探してみたが、気が付けば三角形に包囲されていて、とても抜け出せそうになかった。

「逃げられない、か……」

セシルは小声で呟く。

「やはり喋らないか。連行して、尋問だ」

そう言い、膨れあがった敵意を持ったまま歩み寄ってくる。

セシルが親善試合で、あのリリアを下したのはアカデミー中に広まっていた。年下相手とはいえ、油断など一切無く、微塵も隙はなかった。

だが、彼らは突然その動きを止めた。

「何してんのよセシル」

凜とした、聞き慣れた声が響いた。

買い物袋を下げたマールが、中庭の入り口のところにいた。

いつの間にか、街から帰ってきたらしい。

「マール・アイボリー……」

3人の視線が一点に集まる。

警ら隊の彼らは、マールの方へと向き合った。

そしてその瞬間、さっきまで鉛が巻き付いているようだった身体が急に軽くなった気がした。

それは気のせいではなく、いつのまにか足も動くようになっていく。セシルは心から安堵して、ため息を吐いた。

もう助かったも同然だったから。

「街から帰ってきてみれば……何の騒ぎ？」

「いきなり襲ってきたんだよ、こいつらが」

そう言って、三人の男達を指さす。

「ライスアカデミーの……あんなにかしたの？」

マールは彼らを一瞥してから、セシルに問いかけた。

「いんや、全然。座ってたらいきなり絡まれて……」

「お前らがやったんだろ？」

今度はマールとセシルの両方に銃口を向けながら、男が言った。

「お前ら留学生が来た途端、起きた事件だ。今までライスコーフでこんなことは一度もなかった」

三人の男達は、そう言いながらギツと睨み付けてくる。

どうやら、最初からそれが言いたかったらしい。

だがあまりに突然のことで、セシルも、そして隣にいるマールも呆気にとられていた。

「何かと思えば……いきなり何言ってるの？」

「とぼけるな！ スパイ野郎が！」

そんなセシルに、男達は声を荒立てる。話はまるで噛み合いそうに無かった。

そこで緊張はピークに達し、切れた。

「捕らえるぞ。話はそれからだ」

リーダー格らしい男が命じると、次の瞬間、3人が一斉に襲いかかってきた。

1人は一気に加速して真正面から疾走してくる。

1人は地面を蹴って横から回り込んでくる。

そしてもう1人は、跳躍して上から飛びかかってきた。

連携も完璧で、凄まじい早さで攻め立ててくる。

普通なら身構える隙も与えない攻撃だったが、マールはすぐに反応した。

一人目の拳を滑らかに避けると、足を引っかけ、背中を押してそ

の攻撃の起動を変えた。

それを勢いよく横から回り込んでいた男に向けさせると、その勢いが仇となり、二人はお互いの攻撃を食らい合って自滅した。

最後に、上から飛びかかってきた男に対して、マールは男が落ちてくるタイミングを見計らって、同じ高さまで飛び上がると、身体をぐるりと捻って回し蹴りを放った。

空中でもろに食らい、受け身も取れずに男は腹を抱えながら地面を転がっていった。

「正当防衛よ」

最低限の動きで3人を倒し、

パン、パン、と手を払って転がった男達を眺める。

「逃げなくてもよかったか……」

実際には一秒も掛かっていない攻防だったが、見事な手際だったが、セシルはさっきこの男達が言ったことを思い出して、不安を膨らませた。

「てかさ、まさかとは思うけど……こいつらもの凄い勘違いしてるよな」

「そうみたいね。……私達が、遺跡の爆破テロの犯人だと思ってるみたい」

予想外の展開だった。

まるつきり他人事だと思ってたテロ事件が、まさかこんな形でしわ寄せがくるとは。

マールはしばらく考え込んでいた。これからどうすればいいのか。名案は……浮かばない。だが、ここにはまずい気がした。

「セシル、一旦ここを出るわよ。街の方まで行って、人混みに紛れましょう」

「そうだな……でも、まじかよ。なんでいきなりこんなことになるんだ」

そう、心底疲れた顔でセシルは呟く。それはマールも同じだった。

「分からないわね、今は何も……。とにかく急がないと」
そう言って、門の方まで二人は歩いていった。
そして、アカデミーを出る手前で立ち止まった。
そこにいたのは……

「……セシル、マール……」

「まさかこんなことになるなんてね」

「残念だな」

リリア、ダリオ、ジノーヴィの三人が、道を塞ぐようにして並んでいた。

「お前ら……」

「なんのつもり？」

「君達に、今回の事件への関与が疑われている。抵抗しないでほしい」

三人のリーダー格である、ダリオが銃口をセシル達に向けた。

「お前らも警ら隊ってわけか……」

彼らが、実力で言えばさっきの男達よりも上であろうことは、容易に想像できた。

セシルはどうするか考えていた。二つに一つ、逃げるか、戦うか。とは言え、強行突破は現実的な手段ではなかった。2対3では分が悪い。おまけにライスアカデミートップクラスの3人だ。

「本部まで来て尋問を受けて貰おう」

そう言いながらダリオは、意外なほどゆっくりと歩いてきた。

だが、余裕や油断、侮りの類は欠片もない。最大限の警戒心と集中力を保つには、これでも早いほうだった。

銃を向けながら全く隙のない動きで、少しずつ距離を縮めてきた。「いったいどんなデマが流れてるか知らないけど……」

それを阻止するように、マールが口を開いた。ダリオの目を見ながら、極めて落ち着いた様子で言い放った。

「私たちは、無実よ」

静かだがはつきりと発せられた言葉が、静かなアカデミーの門前に響く。それに、少しだけダリオの動きが止まった。

「そ、そうだって。一回落ち着こうぜ」

この場で三人相手の戦闘になるのだけは避けたいところだった。ダリオはしばらく考えていたようだったが、首を縦には振らなかった。

「……話は、本部で聞かせてもらおう」

決裂。その一言がきっかけとなって、後ろに控えていたリアとジノーヴィイも臨戦態勢に入る。

もし、少しでも何かする素振りを見せれば即座に、例え力ずくでもセシルとマールを捕らえられるように。

「仕方がないわね……」

マールはため息をついた。

はつきり言つて、本気でやれば戦って切り抜けることも不可能ではなかった。

だが、ここでそんな無茶をする意味はない。誤解が解けたとしても後々厄介なことになるだろう。そう判断してのことだった。

二人に抵抗する意思がないことを確認したりリアとジノーヴィイも、ダリオの指示で警戒を解いた。

「……ごめん」

「すまねえな。俺たちも本当はこんなことやりたくねえんだけどよ」
悲痛な声でそう言われ、手錠や縄こそ付けられなかったものの、周りを囲まれて進んでいく。

セシルとマールは、クラスメートに連行されてライスコーフの軍本部に行くことになった。

18話：疑惑の檻（前書き）

ダリオ達3人に、軍の本部まで連行されたセシルとマール。そこでテアナと再会します。

18話：疑惑の檻

「……もう一度聞きます。事件の夜、あなたは何をしていましたか？」

円卓のような机の前に、ライスアカデミーの教官だけでなく軍の幹部も数人座っており、そこでテアナは上座の位置に座らされた。彼らが一人一人、テアナに向けて質問してくる。

「眠れなかったので、街の方まで散歩に出かけていましたねえ」
事件当日の夜の出来事や、ライスコーフに来てからとった行動について細かく聞かれた。

「なるほど……」

答えるたびに、端に座っている男がメモを取った。最初は妙だと思ったが、すぐにテアナは感づいた。

今回のライスコーフでの爆破事件を、アルバートから来た自分たちが仕組んだのではないかと疑っているのだろうと。

そしてこれは会議などではなく、尋問だ。
平然として答えるテアナだったが、その心境は穏やかではない。

例の情報収集のため、事件があった夜には街へ出かけていたのだが、それをたまたまアカデミーの関係者に目撃されていたらしい。それを正直に言うわけにもいかない。
遺跡の爆破はしていないが、スパイ活動はしていたのだから。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「留学生の二人を、連行しました」

そう言いながら、5人の生徒達が姿を現した。

ダリオ、ジノーヴィ、リリアの3人と、アルバートの留学生であるセルとマールが後ろに並んでいた。

(……やっぱりこうなりましたか)

内心ため息をついて自分の生徒二人を見つめる。

テアナと目があつた二人は、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ご苦労、あとは我々がやる。下がっていいぞ」

「はい」

役目を終えて、退室する。リリアは一度だけ振り返り、不安そうな顔で二人を見つめていたが、ダリオに引つ張られて出て行った。

セシルとマールは、テアナの横に座らされ、ライスコーフの軍幹部と向かい合わせになった。

「さて、もう話は聞いているだろう。君達は、例のテロ事件の重要参考人だ」

幹部はそう切り出した。

「どうして私たちが、そういうことになるんですか？」

マールがそう切り返す。

確かに極秘の情報収集はしていたが、ばれないように細心の注意を払っていたし、テロとの関連を疑われるようなことは何もしていない。心当たりはまるで無かった。

「私たちが外国人だからですか？ それならちよつと強引すぎ……」

「そういうわけではない。目撃証言があつたのだよ」

幹部は資料を見ながら言った。

「事件の前の深夜、君らアルバートの人間が出歩いているのを見たという証言があつたからね。まだ今は調査中だが、いずれ事実関係ははっきりするだろう」

言葉は濁したものの、アルバートの3人ともに疑いの目は向けられていた。

「目撃証言……って、んな馬鹿な!？」

「……」

「それで、私達をどうするつもりなのですか？」

言葉を失うマールの代わりにテアナが冷静に尋ねた。

「別に。今まで通り生活してくれて構わない。ただ、事件が解決するまで、滞在期間は延びるだろうが……」

「軟禁状態にするつもりですか」

テアナは少し語気を強めて幹部を睨み付けた。それに一瞬だけ、後ろに控えていた兵士達がざわめいたが、幹部はそれを軽く手を挙げて制止する。

「気を悪くしないでくれ。お互いのためだ。外交問題にはしたくないだろう」

そう言っただけで平然と受け流す。

「……仕方がないですね」

確かに、下手に抵抗して同盟国間の関係が悪化したら最悪だ。テアナは黙るしかなかった。

その後、セシルとマールも簡単な質問の受け答えだけして、その日は解放されることになった。

三人とも、ひとまず寮に戻って待機することになったのだが、帰りの足取りは重かった。

「なんでこんなことに……」

重苦しい雰囲気の中、マールが口を開いた。

「よりによって、こんな時に目撃者がいたなんてな……」

情報収集のために街へ出かける、ということ自体は毎日やってきたことだった。

こんな事件が無ければ、怪しまれる行動ではなかっただろう。

「間が悪かったよな……」

「いえ、違います」

すると、今まで黙っていたテアナがはっきりとした口調で断言した。

セシルとマールは訝しげにテアナを見つめた。

「やっと分かりましたよ。なんでスパイがわざわざ遺跡を爆破した

のか」

「え？」

「どうということ？」

テアナは歩きながら語り始めた。

「あの神父……スパイの目的は、固定魔法です。この国にも、おそらくあの爆破された遺跡の中にあつたはずです。それを手に入れて、さっさと逃げ出すつもりだつたんでしようけど……そこへ私達が現れた」

二人はうんうん、と相槌を打つ。テアナは続けた。

「それを何らかの形で知つた神父は、急遽予定を変更して、遺跡を派手に爆破するという事件を起こしたんです。時間稼ぎと、私達への足止め工作のためだね」

「ちよ、ちよつと待つて……よく意味が分からないんだけど」

セシルが慌てて話を遮つた。頭がこんがらがつてきたらしい。

「つまり、私達をテロリストに仕立て上げるために遺跡を爆破したつてことです。私も、こうなるまで予測できなかったんですが、その目論見の結果は見ての通りです。目撃証言一つで、この有様……なにしろ私達が来た直後に起きた事件ですから、軍の人間は当然私達に目を付けるでしょう」

「あ」

「なるほどね……私達の活動のタイミングを見計らつて、事件を起こしたつてわけね。そこから先、ライスコーフ軍が私達アルバートの人間を疑うことまで計算して」

セシルとマールはようやく理解した。

テアナは大きく頷いた。

「とはいえ証拠なんてありませんし、この疑いはいずれ晴れるでしょう。でもそれまでは私達の行動はかなり制限されます。ライスコーフ軍だつて、私達を野放しにはしませんしね」

まさに軟禁状態だつた。そしてそうなる……

「じゃあ先生、スパイの情報収集……俺らの任務の方はどうなるん

だよ？」

「テロへの関与を疑われてる今の状況で、スパイの情報収集なんて出来ません」

「そんな……」

「疑いが晴れる頃には、とっくに遠くへ逃げおおせているでしょうね」

そしてそれつきり沈黙が続く。

三人とも、表情は暗かった。

敵の思惑通り、完全にしてやられたのだ。セシルは空を仰ぎ、テアナは唇を噛みしめ、マールは……手の平に穴が空きそうなほど拳を握りしめていた。

途中でテアナと別れ、セシルとマールは、すごすごと寮内に戻っていった。

ライスコーフ軍の監視の元におかれ、スパイの情報収集はおろか普通の生活にすら息苦しさを感じる。

なんとなく、自分の部屋に帰る気にならなくて、セシルはマールの部屋で大の字になって寝ころんでいた。

一時間近く、二人は特に何をすることもなくぼーっとしていた。

「残念だよな」

唐突に、セシルがため息を吐きながら呟いた。

「完全に相手が一枚上手だったわね……」

重い空気はなかなか晴れることはなかった。

テレビを付ければ、どの番組でもこの間起きたテロ事件のことはかなり報道していた。

やはりギルの言っていた通り国の一大事らしく、国中で娯楽が中断され、事件の行方に注目していた。

『……さて、ここで新しい情報が入ってきました』

『今回のテロ事件ですが……外国人による犯行である可能性が……』
『そこまで聞いたところで、ニュースを読み上げていたアナウンサー』

「がぐにやりと変形し、一筋の光を放って、テレビは真っ暗な画面に戻った。マールが電源を落としたらしい。」

「……これからどうするよ?」

「大人しくしてろって先生も言ってたし、そうするしかないんじゃない? どのみち、今は動けないし」

「なんか急にやる気なくなっただな」

「あんたはまだやる気あるの?」

「いや、俺は最初から全く……」

話しながら、どんどんマールの元気はなくなっていった。

そして、もぞもぞと腰掛けていたベッドの上の方へ移動していき、その中へ潜り込んだ。

「そう……なんだか今日は疲れちゃった。私、ちょっと寝るわね」

「ん、ああ」

(やっぱり、ショックはでかいだろうな……相当疲れてるみたいだし)

セシルもここまでマールが弱るのを見るのは久しぶりだった。

どうも調子が狂う。こういう時にどうという言葉を掛ければいいのか、セシルには見当も付かなかった。

「んじゃ、俺もそろそろ部屋に戻るわ」

「……え、戻るの?」

「お前が寝てるのに、俺がいたらおかしいだろ」

「別にいてもいいのに……」

「ゆっくり休めって。おやすみー」

一人にしてやったほうがいいだろう、というセシルの微妙な配慮でもあった。

そうして、セシルはすぐ隣の自分の部屋に戻ってきたのだが……

(落ち着かないな……)

いざ、何もするなと言われると逆に何かしたくなる。

そんな困った気分になることもある。今まさにそんな感じだった。

(よし、街へ出よう！)

何もするな、という重圧に対する、ささやかな抵抗だった。

セシルは一人で……といっても、どこかに監視の目はついているのだろうが、街の方まで宛もなく歩いていった。

街は、爆破事件の影響からかいつもより人通りは少なかった。

みんな、警戒して家から出なくなってしまうたのだろう。いつも賑わう市場も、人はまばらだった。

(なんだよ……まあしょうがないけど)

気晴らしに来たというのに、なんとも残念な気持ちになった。

暇そうな商人達の顔を見ながら、プラプラと歩き回る。

そんななか、誰かが声を掛けてきた。

「セシル」

そう言っつて、被っていたフードを取り去る。

見覚えのある褐色の肌と、水色の髪。

「あ、ステレイア……だっけ？」

「ああ、久しぶりだな」

以前、暴漢に襲われているところを助けに入ったことがあった。

数少ないこの国での知り合いの一人だ。

「お前、こんなところで何してんの？」

「商売さ。絵描きが絵を売らないでどうする」

足元を見ると、何枚かの油絵が置かれていた。

「どうだ、すごいだろう？ これがなんと、普段の30%オフだ！」

「叩き売りだな……」

上手い、とは言い難いが、なかなか情熱的な色遣いの風景画だった。

セシルに絵心はなかったが、これはこれで味があるなと感じた。

「客が減ってしまっていてな。暇なんだ」

「お前もか……」

だが、あんな目に遭ったというのに気丈に商売を続けているステ

レイアの姿を見て、セシルはほっとした。

「でも元氣そうでよかったよ」

「あれくらいじゃ私は追い出せないな。……それより、セシルは今何をやっているのだ？」

「俺？ 俺は学生だけど今は……プー太郎だな。あの事件のせいで今は何も身動きが取れない状態なので、それは嘘ではなかった。

留学生活も、事件が解決するまで無理だろうし、スパイの情報収集はもつと無理だ。今もどこかで監視の目が光っているに違いない。

「そうか……なあセシル」

「ん？」

「お前、どうせ暇なら私の手伝いをしないか？」

「……え？」

「給金は弾むし、三食昼寝付きだぞ！」

ステレイアは、何故か偉そうに胸を反らしながら言った。

「……まあ暇だからいいけど」

どうせ無期限軟禁生活の身であり、事件が解決するまで、持て余した時間など腐るほどあった。

「よし、じゃあさっそくだが私はこれから街の外まで絵を描きに行く。お前には荷物持ちをやってもらおう」

「って、雑用係かよ！」

「その通りだ。さあ行くぞ、バイト君」

普段なら絶対断っているだろうが、この時ばかりは気が紛れれば何でも良かった。

ステレイアに引っ張られ、セシルは街の外れへと歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1495e/>

チェイン

2010年10月28日06時25分発行